（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　　宰主　上田啓之

「出雲国風土記」問　　 **はじめに　　出雲国風土記の成立　　出雲の由来　　天地の開闢　　稲の由来　　天の意　　玉の世界
不老不死　　風土記の天神　　出雲の天の下の神々　　ある物語　　おわりに****はじめに**

　コタンカラカムイはこの世界を創造した神という。その頃の世界は谷地（やち）であり水陸は混沌として、広漠たる沼、霧のような有様で、土は漂々（へうへう）として果てしない霧雲（むうん）の上に浮かび、沈憂（ちんいう）空漠として生命を有するものはなかった。コタンカラカムイはセキレイをつくって降し、世界を設備させた。
　セキレイはどうしてよいか分からず、両翼ではばたいたり、足で谷地の盤面を踏んだり、尾羽でその上を打つことを繰り返していると、谷地がかわいて陸地となり、水は海となり、海と陸の境が明らかになった。コタンカラカムイはセキレイの働きを賞し、自らも「大まさかり」と「くわ」で荒れ地を開き、セキレイは羽根でそこを平らにし、平地ができあがった。コタンカラカムイは、「くわ」や「大まさかり」や「つち」を六十ほど、そのままに捨て置かれた。それらが朽ちると、ある者はウエンカムイ（悪鬼）、ある者はウエンワツカ（悪水）、ある者はウエンビボツクの木になった。この木はシハバブ（病神）を樹皮にひそめていた。ウエンカムイの祖主をニタツウナラベ（谷地の鬼母）といい、トイヘクンラ等々多くの魔神を生んだ。
　コタンカラカムイは、更に六つの天をつくり、また、この世界の下に、六つの世界をつくった。第一最下の天をランゲカント（つるす天）、第二の天をノーチュオカンド（星を有す天）、最上の天をシニツカンド（雲高き天）と命名し、シニツカンドの周囲に鉄壁を築き、入り口に鉄門を設け、その奥に金銀をちりばめた宮殿を築いた。地下につくった六つの世界の第一を（地上より数えて）ボクナモシリ（地下の獄）といひ、次をニツテネカムイモリシ、または、テイネボツクナモシリ（悪魔の国、地下のうるほひたる国）といひ、最下のものをチラマモシリ（最下の世界）とよんだ。かくて天空と地下の世界を作り終えたので、人間を創造することとなった。
　コタンカラカムイは、土で身体、ハコベで毛、柳の木で背骨を造った。これを地上において、人間の住む場所として、カンナモシリ（上なる世界）ウエカリウヲテレケモシリ（人々相互に足を踏みあふ処）ウアレモシリ（相互に繁殖する世界）の三カ所をつくった。更に、コタンカラカムイは人間の生活に必要な鹿、兎、魚等々、諸々の生物もつくった。（アイヌ神話　中田千畝　国立国会図書館デジタルコレクション 「[HP](http://www.dl.ndl.go.jp/info%3Andljp/pid/982448)」を筆者が簡略化す）。
　中田氏はこの後に、「創世記（旧約聖書）」、「エジオットの詩」、「ホーマー（ホメロス）」「北欧神話」、「古事記」の天地創造の記述を引用しておられる。世界の各地の民族は、それぞれの始祖の事績の歴史を伝えてきた。その伝承は生き残った民族のものが残り、滅びた民族のものは失はれるか、生き残った民族のもののなかに形を変えて組み込まれることになった。アイヌ種族は縄文人のなかで、大陸や半島からの渡来人との混血を嫌い、東北、北海道において狩猟文化を維持した種族とされる。古来より文字がなく、口伝されてきた創世の伝承には、縄文時代に遡るものがあるとみなされている。
　天の下を平定した大国主神を輩出した出雲世界であるなら、本来、このアイヌの伝承のような、その創世に関する伝承があって不思議はない。出雲大社は平成の世に至り、綿々と存続し続けているものの、その伝承はまとまったものとしては無いに等しい。古事記に改変、吸収されたものか、出雲風土記に、その痕跡が散見されるにすぎない。

**出雲国風土記の成立**

　まず、年表を確認しておきたい。
　天武十年（681）天皇は帝紀及び上古の諸事を記し定めしめたまふ。
　和銅四年（711）太朝臣安万侶に対して、稗田阿礼の誦むところの天武天皇勅命の帝皇日継と先代旧辞を撰録せしむ。
　和銅五年（712）太朝臣安万侶、帝皇日継と先代旧辞とを統一併合して、上中下三巻の筆録を献上。古事記
　和銅六年（713）「風土記」撰進の官命
　霊亀二年（716）出雲臣果安「出雲国神賀詞」を元正天皇に奉る
　養老四年 (720) 舎人親王、日本紀を修め奉勅す。是に至り功成り奏上す。紀三十卷系圖一卷
　　　　　　　　「続日本紀」においては「日本書紀」を「日本紀」であるべきとした。系図一巻は失われた。
　養老五年（721）出雲臣広島、国造に就任す。
　天平五年（733）出雲国風土記献上。勘造、秋鹿郡人　神宅臣金太理、国造、出雲臣広島
　風土記撰進の趣意は、「続日本紀」にみられ、「制す。畿内（うちつくに）と七道諸国の郡(こほり)・郷(さと)、名は好(よ)き字を著(つ)けよ。その郡内に生(な)れる、銀(しろがね)・銅(あかがね)・彩色(いろとり)・草・木・禽・獣・魚・虫等の物は、具(つぶさ)に色目(しなじな)を録(しる)し、及(また)、土地(つち)の沃(こ)えたると塉(や)せたると、山・川・原・野の名号(なづ)く所由(よれるよし)、又、古老(ふるおきな)の相伝(つた)ふる旧聞(ふること)異(あだ)し事(こと)史籍(ふみ)に載(しる)して言(まを)して上(たてまつ)れ」とある。

　風土記は、本来、中央政府が律令制を貫徹させるために各国の地勢を把握するもので、戸籍、計帳と併せ中央派遣の国司に管轄させ軍団の整備を図るものでもあった。その編纂には、郡司をはじめ、その地の役人に素材を提出させたのであろうが、編纂の責任は国司にあった。その地の古老の伝承を収録することも考慮としたが、二次的なものである。また、郡や郷の名については、古事記や日本書紀の天皇や神々と関連づけた由来談が形成されていることが多く、それを収録すれば事が足りたようである。しかし、出雲では事は単純ではなかった。
　出雲には各地にそれぞれの祖神の古伝承があった。大国主神の出雲平定により、その下に伝承が組み替えられたことであろう。更に、大国主神が「国譲り」をしたとされ、出雲の神々がヤマトの皇孫を守護するという極めて特殊な構造が採られた。双方の融和が語られるが、出雲のすべての氏族が従ったわけではあるまい。旧来の祖神を守ろうとする者は追い込まれたことであろう。それは、崇神朝での神宝事件、倭建命（日本武尊）の西日本の平定、欽明朝以来の物部氏や蘇我氏などの中央氏族の進出という状況においてもみられた。中央政府の統制が強化され、それに乗り遅れまいとする者は、自らの祖神の社にヤマト政権が祭祀する神や仏を加えたことであろう。そのような複雑な事情を抱える出雲である。「出雲国神賀詞（かむほぎこと）」を奏上した果安の時、日本書紀編纂に参画していた忌部連首（いんべのむらじおびと）が国司であったことが、ヤマト政権との調整に大きな役割を果したことであろう。
　国造家は皇孫を守護するという立場を貫徹する。国造家は各郡については各郡の郡司以下に記述を提出させ、秋鹿（あいか）郡（こほり）の人の神宅臣（みやけのおみ）金太理（かなたり）に調整をさせた。皇孫守護の立場からすれば、古事記の記述の根底を揺るがすものは採用できまい。また、日本書紀が完成されれば、その記述との整合性を図る必要も生まれたであろう。各郡の記者には、記述の変更に不満もあったことだろう。その政治的な調整には、国造の出雲臣広島が当ったことになる。広島は国司との調整も図らねばならない立場にもあった。広島が就任して以降、編纂完了までに10年強、全体で20年強を要したことからすれば、その調整に大変な苦労があったとみなければなるまい。

**出雲の由来**

　出雲国風土記は、出雲国の出雲たる所以を、「国引き」を為した八束水臣津野命（やつかみずおみつのみこと）が発したことば、「八雲立つ出雲の国は、狭布（さぬの）の稚国（わかくに）在（な）る哉。初国（はつくに）小（ちひ）さく所作（つく）れり。故（かれ）、作り縫（ぬ）はむ」によるとする。意宇郡母理郷条の所造天下大神、大穴持命のことばに「但（ただ）、八雲立つ出雲の国は、我（あ）が静（しづ）まり坐（ま）す国と、青垣山（あをかきやま）廻（めぐ）らし賜ひて、玉珍（たま）置き賜ひて守（も）りたまふ」とある。出雲以外に平定した国は譲るが、出雲については、自分で守る決意を示された。しかし、これは変容せしめられる。
　古事記は、須佐之男（すさのを）命が櫛名田比売（くしなだひめ）に「八雲立つ出雲八重垣」を作ったことを出雲の由来とし、その地を「心すがすがし」で須賀とし、初めて宮を造ったとする。須佐之男命と櫛名田比売の結婚が出雲の始まりであり、二人をその祖とした。
　櫛名田比売は、足名椎（あしなづち）と手名椎（てなづち）の子、この二人は大山津見神（おほやまつみのかみ）の子、大山津見神は速秋津日子（はやあきづひこ）と速秋津比売（はやあきづひめ）の子とされ、その先は伊邪那岐、伊邪那美に帰す。つまり、出雲の先住者を天神（あまつかみ）が生みだした国神（くにつかみ）であるとする。「くに」とは土、地でもあり天（あめ）の下のことであり、ここでは国家のことではない。
　須佐之男命も追放されたとはいえ、元来は伊邪那岐（日本書紀では伊弉諾と伊弉冉）の子、天神であり、出雲の祖を天神とした。そして、八束水臣津野命を淤美豆奴神（おみづぬのかみ）とし、また、大国主神（大穴持命）をその二代後として、須佐之男命と櫛名田比売の系図に組み込んだ。この二人（八束水臣津野命と大国主神）を、天神を祖に持つ国神と位置づけた。
　また、出雲国造家の祖を、須佐之男命が天の安の河の誓約（うけひ）において生んだ第二子、天之菩卑能命（天菩比神、天穂日命）と定め、ことごとく高天原の天神と関連付けた。そして、大国主神は、出雲を含めて「国譲り」をなしたと記述した。出雲の世界に、高天原とは別に、独自の天があるというような見解は許容されなかった。
　では出雲とはどういうものであったろうか？

　出雲（いづも）とは雲が出ること。通常「雲が山から湧きあがるさまは、ものが盛んに生成する力を感じさせる」という程度の説明で終わることが多い。雲は云と雨からなるが、云がその初文とされる。薄いものではなく、こんもりとしたもの、そこに何かが含まれているような塊であり、云には龍が潜んでいると古代中国人は意識した。黒い積乱雲ともなれば、稲光を放ち、雷鳴を轟かせ、落雷し、豪雨が訪れる。稲光を申と記し、申を神の初文とした。古代人は、雲に秘められているさまざまな力を感じた。雲は上昇して山頂を越え天に至り、天より下降して山野に至る、いわば天地を往来する乗り物でもあった。雲には色々な種類、役割があり、八雲が立ち出る処に、多様な力をみた。
　アイヌ神話がそれを感じさせてくれる。アイヌ神話は、古事記や日本書紀のように、中央政権が正統として編纂させたものはなく、部族や集落による独自の伝承を残している。幕末、夕張郡タツコフ集落（コタン）の老爺が伝えた話に雲にかんする伝承が含まれている。
　「かつて、まだ国土というものがなかった頃、青海原の中に油のように浮いて漂うものがありました。その"気"は燃え立ち、清らかなものは立ち昇って天に、濁ったものは凝り固まって島（モシリ）になりました。これは今の後方羊蹄（シリペシ）の岳であるといいます。島は月日を重ねるごとに大きく堅くなり、その"気"が凝り固まって一柱の神になりましたが、天でも その清く明るい"気"が凝り固まって一柱の神になり、五色の雲に乗って降りてきました。
　神々は、乗っていた雲のうち青いところを海の方に投げ入れて言いました。『水になれ！』。すると海になりました。
　次に、黄色い雲を投げると土になり、島を覆い尽くしました。
　次に、赤い雲を蒔いて言いました。『金銀珠玉器財となれ！』
　最後に、白い雲を蒔いて『草木鳥獣魚虫となれ！』と言いました」
　こうして様々なものを整えましたが、二柱の神は「誰がこの国土を統率していってくれるだろうか」と心配しました。というのも、世界にはこの二柱の神しかいなかったからです。
　その時、二神の前にフクロウが飛んできました。フクロウはその大きな目をパチパチとしばたたかせましたが、それを見た二神はとても面白いと思いました。そして、この時二神で何かをしました。それが何だったのかは語られていませんが、とにかく、それによって沢山の跡継ぎの神々が産まれたのでした。
　こうして産まれた神々の中に、日神（ヘケレチュッフ）と月神（クンネチュッフ）という光り輝く麗しい二神がありました。その頃、国は深い霧霞（ウララ）に包まれて薄闇の中にありましたが、二神はこれを照らし出そうと、黒い雲に乗って日神は雌岳（マチネシリ）より、月神は雄岳（ヒンネシリ）より昇天しました。この黒い雲は、親神が世界を整えるのに使った五色の雲のうち、残った最後の一つです。こうして太陽と月が天を巡ることになり、世界は明るくなりました。（かんたん神話学、[HP](http://suwa3.web.fc2.com/enkan/kantan/jp_hon/frame_a.html)）」。
　古事記では、豊雲野（とよくもの）神が国之常立（くにのとこたち）神に次いで成ったとする（この二神については、後にみることとする）。こういう神話が残されていることからすれば、出雲において、八雲に関する伝承があってしかるべきだろう。

**天地の開闢**

　我が国の人々は、相当早くから日本列島が島国であることに気付き、大八島とさまざまな島からなることを理解していた。古事記をみても、矛の先で海をかきまぜ、矛の先からポタポタ落ちたものが固まり、島となって、そこに降りたとする。海が前提となり、如何にしてそこに島が出来たかを問う意識があった。
　さて、上に空というか天があり、山野河川湖沼海岸に人が住み、足元に地がある。島国の住民は、海に囲まれ、海に糸を垂れて底に届かぬように、陸の地下も底なしに深いと思ったことだろう。大陸の人間は天上、天下、地下を考え、河の彼方に海があると考える。島国の人間は海がありきで、そこにどうして島が産まれたかを考える。
　古代中国人は、天地は始めから分かれていたものではなく、茫漠、混沌として区別のない状態から、天地に分かれたと考えた。卵の中が白身と黄身に分かれるごとく、上下関係ではなく、地は丸く、空と海の間に浮いていると考える者もいたが一般には受け容れられなかった。上下の分化は、軽く薄く微少で清く明るいものが上に、重く厚く巨大で濁り暗いものが下に集まったと考えた。天は清明、地下は濁暗、人の住む地はその中間とした。天は不滅の神、地は寿命のある人と動植物、地下は死せる人や動植物の住む処と区分する。天の清明を学び体得するものは聖人となり、地下の濁暗に染まるものは悪鬼となる。主は天にあり、天の秩序を地に実現することで、安寧な生活が送れると考えた。
　天の秩序は太陽、月、星辰に現れる。太陽は一日と四季を制し、月は一月と干潮満潮を制し、歳星（木星）が12宿（星座）を巡り12年を正した。天全体を北辰（北極星）が制し、それぞれの星や星座にそれぞれの役割があるとみた。司馬遷の天官書、律書に、「天の中宮は北極星座、最も明るいのは太一（神）の居。そばの三星は三公あるいは太子。うしろの四星の末は正妃、三星は後宮。そのまわりの十二星は藩臣。すべてを紫宮という。北斗七星は天帝の乗車で、天帝はこれに乗って天の中央をめぐり、四方を統一し、陰陽を分け、四季を立て、五行の活動をなめらかにし、季節を移し、諸紀を定める」とある。
　種が芽を出し、茎や枝葉を生長させ、花を咲かせ、実をつけ、種となって落ちる。その時を知り、それに相応しい仕事を行う。人が、家畜や農耕や漁労を始めると、季節による管理が重要になる。海を行くには、潮の干満、その流れ、風に合わせねばならなかった。人が社会生活を行うと、時の管理と周知が不可欠となる。カレンダーや時計のない世界にあって、各人が時を共有することは難しい。できねば、てんでばらばらで、約束事が成立しなくなる。一日の仕事、旬(10日)の仕事、月の仕事、季節の仕事、一年の仕事が共有され、かつ、天の運行と合致すれば、成果を手にすることができた。
　古事記の「序」をみれば、太安万侶が中国の天地開闢論に通じていたことが分る。しかし、彼はそのまま採用したものではない。天地が分かれたとき、天に、造化を推進する三神（天之御中主神、高御産巣日神、神産巣日神）が現れ、隠れたとする。そこから、伊邪那岐、伊邪那美への道筋を示し、海の中に島を造る伝承へとすすめた。島を造るには、土石が必要である。海を矛でかき混ぜ、凝固したものを垂らすと島となり、そこに降りて、この二神が島を生む。
　アイヌ神話では、青海原に油のように漂うもののうち、清らかなものが天となり、濁ったものが凝固して島となり、成長をしたとする。海が前提でそこに島の種のようなものができ、万物は小さく生じて大きく成長するごとく、成長して大きな島になったと考える。
　古事記では、国（くに）は浮いた脂（あぶら）で海月（くらげ）のように漂っていた。「くに」とは土、地でもあった。それを「あしかび（宇摩志阿斯訶備比古遲神）」と云い、それは「うまし（満ち足る）」もので、「ひ（霊）」「こ（微細）」「ぢ（地）」であり、泥や砂となる元素であった。つづいて、天の「とこ（土台）」を立てる神（天之常立神）と「くに（地）」の土台を立てる神（国之常立神）、天地を往来する豊かな「雲」の神（豊雲野神）が現れ隠れる。その後に泥や砂となる神（宇比地邇神、須比智邇神）、それを留める杙（くい）の神（角杙神、活杙神）、まぐあいをする両性の「と（門）」の神（意富斗能地神、大斗乃弁神）、美しき面（おも）となる神（淤母陀流神）、畏れ敬する（かしこむ）神（阿夜訶志古泥神）、そして、伊邪那岐、伊邪那美に至る。島を生む材料、それを海に固定するもの、交接により島を生み出す両性、両性が惹かれ合い畏れ敬うことが、「くに」生みに必要と考えたのだろう。

　本来なら、出雲にも同じ疑問に応える伝承があってしかるべきである。古事記に吸収されたのであろうか。風土記においては、ただ、「五百（いほ）つ鉏々（すきすき）猶（なほ）所取（と）り取（と）らして天の下所造（つく）らしし大穴持命（おほなもちのみこと）」という記述しか残されていない。しかも、所造天下大神と代穴持命を同一としており、理解を混迷せしめている。所造天下大神いう名称は、天上ではないが天（あめ）の下を造った大神であり、伊邪那岐、伊邪那美の仕事に匹敵すべきものである。
　古事記にはなく、出雲固有のものとして記されているものは、「国引き」であった。「八雲立つ出雲の国は、狭布（さぬの）の稚国（わかくに）在（な）る哉。初国（はつくに）小（ちひ）さく所作（つく）れり。故（かれ）、作り縫（ぬ）はむ」とあり、最初の小さな「くに」がどうしてできたかの伝承はみられないが、更に大きくするに「くに（土）」を引いたとする。
　小さな布に布を縫い合わせる。「くに」に余りがあるかと聞けば、余りがあるという。大魚のエラのごとき地の隙間に、巾広い鉏を入れて、魚を刺身にするかのごとくそぎ取り、河船のようなものに乗せ、ゆっくりと綱で引き、杙となる山に固定して、多くの土を突き固め、次第に広くしてゆく。一見すれば、海の埋め立て工事にみえる。ところで、大魚のエラとは大陸に出来た割れ目を連想させる。
　これは、平成の人間には、プレートによる大陸移動に映る。日本列島はユーラシア大陸の東端が太平洋プレートの潜り込みにより引き裂かれて移動をしたとされる。1億3千万年前の白亜紀に遡り、その末の7千万年前頃から活発となり、幾多の変遷を経て2万～1万年前にこの形となり、今後ともこの変化が止むことはないという。1万5千年前頃には、西日本部分は大陸とは繋がっていた（香美町立ジオパークと海の文化館、[HP](http://geo-umibun.jp/nihon-2/)）とあり、1万2千年前頃には、半島とは離れ、暖流である対馬海流が流れ込み、日本海や日本海側の環境が大きく変化したともされる。「国引き」は我が国の形成に重大な影響を及ぼし続けるの運動といわねばなるまい。

|  |
| --- |
| http://www.geocities.jp/t_shimizu2003/earth_23.gif日本列島形成（[HP](http://www.geocities.jp/t_shimizu2003/earth_histry_4_1_m.html)）より引用。「かつては日本を形成する島々はアジア大陸の東端の縁にありましたが、間に日本海が割って入って、だんだん拡大し、また横ずれにより南方より一部は重なり、合体（中央構造線）、創られました」とある。詳細は、日本列島の地質構造の変遷について（[HP](https://www.numo.or.jp/technology/technical_report/tr0402pdf/TR0402-04c3-2.pdf)） |

|  |  |
| --- | --- |
| 図11　中海・宍道湖一帯の古地理の変遷 | おおだwebミュジアム書庫　出雲平野と神戸川をめぐる自然史（[HP](http://sanbesan.web.fc2.com/shimane_library/izumo_enya06.html)）より引用中海・宍道湖一帯の古地理の変遷「最終氷期以降の海進によって形成された内湾は、6000年前頃に水域が最大になった。その後は三角州や沿岸砂州が成長し、平野が形成された。宍道湖は4000年前頃に外海から遮断されたが、その後も海水の流入は続いた。出雲平野の西側では、三瓶火山の活動によって三角州が急速に拡大し、わずかに残された水域の一部が神西湖になった。浜山砂丘の東には、淡水の池が江戸時代まで存在していた」とある。 |

風土記において「国引き」となる部分の地形の変遷である。直近の氷河期が終わる1万年前くらいから海面上昇が始るが、その後の寒暖期によりその差がみられる。また、火山活動や河川による土砂の沖積による変化もあろう。「五百（いほ）つ鉏々（すきすき）猶（なほ）所取（と）り取（と）らして天の下所造（つく）らしし」というのは、この時代における湿地の整地による稲作を念頭に置いたものと思う。コタンカラカムイの「大まさかり」と「くわ」を想起せしめるが、アイヌは稲作ではなく、荒れ地を整地する伝承であった。
　意宇郡飯梨（いひなし）郷条に、「大国魂命（おほくにたまのみこと）、天降坐しし時に、此処に当りて御膳（みいひ）食（な）し給ひき」とある。「くにたま」とはその土・地（くに）の神であり、大国魂となれば全土をカバーするもの、所造天下大神の地であり、それは全土の中心であり、そこに大国魂を降ろすのは当然であろう。造営した国土に、国の魂となる神を降ろした。風土記の頃には、出雲は一地方国であり、出雲国魂となるべきものであるが、大国魂とあるは、その本来の姿を残したことになろう。出雲では、湿地の排水をなす土木工事、杙と板と土砂を調達するための鉄器の導入を必要とした。湿地に於ける稲作を、平野部、山間部で可能とするための品種改良や道具の改良が行われたようであり、それが「くに」を形成する原動力となったと思う。それは後のことであり、大穴持命の仕事となる。
　海洋における島の生起には火山活動が欠かせず、「狭布（さぬの）の稚国（わかくに）」がそれを想起せしめる。西日本において最大の噴火活動をみせたのは阿蘇とされる。「約27万年前、約14万年前、約12万年前、約9万年前の4回です。 特に4回目の約9万年前の噴火は規模が大きく、その噴火による火砕流の堆積物が海を隔てた島原、天草や山口県でも確認されています。ちなみに最も遠いところは山口県秋吉台で確認されています。またその噴火による火山灰が北海道東部で厚さ10cm以上の堆積物として今も残っています（阿蘇山の成り立ち、阿蘇火山火口規制情報、[HP](http://www.aso.ne.jp/~volcano/html/history.html)）」という。経験者の伝承の観点からは、縄文時代の鹿児島南方の鬼界大噴火が挙げられ、この噴火は、「『完新世（約一万年以降）における地球上で最大の噴火である』（月刊『科学』二〇一四年一月号所収「カルデラとは何か。鬼界大噴火を例に」東京大学地震研究所・前野深）、火山と神話の現場からの報告、[HP](https://www.hon-momoyamado.com/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0/%E7%81%AB%E5%B1%B1%E3%81%A8%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E7%A5%9E%E8%A9%B1/%E7%81%AB%E5%B1%B1%E3%81%A8%E7%A5%9E%E8%A9%B1%E3%81%AE%E7%8F%BE%E5%A0%B4%E3%81%8B%E3%82%89%E3%81%AE%E5%A0%B1%E5%91%8A/)」とされる。これは造陸活動のみならず、火山灰と噴煙による闇を天岩戸の神話と結び着ける意味でもとりあげられている。「太陽神アマテラスが隠れて永遠のような夜が続いたという岩戸隠れ神話をめぐっては、冬になって衰弱する太陽の輝きの復活を祈る冬至の祭祀に由来するという説（折口信夫ほか）、日蝕により太陽が消えるように見える現象に由来するという説（大林太良ほか）がよく知られているが、寺田寅彦やワノフスキーなどが主張する「火山灰と噴煙によって太陽光線が遮断された現象に由来する」という説は古事記の注釈や解説書にはほとんど書かれていない。従来、奇説のひとつと見なされていたようだ。

古事記は、高天原も葦原中国もずっと夜が続き、「万よろずの妖わざわい、悉ことごとく発おこりき」としるす。ワノフスキーは「火山の冬」という火山研究の現代的な視点を知らなかったはずだが、彼が『火山と太陽』で提示しているイメージはそれに近似しており、太陽が衰弱した世界の、深刻な社会不安が暗示されている。爆発と地震が始まる。煙、灰その他の噴出物の、巨大な柱が天上高く舞い上がる。煙の渦巻きと大量の灰が明るい空を汚し、太陽の光を曇らせる。（中略）昼が夜のようになる。（中略）全国はあやめも分かぬ闇黒へと沈む。闇の中から邪悪な神々がその声をあげ、至る所に様々な不幸が起こった。九州南部では三万年まえの超巨大噴火のときにも旧石器時代の人たちの営みがあったが、一万年ほどまえには、その時期の縄文文化の繁栄地のひとつとなり、安定した狩猟採取社会が築かれていた。上野原遺跡（鹿児島県霧島市）は日本列島でも最古級の定住した縄文人のムラとして有名で、ちょっとした観光地にもなっているが、七千年まえの超巨大噴火によって、九州南部は無人の荒野と化した。直接の原因は、噴煙柱の倒壊により生じた火砕流だが、それに加えて「火山の冬」の暗雲が、数年というスパンで日本列島を覆った可能性がある。もしそうであるならば、破局的な火山噴火は、九州にとどまらず、日本列島に住むすべての人が遭遇した〝歴史的事件＂であったことになる。火山噴火によってもたらされた暗黒の世界のなか、人々は太陽の復活を願って祈り、そこから火山の神スサノオと戦うアマテラスの神話が発生した─ワノフスキーはそう主張している。」
　海洋民族は、海底火山の噴火により島が生まれ、次第に大きなる、その力に神をみたであろう。筆者はそれを所造天下大神の原形とみることにした。西日本では阿蘇や鬼界の噴火が最強であり、その地由来の神とみたい。先に地震を引き起こし、地殻を変動せしむ力、マントル移動の力を八束水臣津命とみた。八束水臣津命を出雲の島の根を造成した神、所造天下大神が九州から出雲に来訪された神と想定した。所造天下大神の威光を引き継いだ者を大穴持（おほなもち）命とし、同一視することを避けた。大己貴（おほなむち）命とも記され、「おほ」は尊称、「なむち」は汝貴で敬称、親しみがある貴人であり、出雲を統一したとき大国主（おほくにぬし）神とされた。「くに」とは土のことであり大地の神の義である。

**稲の由来**

　出雲郡美談（みたみ）郷条に、所造天下大神の御子の和加布都努志（わかふつぬし）命が、「天地（あめつち）初（はじ）めて判（わか）れし後、天（あめ）の御領田（みた）の長（をさ）、供（つか）へ奉（まつ）り坐（ま）しき」とある。古事記（以下「記」）は、稲種は大気津比売（おほげつひめ；食物を鼻口また尻より取り出し勧め、速須佐之男命に殺された比売）の両目から生まれ、それを神産巣日の御祖命が種としたとする（須佐之男命はそれ以前に田の畔を壊すと稲田の存在を前提とした話もあり、一貫してはいない）。また、「記」では、皇孫、番能邇邇藝（ほのににぎ）命（稲穂を豊かに実らしむ命）の降臨の際に、高天原の稲を豊葦原水穂国に降ろしたとする。
　所造天下大神を大穴持命と同一視し、この延長で考えると、大穴持命の子が、天地が分かれて後、すでに高天原の天田に仕えているという奇怪な伝承となる。出雲中心の世界には出雲世界の天神がおり、天田があったとせねば話が成り立たない。所造天下大神が天の下を造り終えたので、その子を天田に仕えさせ、天の稲種を地に降ろさせた、とでも考えねば意味をなすまい。
　楯縫郡玖潭（くたみ）郷条に、所造天下大神が、「天（あめ）の御飯田（みいひだ）の御倉（みくら）、造り給はむ処を、覓（もと）め巡行（めぐ）り給ひき」とある。どこに天の御飯田の御倉を造ったかは不明であるが出雲内のことであろう。その造営を高天原の天神が依頼することはありえまい。造営の依頼主は出雲世界の固有の天神とすべきであろう。稲種の起源と地上への伝播は、すでに出雲世界で行われていた。

　神門郡の山について、所謂所造天下大神の「御稲（みいね）なる稲（いな）山」、「稲積（いなつみ）なる稲積（いなつみ）山」に言及されている。飯石郡多祢（たね）郷条に、「天の下所造らしし大神、大穴持命と須久奈比古命（すくなひこのみこと）と、天の下を巡行（めぐる）る時に、稲種（いなだね）此処に堕（お）つ」とある。多祢郷は山中である。仁多郡三処（みところ）郷条に、大穴持命が、「此の地（ところ）の田（た）好（よ）し。故、吾が御地（みところ）に占（し）めむ」とされたとある。三処郷も山間の盆地である。仁多郡由来の「にたしき」は、水の多いこと、水田に適した地の意味とされる。
　水田は湿地帯から始ったものとされ、山間で水田稲作が可能となるには、品種の改良が必要である。伝来した南方の稲種の北限を越へて越の地まで拡散する稲種を大穴持命は手に入れていたとなろう。我が国が平地でなく、プレート運動により山岳の多い地形となり、大量の雨を得たこと、たまり水でなく清流となり、森林の地中に堆積された豊富な養分を含む水となったことが有利に働いたようである。山間地を整地し、水を巡らす水路を造り、栽培を繰り返すうちに、ある程度の寒冷に耐える品種が開発されていたとなろうか。大穴持命の生きた時代は、稲作が始った時代ではなく、山間での水田耕作が可能となった時代となる。このような農法を伝播することが天下平定の根幹にあったのではなかろうか。所造天下大神の伝承と大穴持命の伝承とは区別さるべきであろう。
　稲については、陸稲があり、稲のDNAを研究されている総合地球環境学研究所の佐藤洋一郎教授によれば、静岡の曲金北（まがりがねきた）遺跡、古墳時代の水田の一角の調査では、田は多岐に利用され、陸稲の方が多く利用されていたとしておられる、「水田ではなく休耕田が含まれていたと判明しました。結局、100の小区画のうち、水田はたった22区画だけだったんです。さらにDNA分析をしてみると、近在栽培されていた稲は、2割が水稲、4割が陸稲でした（こだわりアカデミー、[HP）](https://www.athome-academy.jp/archive/biology/0000000116_all.html)」。また、稲の伝来経路についても、弥生時代の稲DNAは半島ではなく大陸系であるとしておられる、「日本の各所に点在するRM1-b遺伝子。中国では90品種を調べた結果、61品種に、RM1-b遺伝子を持つ稲が見付かったが、朝鮮半島では、55品種調べてもRM1-b遺伝子を持つ稲は見付からなかった。なお現在の日本に存在する稲の遺伝子は、RM1-a、RM1-b、RM1-cの3種類」。長江流域の稲であり、下流の河姆渡（かぼと）遺跡（前5000年）出土の炭化米や籾の系統となるようで、いわゆる後世の「越」の地とされる。同教授は、日本で東北にまで稲の栽培が可能となる品種が生じたとされ、それを「イネは中国から伝播した短日性の晩生のウルチの温帯ジャポニカ型と南から伝播した短日性をもたない晩生の熱帯ジャポニカ型が自然交配すると早生の雑種ができる」としておられる。水稲２割、陸稲４割というような割合を認識しておくべきなのであろうが、大穴持命はこの稲種を普及せしめたことになる。
　古語拾遺によれば、大穴持命は須久奈比古命（少彦名神）と共に、病や鳥獣昆虫の災いを払う方法を伝授して天下を経営したとする。「大己貴神【一（また）の名は大物主神（おほものぬしのかみ）。一の名は大国主神（おほくにぬしのかみ）。 一名は大国魂神（おほくにたまのかみ）なり。大和国（やまとにくに）城上郡（しきにかみのこほり）大三輪神（おほみわのかみ）是なり。】と少彦名神【高皇産靈尊（たかみむすひのみこと）の子。常世国（とこよのくに）に遁（ゆ）きましき。】と共に力を戮（あは）せ心を一（ひとつ）にして、天下（あめのした）を経営（つく）りたまふ。蒼生（あをひとくさ、人々）・畜産（けもの）の爲に、病を療（をさ）むる方（さま）を定めたまふ。又、鳥獸（とりけもの）・昆虫（はふむし）の災（わざはひ）を攘（はら）はむ爲に禁厭（まじなひや）むる法（のり）を定めたまひき。百姓（おほみたから）今（いま）に至るまで、咸（ことごとく）に恩賴（みたまのふゆ）を蒙（かがふ）る。皆效驗（しるし）有り（岩波文庫）」とある。古語拾遺は大同二年（807年、大同元年説もある）に斎部広成により撰されたものである。大己貴神は八千矛神ともされ、矛により平定をしたとみられがちであるが、稲の伝播及び病や災いの対処法を以て、民生安定の方法を伝授することで天下を経営したとみている。「ひめ」を「めとる」、結婚が大きな要素でもあったことも、後に明らかになろう。また、大国主神を大物主神と同定することで、ヤマトの三輪の地に根拠地を置いたことを伺わせている。これは、少し、先を急ぎ過ぎたようである。

**天の意**

　天の意を知る。古代人が天を哲学する以前の天の意である。「天は雨を降らすに必ず先ず山や澤に雲を出だす」という類いの天の意である。雲を動かすものは風である。風の字は鳳形の鳥と声符の凡から成る。説文に、風は「八風なり」とあり、方位の八方から吹く風のことであるが、通常意識されるのは四方であった。春（東）、夏（南）、秋（西）、冬（北）と季節によって吹く風は方位により寒暖、強弱に違いがあり、人はその風に対応して、衣食住のあり方を調節してゆく。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 東方神 | 風神 | 南方神 | 風神 | 西方神 | 風神 | 北方神 | 風神 |
| 卜辞 | 析（せき） | kyo（きょう） | 夾（きょう） | 𡵂（び） | 夷 | 彞（い） | 夗（えん） | shu.JPG（しゆ） |
| 山海経 | 折丹 | 俊 | 因乎（いんこ） | 乎民（こみん） | 石夷 | 韋（い） | 𪂧（えん） | 𤟇（えん） |

　甲骨文字を研究された白川静氏によれば、「方神は日月を司るものであり、風神はその使者として神意を伝達するものであった。・・・風はその神鳥の羽ばたきによって起ると考えられた (字統)」という。春に帝が東の郊外で方神を祭り、年（みのり、年穀）を祈る。その祭祀の行列は、民に種を蒔くときがきたことを知らせるものでもあった。方神や風神を祭ることが、なすべき仕事を始める「とき」が来たことを民に知らせた。人がなすべきことをすることで、自然界の恵みがもたらされ、収穫に感謝し、その恵みが続くことを願って、初ものをまず神に召しあがっていただいた。
　天意を知る方法に占いがあった。甲骨文字は亀の甲や獣の骨に刻されたもので、上帝（天帝）の意向をその子孫である地上の帝が記して伺い、甲骨を焼いて出来た割れ目で可否を占った。10日（旬）の終わりに次旬の行動の可否を占っており、初旬・中旬・下旬で一月とし、十二月で36旬（360日）となり、占いのない日（5～6日）を加え一年とした。結果が否であると可となるまで、あるいは、内容を変更して占ったというから、数百年の間に大量の甲骨が用いられた。白川氏によれば、「上帝の子孫である王が地上を治めることによって、上下のあらゆる秩序が成り立つのである。特に自然の現象は、帝の支配に属した。農耕に関係の深い雨も風も、すべて帝に祈ることによって秩序が得られた（中国の神話、中公文庫）」という。
　庖羲（伏羲）という王がおり、「仰ぎては象を天に観、俯しては法を地に観、あまねく鳥獣の文と地の宜とを観、近くこれを身に取り、遠くこれを物に取り、始めて八卦を画し、神明の徳に通じ、万物の情を類（五帝本紀）」したとする伝説がある。庖羲は綿密に天地の事象を観察し、身辺と見比べて表わす方法を考え、八卦を工夫し、万物のあり方に通じた。卜占ではなく、易により森羅万象の変化を捉え、それに適応しようとする試みであった。
　また、書契をつくり、嫁娶の制を定め、網を結んで漁することを教え、犠牲を養い、太山で（天を）祀ったともいう。栽培すること、家畜化すること、それは天地の働きのお蔭と、収穫したものを卓に盛りつけ、禍福をもたらす天をまつり、禍が去り福の来ることを祈らせた。知り得たことを応用し、地上の民が人間らしい暮らし方をできるようにした。

　春秋時代に至る中国人は、風と鳥と方位と季節と職掌には関連があるとみていた。鳳鳥は天の満足の意、ツバメ、モズ、ウグイス、キジは季節の変化を伝える意、その鳥の性格により、教育、軍事、土木工事、裁判、人事等を正せしめたとみた。「鳳は天の時を知る、故に以て歴正の官に名づく。玄鳥は燕（ツバメ）なり。春分に来り秋分に去るを以ての故に分を司る。伯趙（はくちょう）は鵙（モズ）なり。夏至に鳴き冬至に止むを以ての故に至を司る。青鳥は鶬鷃（ウグイス）なり。立春に鳴き立夏に止むを以ての故に啓を司る。丹鳥は鷩雉（キジ）なり。立秋に来り立冬に去るを以ての故に閉を司る。雎鳩（しょきゅう）は鷙（ワシ、タカ）にして別有り、故に司馬と為りて法制を主る。鳲鳩（しきゅう、カッコウ）は平均なり、故に司空と為りて水土を平らかにす。鵻鳩（祝鳩：しゅくきゅう）は孝なり、故に司徒と為りて民を教ふるを主る（[埤雅の研究、雎鳩](http://chubun.hum.ibaraki.ac.jp/kano/peper/piya/36syokyu.htm)）」とある。これは、春秋左氏伝、昭公十七年（前525年）条で、少皞（しょうこう）氏が鳥で官名をつけたのは何故かと聞かれ、郯子（たんし）が我が祖のことで承知しているとし、「黄帝は雲師で雲の名、炎帝は火、共工氏は水、太皞（庖羲）氏は龍の名で官名つけた、少皞氏は鳳凰が飛来したので鳥で官名をつけ、鳳凰を歴正、玄鳥を司分、伯趙を司至、青鳥を司啓、丹鳥を司閉、祝鳩を司徒、睢鳩を司馬、鳲鳩を司空、爽鳩（そうきゅう）を司寇、鶻鳩（こつきゅう）を司事とした（岩波文庫）」と述べたことからくる。
　漢代になれば、「人は天の働きをうけつぎ、地の働きに従って、気を整え、万物を成就させる。八卦を組織だて、八風を調え、八政を治め、八節を正しくし、八音を調和させ、八佾の踊りを舞い、八方をとりしまり、八荒に恩恵の光を与え、それによって天と地の働きを完了させる。だからそれぞれ八のものが八あって六十四になる。（漢書律暦書）」と考えた。出雲の八雲にも八風の影響があったかもしれない。
　出雲国風土記は、「国の大体（おほかた）は、震（ひむがし）を首（はじめ）とし、坤（ひつじさる）を尾（をはり）とす」に始る。「易」の震である。周易の震の「萬物出るは震、震は東方なり。雷が鳴れば陽気発して動く」、説文の「陽気動き雷電振うは、農の時なり」、漢書律暦志の、「東は動。陽気が万物を動かす。季節は春。春とは蠢（うごめく）。万物がうごめいて生まれてくると、運動を行う」を意識していよう。
　晋書天文志に曰く「馬続はいう。天の文なす星で、書籍にしるされており、はっきりと知ることができるのは、恒星の恒常的な宿および中官・外官である。その数はおおよそ百十八個、星の数を合計すると七百八十三ある。それらはすべて州や国、官職や宮殿、そのほかさまざまな物のシンボルである。・・・易経にいう、天は記号を伝達して吉凶を表現する。聖人はそれを象徴化する。これが天文つまり天の文様を観察して、来るべき変化を人に示す。書経にいう、天のすべてを見透す力は、わが人民の見透す力をとおして発現される。これが人文つまり人の文様を観察して、感化をおよぼすということである。だから政治や教育は人の道に由来し、慶事や異変は天の文様に対応する。」(世界の名著:中央公論社）
　こと漢籍に関しては、風土記編纂の時代の知識人の造詣は、平成の知識人をはるかに凌ぐと思っておいた方がよい。我が国でも卜占や易が導入されたものの、このような天意のとらえ方は、極めて限られた範囲にとどまり、一般には受容されなかった。
　しかし、その影響は、違った形でみられる。そのことは後に検討してみたい。我が国の天皇のあり方と係わりが深く、高天原の天神の皇孫が、稲の実り、生成発展というか、生み、育む力を重要視したことによろう。これは、風土記のなかにも色濃くみられ、我が国の底流、潜在意識にあるものかと思う。

　島根郡法吉（ほほき）郷条に、「神魂命の御子、宇武賀比売命（うむかひめのみこと）、法吉鳥（ほほきとり）と化（な）りて飛び度（わた）り、此処に静まり坐（ま）しき」とある。法吉鳥とは鶯（うぐいす）のこと、立春が啓き、立夏が止むことを告知する鳥であった。立春とは万物蘇生の季節である。啓とは啓蟄の啓であり、説文に、「風動いて蟲（虫）生ず、故に蟲は八日にして化す」ともある。宇武賀比売は「記」の蛤貝比売（うむぎひめ；蛤の化身）とみなされ、𧏛貝比売（きさがひひめ；赤貝又は巻貝の化身）と共に、殺された大穴持命を蘇生させたとする。再生の女神というべきか。
　神魂命は、このほかに三女神を降ろしておられる。風土記においては、ほかにも女神が多く登場する。神魂命は、島根郡加賀（かか）郷に支佐加比売（きさかひめ、枳佐加比売）命を降ろされた。支佐加比売命は、加賀神崎で麻須羅（ますら）神とともに佐太（さだ）大神を生んだとしている。また、出雲郡宇賀（うか）郷の地に綾門日女（あやとひめ）命を降ろされたものの、所造天下大神命の誘いを断って逃げて隠れたとあった。「あやと」は美しい門であるが、この条では隠れた先の洞窟が古来の墓場であったことから、「あやしき門」で「黄泉への門」のごときイメージとなり、黄泉のイザナミを想起させている。元来は「みと」であり、「あや（美しいもの）」を生むために降ろされた女神ではないか。更に、神門郡朝山（あさやま）郷に真玉着玉之邑日女（またまつくたまのむらひめ）命を降ろされ、所造天下大神、大穴持命が娶り毎朝通われたとあった。「またま」であり「正しい魂」の就く玉の邑（むら）、天の「たま」を地に降ろし、そこに人を集め導く女神ととれる。
　神魂命の子の男神は、所造天下大神の宮を造営し、御装の具を製作し、宮の祭主となるべく降ろされたようである。楯縫郡条に、神魂命の子、天御鳥（あめのみとり）命を降ろして、所造天下大神の宮の御装（みよそひ）の楯を造らせたとする。神魂命は「天の日栖」の宮に居られ、これに寸法を合わせて所造天下大神の宮を造れとされた。「みとり」に御鳥をあてているが、これは鳥ではなく、「みてとる」の短縮形と思える。島根郡、生馬（いくま）郷条に記される神魂命の子、八尋鉾長依日子（やひろほこながよりひこ）命は、鉾といえども、御装の鉾を造る命であろう。
　また、出雲郡漆沼（しつち）郷条に、郷のみでなく、神名火山の嶺の曽支能夜（そきのや）社にも、神魂命の子、天津枳比佐可美高日子（あまつきひさかみたかひこ）命が坐（ま）すとある。漆沼は、大量の銅剣･銅矛、銅鐸が発見された荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡の地であり、この地は早くに栄えており、その地に「たかひこ」という高い位の「ひこ」である天津枳比佐可美高日子を降ろされていたことになる。又の名を薦枕志都沼値（こもまくらしつちち）といい、この地の地霊とされるが、曽支能夜社の社伝には、出雲大社の祀主とある。神魂命が他の御子に行わせた仕事を勘案すれば、この神を所造天下大神の宮の祀主とするために、この地に降ろし、神魂命から天津枳比佐可美高日子に続く系統が、所造天下大神の宮の祀主となるのなら、出雲世界にとっては自然なことになろう。しかし、それは出雲大社の祀主を、天之菩卑能命（天菩比神、天穂日命）とする公式見解に反する。

　「記」によれば、出雲国造家の祖、天之菩卑能命は珠から生まれている。天照大神の右の角髪（みづら）の珠を速須佐之男命が噛んで生んだ第二子であった。天照大神を天に上げるに際して伊邪那伎命が首に掛けていた珠を与えたとあり、それが出所と推定でき、天神の所有する珠から生まれたことになる。斎部広成は古語拾遺において、異説を述べている。その珠は、櫛明玉（くしあかるたま）命が、高天原に行く素戔嗚尊に献上した瑞（みづ）の八坂瓊（やさかに）の曲玉（まがだま）とする。八坂は八尺で長いこと、瓊は玉と同義。櫛明玉命は、出雲国の玉作りの祖であり、天照大神に奉るよう素戔嗚尊に託したとしている。出雲の玉から天之菩卑能命が生まれたと主張したことになる。
　これまで神魂命の訓を記してこなかった。神魂は、文字通りでは、「かむたま；かむひ」であるが、出雲国風土記においては、「かむむすひ」としている。出雲国造神賀詞において、「高天（たかま）の神王（かぶろ）高御魂（たかみむすび）神魂（かみむすび）」とあり、高御魂を高御産巣日（たかみむすひ；高皇産霊）神、神魂命を神産巣日（かむむすひ；神産霊）神とみなす訓であり、「記」の神名に合わせている。
　広成は、神産霊神の子を天児屋命（中臣朝臣の祖）としており、本來出雲の神魂命が中臣朝臣の祖たることはあり得ず、神魂命と神産霊神とを同一視していない。広成は、また、高皇産霊神を、古語では、多賀美武須比（たかみむすひ）、これは皇親（すめむつ）神留伎（かむるき）命といい、神産霊（かむむすひ）神を皇親神留弥（かむるみ）命というとする。神留伎、神留弥が高皇産霊、神産霊の原型と示唆している。
　伎（き）は男性、弥（み）は女性に付されるものであり、「ひこ（日子）」の「こ」と「ひめ（日女）」の「め」のごときものである。「ひこ」と「ひめ」は、「ひ」が「ひこ」と「ひめ」に分かたれたものであり、その元は日、霊であり、それは地上においては「たま（玉）」の光として玉座に呈さるべきものであったろう。「たま」はまた魂でもある。神魂は、「かむたま、かむひ」と訓じるべきものであり、出雲世界にあって、「玉」は魂、高御魂、神魂、国魂を象徴していたのかもしれない。
　天照大神の「たま」から生まれた最初の子を正勝吾勝勝速日天之忍穂耳（まさかつあかつかちはやひあめのおしほみみ）命という。正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命と高御産巣日（高皇産霊）神の女（むすめ）万幡豊秋津師比売（よろづはたとよあきづしひめ）命（栲幡千千姫「たくはたちぢひめ」命）との第二子を天邇岐志国邇岐志（あめにきしくににきし）天津日高（あまつひこ）日子番能邇邇藝（ひこほのににぎ）命（天津彦彦火瓊瓊杵「あまつひこひこほのににぎ」尊）といい、この命を地上に降ろしたというのが「記」や日本書紀（以下「紀」）の公式見解である。「天津日高（日子、彦）」とは天神の御子のこと、日子は太陽の子でもある。「番能邇邇藝（火瓊瓊杵）」とは稲穂が重く垂れ下がるほどに実るさまである。つまりは高天原の「たま」の子孫が地上に降ろされたとする。
　天津「枳比佐可美」高日子も「枳比佐可美（きひさかみ）」部分を除けば、天津高日子となる。番能邇邇藝と同様に高い位にあった神魂命の御子であったことになろう。また、「記」に、「出雲の国造（くにのみやつこ）の祖（おや）、名は岐比佐都美（きひさつみ）」とあり、「出雲の石𥑎（いはくま）の曾宮（そのみや）に坐す葦原色男（あしはらしこを）大神をもち拜（いつ）く祝（はふり）（岩波文庫）」としている。石𥑎の曾宮はどの宮を指すか不明と注されているが、先にみた曽支能夜社が該当しよう。枳比佐と岐比佐の音（おん）は同じであり、岐比佐都美は天津枳比佐可美高日子となる。ならば、出雲国造家の祖を天津枳比佐可美高日子とみる伝承も記は留保していたことになる。
　意宇郡屋代郷条に、天津子（あまつこ）命があり、天乃夫比（あめのふひ）命の御伴として天降りしたとある。通例この天乃夫比命が出雲国造家の祖、天菩比神に相当するとみなされる。社印支（やしろのいなき、屋代稲置）という後世の官職の遠祖である天津子命がお供をしたことからすれば、天乃夫比命は天の下を治めるために降ろされた命とみることができよう。「ふ」は府であり、財貨を蔵するを「府」とし、兵甲を蔵するを「庫」とする。天の大蔵をなされていた命であり、そのような命が高天原から出雲に降ろされることはありえない。ただ、「記紀」の「天穂日命」に転用され、出雲国造家の祖とされたと映る。
　いささか横道にそれたが、風土記においては、天意がどうのという伝承は記されておらず、自らの祖神、その地の由来を簡潔に述べるに止まっている。

　我が国では、天意を推しはかるという動機には馴染みがなかった。地上に降り、実り豊かな地を実現するという高天原の天神の子孫を守護し存続させるという意識が醸成され、それが存続していることによろう。
　異なる祖神を祭祀する多民族の暮らす中国にあっては、祖神を統一することはできず、王朝の交代は避けがたいものがあった。前王朝を倒した政権は、打倒したことの正当性を模索した。祖神の優劣では決着はつかず、全てを統御する天に合一の主を求め、天の意を実現する者が天命を得て政権に就くと主張した。民に安寧なる生活をもたらす者に天命を付与し政権を執らせる。民の安寧を乱し損なう者は天命を失い、安寧をもたらす者が、新たに天命を得る。いわゆる命が革まる、革命思想を生みだした。そして、天命を失わないためには、何をすべきで、何をしてはいけないかを書にして子孫に伝えた。詩経や書経と称されるものである。
　我が国においても、ヤマトの政権以前に、奴国や、倭国大乱を経て邪馬台国の政権があり、後に饒速日命を擁した政権を打倒するという変遷を経てヤマトの政権が樹立されている。しかし、その正当性の主張は異なった。「記」により天地開闢から、天下を平定した大国主神の国譲り、天孫降臨、饒速日命の恭順という経緯が編纂され、書にして流布されることにより、王朝交代とは無縁のものとなった。
　このことは吉田松陰の講孟劄記に明快である。
　意訳する。修身・斉家・治国・平天下を説きながら、孔子、孟子は生まれた国を出て、他国で仕えた。それは生国に申し訳のないことである。頑迷であるからと自分の親を捨て、他の賢明な親を自分の親となす、それは修身・斉家に反している。生国の主君が頑迷愚鈍であるからと他君に仕える、たとえ治国・平天下に功あったとしても、それが後世の模範となろうか？生国の主君が頑迷愚鈍であっても、義を貫き、諫めて死すも、獄に繋がれるも、餓死するも、功業・名誉が得られなくとも、生国で人臣の道を失わないことこそが、永く後世の模範となる。
　中国では、億兆に傑出した人物が主君となることを道とし、そういう人物ならば、乱れた主君を伐つことを善しとし、主君を殺しても聖人たりえるとする。我が国では、千万の世、世襲にして絶えない。これは中国とは比べものにならない。中国の臣たるや、君の善し悪しを選んで渡り歩く渡世人のごときもので、死に至るとも主君を棄てないという道は絶え果てている、何と、嘆かわしいことか（講孟劄記巻一序説）、とする。

**玉の世界**

　玉を噛んで神を生むという伝承の背後にある考え方は、玉の中にある魂をとりだして神の形にしたというようなものであろう。「日本の信仰では、霊魂が人間の体に入る前に、中宿（なかやど）として色々な物質の中に寓ると考へられてゐます。其の代表的なものは石で、その中で、皆の人が承認するのは、神の姿に似てゐるとか、特殊な美しさ・色彩・形状を具へてゐるとか言ふ特徴のあるものです。神像石（かむかたいし）の場合は、石全体を神と感じる様になったのです。又、玉だと思ってゐるものゝ中には、獣の牙だったり、角だったりするものもあります。之を一つの紐に通しておくのが、古語で言ふみすまるのたまです。だから考古学の方で、玉の歴史を調べる前に、どうしても霊魂の貯蔵社としての玉といふ事を考へてみなければ訣らぬものが、装身具の玉になった後にもあるものです。・・・玉が触れ合ふ音に対する、古人の微妙な感覚が示されています。・・・昔の人は、玉を通して霊魂の所在を考へてゐるし、たまの発動する場合の深い聯想がありますから、その音を非常に美しく神秘なものに感じてゐるのです。・・・みすまるの玉が音を立てゝ触れ合ふ時、中から霊魂が出てくると信じてゐたのです。結局、たまの特急の収容場所は、それに適当する人間の肉体なのです（万葉集に現れた古代信仰―たまの問題―折口信夫、[HP](https://books.google.co.jp/books?id=-Fhp6iMs3wkC)）」。

　斎部広成がいう櫛明玉（くしあかるたま）命とは、「くし（奇、霊）」、霊妙であかるい玉、出雲の産であるなら碧玉であるが、この場合は緑というより赤いものと思える。出雲には古くから玉の神がおられた。仁多郡玉峯（たまみね）山条に、「古老（ふるおきな）の伝へて云はく、山の嶺（みね）に玉上（たまのへ）の神在り」とある。これは中国の古伝、「山海経」にみられる山の神を祭るに玉を埋める俗を想起せしめる。山上の玉上神が雲を呼び、雨をもたらすのであれば、水精の水晶が適当であろう。恋（したひ）山条に、「古老の伝へて云（い）はく、和尓（わに）、阿伊（あい）の村に坐（いま）す神、玉日女（たまひめ）命を恋（した）ひて上（のぼ）り到（いた）りき。尓（そ）の時、玉日女命、石（いし）以（も）ちて川を塞（ふさ）ぎしかば、得会（えあ）はずして恋（した）へり」とある。玉日女命は碧玉の女神であろうか、海から碧玉を求めてくる者をシャットアウトした。出雲の碧玉は加工され交易に回されたようで、厳重に原石が管理されていたようである。

母理郷条には、所造天下大神、大穴持命が「越（こし）の八口（やくち）平げ賜（たま）ひて還（かへ）り坐（ま）す」とある。越や佐渡は翡翠や赤玉を産した。八口平定の一つはそれを得ることでもであった。越（こし）は中国の越（えつ）人が渡来した地であるとみられている。「富山県朝日町の境 A 遺跡から出土した縄文時代の翡翠大珠の未製品に長江下流域の良渚文化の管錐技法が用いられ、両地域の玉文化がつながっていたことが実証された（玉で結ぶ日本列島と長江下流域、広島大学　李国棟、[広島大学大学院文学研究科論集　第66巻](http://home.hiroshima-u.ac.jp/bungaku/ronshu66/ri.pdf)）」とある。これは、稲の遺伝子の解析とも合致しているのであろう。
　良渚文化では玉璧（ぎょくへき[HP](https://www.npm.gov.tw/exh99/chinese_jades/jp_img_09.html)）と玉琮（ぎょくそう[HP](http://kohkosai.com/chinaphoto/cyoukou%20ryuiki/ryousyo/page/001.htm)）が用いられ、玉璧は円盤で真ん中がくり抜かれており、「大円は日神、小円は月神。また、大円は天、小円を通じて魂を天に送り還す（良渚文化、[HP](http://kohkosai.com/kaisetu/13-5ryousyo.htm)）」、玉琮は角柱の容器で口は円形、「天は円（神界）、地は方（人間界）、所持者は天地交信者（前掲HP）」とする祭政一致の社会の祭祀具である。古代には、日神、月神を祭祀し、天地の交信を求める俗は広くみられ、我が国でもなされていたが、玉璧や玉琮は用いられていない。玉石の加工法に共通性があるとしていよう。
　李国棟氏によれば、越人は鶏の血の色を呈す「鶏血石」を珍重し、北越や佐渡の翡翠や赤玉を求め早くから渡来していたとされる。かつて越族は東シナ海の底になっている大陸棚に住んでいたが、一万一千年前の海面上昇に際して、大陸に移動した越族を内越といい、島々、日本列島となった地に移動した者を外越、海外の越と称したという。また、内越が秦に滅ぼされて以降も、日本列島の越人を外越として秦が警戒をしたという。
　玉は、また、「に」・「ぬ」といい瓊が充てられる。瓊は説文に、「赤玉なり」とあり、玉のなかでもすぐれた玉という認識がある。詩経の衛風、木瓜（ぼくか）では、女が男に果物を投げ、男が瓊琚（けいきょ）を投げかえす。瓊琚とは赤玉のことで赤く燃える心で応えたことになる。左伝、僖二十八年条の楚の子玉（しぎょく）が、瓊弁玉纓(けいべんぎょくえい)を作ると、夢に神があらわれそれを求めたが与えず、戦いに敗れたという話がある。赤玉は神にも珍重される玉とみなされていたことになる。瓊は「けい」であるが、万葉仮名として、「紀」においては、「に」や「ぬ」にあてている（「記」には用いられていない）。
　李国棟氏によれば、長江下流の越で玉をといい、和音の「に」と「ぬ」の中間の音であり、最初の子音をとると「に」、全体を約すと「ぬ」となるとみておられ、赤玉をさしたとされている。「記」の邇邇藝命は、「紀」では瓊瓊杵命と記されており、「ににぎ」は「にぎはす（多くて豊かなこと）」であるが、瓊の字を用いることで、玉のイメージが込められているとみられたようである。

出雲では、曲玉で緑色の壁玉が主力であった。八坂瓊勾玉(やさかにのまがたま)というような呼称は、「記紀」の伝承の後に一般化したものかと思う。「まが」は直でないことで、その胎児のごとき円と弧の形を「まが」としたことからくるものであろう。「勾玉の不思議な形は頭の部分が日(太陽)を表し、尾の部分が月を表しています。この太陽と月が重なりあった形は大いなる宇宙を崇拝していたと思われます。そして穴には祖先とのつながりを持つことにより、我が身に降りかかる邪気・邪霊から身を守り、その恩恵を受けたとされています。（いずもまがたまの里 伝承館、[HP](http://www.magatama-sato.com/about/)）」というものには、良渚文化的な解釈が影響しているようにもみえる。日神、月神、祖先の祭祀における、「たま」の発現、「たま」との交流を、我が国においても、重視したことにはかわりはあるまい。
　出雲国造神賀詞における「高天の神王、高御魂・神魂」は、出雲では高天を「たかま」ではなく「たかあめ」、高御魂を「たかみむすび」ではなく「たかみたま、たかみひ」、神魂を「かみむすび」ではなく「かむたま、かむひ」としていたのではなかろうか。「むす」とは苔むすの「むす」で増え続けること。「むすぶ」は「結びかためるから、約束する。両手をあわせて、ものをすくうことでもある。蒸す系統の語で、生まれ出て形をなすもの、生成する意をもつ語（字訓）」という。「むす」は「記紀」の好む語である。これを付すことで、出雲の二神を高天原に取り込んだようにみえる。
　出雲では、「たま」がキーワードであり、非常に高く大きな宮を造ったごとく、「たか」は上に高く大きいことであり、尊称となろう。「あめ」は雨でもある。雨は説文解字注に、「一は天に象（かたど）り、冂は雲に象り、水その間に霝（ふ）るなり」とある。天と雲と水からなり、「あめ」の下と上で天下、天上を意識したものと思われる。天上の更に高い所が高天（たかあめ）、高天の御魂の最上が高御魂、諸神の祖が神魂、天の下で「くに」となるのが国魂と区別したのではあるまいか。

**不老不死**

　秦の始皇帝は、神仙思想の方士を重用し、不老不死薬を求めて徐福を東海の彼方に派遣した。20艘三千名を率いて紀元前219年に出航し、中国に戻ることはなかったそうである。この徐福が辿り着いたという伝承が日本各地にある。三千名の集団には鉱山師のみならず、様々な技能をもった人々が含まれていたことであろう。九州から青森に至り、来訪伝説の地がある。
　秦の始皇帝の墳墓の内部には、宝石が太陽や月や星としてちりばめられ、辰砂（硫化水銀）が黄河や揚子江や海として敷き詰められていた。方士等は、金、銀、辰砂や砒素などを正しく薬として飲めば不老不死が得られるとした。辰砂（結晶美術館、[HP](https://sites.google.com/site/fluordoublet/home/colors_and_light/inorganic_pigment/cinnabar)）は丹沙、丹朱ともいわれ、殷の時より、磨り潰し朱の顔料としてト骨、王戈、壁画に用いられ、防腐作用があり水に触れる柱や壁板、舟板に塗られ、死体に敷かれては、防腐のみならず“清め”、“邪封じ”にも用いられてきた。
　先秦時代の中国の水銀鉱は、湖北省荊州、陝西省南山、四川省涪陵、甘粛省槐江山が代表とされ（中国史にみる水銀鉱、地質調査総合センター鉱床部　岸本文男、地質ニュース351号、[HP](https://www.gsj.jp/data/chishitsunews/83_11_03.pdf)）、史記、貨殖列伝によれば「巴・蜀で丹沙を産する」とあり、また、「丹沙を重さにして千斤を一年間に取引する人々は年に二十万銭の収益をうる」とされた。秦漢時代に戦費調達や道家の錬丹術ブームにより、大量に消費され、随の時代には日本から輸入される事態となっていた（前掲HP）。
　「管子、地数篇」に「上に辰砂有れば、下に黄金有り。上に慈石（磁鉄鉱）有れば、下に銅金有り。上に陵石（陵墓に用いる美石）有れば、下に鉛・錫・赤銅有り。上に赭（紅土）有れば、下に鉄有り」と記されている。管子は春秋時代から戦国時代を経て漢代に至る内容が含まれており、この文が成立した時は定め難いが、その当時の鉱山師がこれらの鉱石を採掘し、金属を精錬する術に長けていたことが知られる。
　不老不死薬の製造は錬金と同義であった。抱朴子（呉の人、本名は葛洪284-363）によれば、その製法は、まず玄（げん）黄を作る。雄黄水（硫化砒素の溶液）、礬（ばん）石水（明礬水）、戎（じゅう）塩（甘い岩塩）、鹵（ろ）塩（苦い岩塩）、礖（よ）石（砒素を含む石）、牡礪（ぼうれい）（牡蠣殻の粉末）、赤石脂（風化した石のやに）、滑石（ツルツルの石）、胡（ご）粉各数十斤（一斤は220ｇ）を用いて六十一泥（でい）（六種の材料を一両ずつ水でねったもの）をつくり、火にかけると三十六日で完成する。これを飲めば、七日で仙人になれる。また、玄膏（黒い油）でもってこの丹をまるめ、猛火の上に置くと、たちまちにして黄金となる。また、二百四十銖（しゅ）（一銖は0.6ｇ）の丹を百斤の水銀に混合し火にかければ黄金となる。黄金ができるようなら薬は完成している（巻四、金丹「不老不死の薬」、抱朴子、平凡社）。丹薬（玄黄のごとく霊妙に熱で変化するもの）と金液（腐ることのない金）を食すと不老不死になれるとするもので、鉱石を砕き、製錬し、粉末にし、調合する技術が発達していたことが伺える。

　我が国は水銀鉱床に乗っかっているようなもので、「辰砂を産出する水銀鉱床は日本列島各地に分布するが、多くは西南日本の中央構造線付近に集中している。 丹生地域の辰砂や水銀の歴史は、縄文後期までさかのぼる。丹生池ノ谷遺跡からは辰砂原石や朱彩土器、朱が付着した石皿などが、松阪市天白遺跡や度会町森添遺跡などからも、多数の朱彩土器や朱が付いた磨石･石皿などが出土する（辰砂と黒辰砂 - 三重の文化、[HP](http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/rekishi/kenshi/asp/shijyo/detail.asp?record=604)）」とあり、「辰砂を産出する水銀鉱床群の分布する地域には丹生、丹生川、丹生神社が同じように分布している。祭神は丹生都比売神で、辰砂の産出を司る女神である。丹生都比売の祭祀には丹生氏があたった。・・・辰砂の採取を司る丹生氏は、水銀製錬・鍍金の技術を持っていなかった。この技術を持ち込んできたのは秦氏である。辰砂と水銀の利用の主役は秦氏に移り、丹生氏は丹生都比売を祭祀する神官となった。秦氏もまた、丹生の地名、丹生神社の鎮座地に多く分布している。（丹生の民俗、神奈備、[HP](http://kamnavi.jp/ny/minzoku.htm)）」という。丹沙は船舶用塗料として海人族の必需品でもあり、海上交易をする族にとっては欠かせないものであった。
　我が国の辰砂のことが、海人族を通じて、中国にも伝わっていたのであろうか。中国で枯渇した水銀鉱を求めて、巴・蜀で採掘していた呉、越あたりの技術集団が渡来してきたものが始まりであったのかもしれない。長江は三星堆文化の地であり、玉器・金器・青銅器を製作する高度な技術を有していた（三星堆遺跡：蜀の長江文明、鳥飼行博研究室、[HP](http://www.geocities.jp/torikai007/china/history/sanseitai.html)）。それは、赤玉や翡翠を求めた越（えつ）の玉製作技術が越（こし）に伝わっていたことを想起せしめる。
　秦氏は殷の後裔を称しており、滅亡により半島経由で渡来した集団であり、兵器や馬車、攻城具の製作、養蚕製糸機織りや土木技術のみならず、高度の青銅器製作技術を有しており、金属精錬技術にも優れていたのであろう。精錬には高温に熱する必要があり、薪の火力では足りず、中国では、木炭を用い、ふいご（吹子、鞴、たたらの歴史、日立金属、[HP](http://www.hitachi-metals.co.jp/tatara/nnp020611.htm)）を用いる工夫がなされた。葛洪は硝石・松脂・木炭を一緒に加熱すれば、激しい反応が起ることを知っており、後の時代に、硫黄・鶏冠石・硝石・蜂蜜を混ぜ加熱すると爆発が起ることが知られ、火薬の発明につながった。

　古代における技術は、発掘による出土物に用いられた材料や仕上がり具合や施された加工などから推察される他なく、出土物がなければ無いに等しい。出土物があっても、余程の専門家でなければ、その水準を推察することすらできない。また、我が国において、どこまでが導入されたもので、どこから独自のものかを判定することもできない。
　中国の文化が半島に急激に入り込むのは、漢の武帝の半島統一以降、漢人が入り込んだことによろう。我が国への導入は、紀元57年に、奴国が後漢に朝賀し、光武帝より「漢委奴国王」に任ぜられ、はずみがついたことであろう。使者は自らを大夫と称したとあり、漢のシステムを学んで謁見したのであろう、金印を持ち帰るばかりか、これぞ漢文化という様式や文物を持ち帰り、得意満面であったのかもしれない。親魏倭王に任ぜられた卑弥呼が、更に大きな役割を果していよう。本格的には、高句麗に攻められ、楽浪郡や帯方郡から逃れた漢人が百済を経由し、我が国に渡来して以降のことである。
　出雲の「国引き」も、引いてきたのは土地のみではなく、その処の人や生活様式や技術をも取り込んでいたことであろう。

**風土記の天神**

　出雲国風土記において、天地開闢や神々や人間、動植物の誕生、国土創生の伝承が語られていないことについては当初に述べた。「記紀」と重なる名の天神が散見されるが、その脈略がつながらないもどかしさのみが残る。出雲の神々が「記紀」の神々に取り込まれたものか、「記紀」の神々に迎合したものか？後世の我々は困惑するばかりである。

（イザナキ、イザナミ）
　伊弉奈枳（いざなき）の麻奈子（まなこ）を熊野加武呂（くまのかむろ）乃命としている。この脈絡からすれば、「かむろ」は神の子の意味となろう。「くま」は「こめ」と同義の語で、「よね（いねの母音交替形）」のうち神に供するものを特に「こめ」「くま」といったのであろう（字訓）とある。つまりは、伊弉奈枳命を祭祀すべき命としたとなろう。また、島根郡千酌（ちくみ）駅（うまや）に御子の都久豆美命が居られた。千酌駅とは「隠岐への渡し」とあり、その先の半島からの航路となる地であり、伊弉奈枳命はその御子を降ろし、その拠点を治めさせたといえよう。意宇の熊野と島根の千酌に睨みを効かせた布陣にみえる。
　一方、神門郡古志（こし）郷条に、伊弉弥（いざみ）命の時に、日渕川で池を造り、古志の国人が到来し、堤を造り、宿泊をしたとある。伊弉弥命の時とは、何時の時かは不明であるが、伊弉奈枳命と共に居られた時のこととなろうか。国譲り前に、この両神が高天原から派遣され、出雲で仕事をするというのは不自然であり、この天は高天原ではない。また、島根郡は国引きされた地であり、八束水臣津野命は伊弉奈枳、伊弉弥と同じ時を共有しておられることになる。
　伊弉奈枳（いざなき）と伊弉弥（いざみ）とは、古語の「かむるき（神留伎）」と「かむるみ（神留弥）」と同系列にあり、古い時代の神となろう。「記紀」において、この両神は天の下、海の中に国土を生み、万物を生む大業を成した神である。しかしながら、それに相応しい祭祀が成されておらず、イザナミに至っては悲惨ですらある。「紀」では伊弉諾尊は淡路の幽宮に隠れ、「記」では、伊邪那岐命は淡海の多賀に坐すとあり、伊勢の天照大神の祭祀と比較すれば、あまりに寂しい。イザナミに至っては、人に火をもたらすことで自らを焼き殺す自己犠牲を果たしたのであるが、黄泉の大神と黄泉に閉じ込められてしまった。
　己の祖神をかように扱うとすれば、すさまじい覚悟をもつ氏族といわねばならない。しかし、元来が高天原の天神でなかったとするなら、どうだろう？イザナギを淡路の幽宮に置くことは、国譲りをなした大国主神を幽宮に置いたことを想起せしむ。ギリシア神話において、征服された土着の民族の神々が巨人族や地母神や地獄の神にされたごとく、イザナミを黄泉に置いたともとれる。
　「記」は黄泉国への出入り口を黄泉比良坂、出雲国の伊賦夜（いふや）坂とする。通例として、意宇郡の伊布夜（いふや）社（揖夜神社）の地が該当するとされるが、風土記においては、綾門日女命がお隠れになった出雲郡宇賀（うか）郷の窟が黄泉の穴、そこに至る坂を黄泉の坂とする。イザナミが葬られたとされる地は、国内各所にあり、出雲においても、比婆山、八雲村神納山、秋鹿日女命の地、足日山が挙げられる。このくにの人々の心の底には、産みの親としてのイザナミに対する恩義とその嘗められた辛酸に対する哀惜の情がある。

（スサノヲ）
　記紀における長いひげのスサノヲの泣き続ける姿は、風土記の「阿遅須伎高日子命（あぢすきたかひこのみこと）、御須髪（みひげ）八握（やつか）に生（お）ふるまで、昼夜哭（な）き坐（ま）し（仁多郡三津郷条）」によろう。「記紀」では無道で暴風のごとく荒れる乱暴者に描かれているが、風土記においては異なる。神須佐乃袁命が天の壁立を巡り、意宇郡の安来（やすき）に降りたとある。「記」によれば、高天原を追放されたスサノヲは「肥（ひ）の河上、名は鳥髮（とりかみ）といふ地」に降りたとなるが、安来に降りた風土記のスサノヲも、高天原から降りたものであろうか？
　天の壁立とは「国土のはて。地平線のはてに空が壁のようにそそり立つさまをいう」と注されている。ヤマト政権からすれば、中央の高天原の圏外に追放さるべきで、出雲は地の果てであり、天が壁のように立っていると想像するかもしれない。天地の間に壁のようにそびえ立つものは山であり、地の果てに限定することはあるまい。そこを巡っているときに、心が安らぐ処があり、そこに降りた。しかし、風土記の編者達が、安来が地の果てで、そこに空が壁のようにそそり立っていると思ってこれを記したとは思えない。安木郷は海辺の郷であり、壁のようにそそり立つ山もない。水平線の彼方にそびえ立つものは空であり、水平線からやって来たということであろう。また、風土記のスサノヲは海からきた者であり、天から追放された者とは無縁であろう。
　大原郡佐世（させ）郷条には、須佐能袁命が「佐世（させ）の木の葉を頭刺（かざ）して、踊躍（をど）らしし時に、所刺（さ）せる佐世の木の葉、地（つち）に墜（お）ちき」とあり、挿し木、つまり、植樹をするイメージがある。また、同郡の高麻山条に、「神須佐能袁命（かむすさのをのみこと）の御子（みこ）、青幡佐草壮命（あをはたさくさひこのみこと）、是の山の上に麻（あさ）蒔（ま）き給ひき」とあり、その御子に麻を生育させている。この御子は、意宇郡大草（おほくさ）郷に降りておられ、青々とたなびく旗のごとくその葉を生長させる神名であることからも、その役割に相応しい。
　「紀」の一書では、素戔嗚尊の子、五十猛（いそたける）神が天降る時、多くの樹の種を下ろすも韓地には植えず、ことごとく持ち帰り、筑紫から始めおよそ大八洲国の内、播き植えないところはなく、青い山となる、としている。日本列島の生来の植生には、杉や檜のような材はない。素戔嗚尊あるいはその子が、一旦は朝鮮半島に降りていたようであり、その種を持ち帰ったとなれば、韓（から）から伝来したことになろう。韓は馬韓、弁韓、辰韓の韓であり、朝鮮半島のことである（渡来人には大陸から島伝いに列島に来た大陸人、大陸から半島に逃れ更に列島に来た大陸人、半島人で列島に来た者があり、その間に混血が起っており、韓人（からひと）といっても吟味しないと何人かは分からない）。
　島根郡山口郷に、須佐能袁命の御子、都留支日子命（つるぎひこのみこと）を配し、その地を守護させており、同郡方結（かたえ）郷に、国忍別命（くにおしわけのみこと）を配し、忍耐強くその国の形を整えせしめている。「吾が敷き坐す地（くに）は、国形宜（くにがたえ）し」とあるが、国形とは地形というよりは政（まつりごと）のあり方を整えせしめたのであろう。「くに」巡りをしていた御子の磐坂日子（いはさかひこ）命は絵のように美しい国形の秋鹿郡恵曇（ゑとも）郷に宮を造られたとあるが、生まれは意宇郡の八雲町西岩坂の磐坂神社の地、磐坂は磐境（いはさか）でもあり祭事の処であり、この御子は祭祀者として各地を巡っておられたのかもしれない。同じく御子の衝鉾等乎與留比古（つきほことをよるひこ）命も国巡りをしておられ、同郡多太（ただ）郷に至り、心明るく正しくなりここに留まったとある。古書には衝杵等乎而留比古（つききとをしるひこ）命となり、突き固めなびき寄せることでもあり、湿地の造成に長けていた神かもしれない。
　神門郡八野（やの）郷に坐す女（むすめ）の八野若日女（やののわかひめ）命と同郡滑狭（なめさ）郷に坐す女（むすめ）の和加須世理比売（わかすせりひめ）命を所造天下大神命が娶ったとしている。これらの御子達の母についての言及はない。記においては、大山津見神の孫、櫛名田比売（くしなだひめ）、大山津見神の女（むすめ）の神大市比売（かむおほいちひめ）としており、特に櫛名田比売との間の御子、八島士奴美（やしまじぬみ）神と大山津見神の女（むすめ）の木花知流比売（このはなちるひめ）から淤美豆奴神（おみづぬのかみ、八束水臣津野命）そして大国主神に至る系図が記されており、これに反するような記載がよしとされなかったのかもしれない。
　飯石郡須佐（すさ）郷条に、「神須佐能袁命、詔（の）りたまひしく、『此の国は、小（ちさ）き国なれ雖（ども）、国処（くにどころ）在り。故、我が御名は、木石には着（つ）けじ』と詔りたまひて、即ち己が命の御魂（みたま）、鎮（しづ）め置き給ひき。然して即ち大須佐田（おほすさだ）・小須佐田（をすさだ）を定め給ふ」とある。須佐能袁命が御魂を鎮むとは、そこを終焉の地とされたことになる。大原郡の御室山に御室を造らせ、宿っておられたが、その地や木石ではなく、田にその名を残された（須佐能袁命の時に、山間に水田が営まれていたとなると頭が混乱する。すでにみた隣の多祢郷条に、所造天下大神命、大穴持命と須久奈比古命が稲種をこの地に落としたとあった）。須佐能袁命、所造天下大神命、大穴持命が同じ時を過ごしており、平成人の時系列意識では頭が混乱する。神は長寿とはいえ、お亡くなりになっており、時系列があってしかるべきかと思うが。
　こうしてみてくると、須佐能袁命は、その御子を含め、出雲との係わりが深い。安木に降りられ、意宇郡大草郷、島根郡山口郷、同方結郷、秋鹿郡恵曇郷、同多太郷、神門郡八野郷、同滑狭郷に御子が居られ、大原郡御室山に室があり、同佐世郷に行かれ、飯石郡須佐郷に生涯を終えておられる。韓（から）との係わりもあり、出雲土着ではないが、出雲に一生を終えられた神と、風土記はみなしていよう。その御子と共に、国土を形成し、植樹し、田を拓かれた姿が描かれており、乱暴の果てに高天原から追放された神の印象は無い。また、島根郡、秋鹿郡は「国引き」された地であり、八束水臣津野命と時を共にしておられよう。
　「記紀」においては、イザナミとスサノヲを黄泉の大神とすることにより、出雲自体が黄泉の上にあるかのごとき印象を与えている。黄泉の国から戻ったイザナキが出雲やその近辺では禊をせず、わざわざ、筑紫（つくし）の日向（ひむか）の橘（たちばな）の小門（おど）の阿波岐原（あはきはら）で禊（みそぎ）をする。黄泉に通じる出雲、禊の日向のイメージ造りともいえよう。

（ウヤツベ、イヒシツベ、ハタツミ）
　出雲郡健部（たけるべ）郷条に、元来は宇夜（うや）であり、宇夜都弁命（うやつべのみこと）がその山の峰に降りられたからとしている。宇夜都弁命を祭神とする社は神代神社と注され、社伝に、「この神がこの地に天降られて以来、開拓・耕作・漁・女の道など、住民を守り、教え賜う神と伝えられている」とある。これからすれば、「うや」は「うやまふ」、「宇夜宇夜（恭）しく」の宇夜とみられよう。「つべ」は記紀の「とべ（女性首長）」に相当し、「女の道」にも言及されており、女性神とみなされてきた。健部と変更したのは、神門臣古祢（ふるね）が、景行天皇（大帯日子淤斯呂和気天皇）の御子、倭健命に因んで変更したとしており、「記」の記述と近い。「紀」は、出雲振根（ふるね）が崇神天皇の求めた出雲の神宝の提出を断り、誅された事件と関連付けている。風土記としては、ヤマト政権に従属せしめられたというより、自ら健部を組織したとしたかったのだろう。
　健部郷は天津枳比佐可美高日子の降りていた漆沼郷の隣であり、要の地であったようだ。宇夜都弁命の祭祀をヤマトの倭健命、景行天皇に換えたのであるが、おそらくは、それまでにも興亡の歴史があり、少なくとも大穴持命が平定をした折りには、大穴持命に乗り換えていたことであろう。そのような変遷について、風土記は沈黙しているが、「ひめ」を娶るなかに、その痕跡を残していよう。

　飯石郡飯石郷に降りておられたのが伊毘志都幣（いひしつべ）命という。伊毘志都幣命を祭神とする飯石神社の由緒に、磐石の神としている。「伊毘志都幣命の天降りましたと伝える磐石が御神体となっているので、本殿はなく、幣殿、通殿、拝殿を配している。即ち磐境、磐座という自然信仰の形態をそのままの姿で現在に伝えている。又、この地を命の降臨の聖地として、古来注連縄を用いないのも特殊の習慣である」とある。元来は、伊鼻志（いひし）と表記されており、毘は甲類の「ひ」あるいは「び」、鼻は甲類の「び」であり「びし」であったものを「ひし」と変更したものか。神亀三年に飯石としたが、「いひ（飯）」では伝承と一致しがたい。
　天降りした神を磐石のみをご神体として崇敬しており、「いいし」が「いひし」に訛ったとでもしたのか。「い」は息吹の「い」生気のあること、「つべ」が女性形であり、「さざれ石が巖となる」永い時をかけて成長する石を象徴するなどは、岩が割れて石になるとする平成の人には妙なことかもしれないが、石の女神であったのかもしれない。出雲には多くの石神が祭祀されており、石に秘められた「ひ（霊）」に神の姿をみていたのであろう。また、神門郡と出雲郡の間の湿地を埋め立てるに、河川を通じて大量の花崗岩質の土砂が得られたことも想起されよう。

同郡波多（はた）郷には、波多都美（はたつみ）命が、降りておられる。波多小川の上流の山中である。波多神社の由緒では、「天孫系でも出雲の須佐之男・大國主系でもなく、もっと古くからの神」とみておられる。「はた」は旗、機でもあるが、この地の植生では桑や麻といった材が見られず、製糸や機織りとは結びつきがたい。
　稲は水田種子（たなつもの）とされ、粟、稗、麦、豆を陸田種子（はたつもの）という。同郡多祢郷と須佐郷では稲種や稲田に触れられていた。多祢郷には、焼村（たきむら）山がある。山焼きでもしていたのであろうか。「『はた』は『火田（ほた）』の意で、焼畑をいう語であろう（字訓）」とされる。むしろこちらの関係の神と見る方が状況に合う。
　風土記中に、明確に、天降りと記された神のみを取り上げた。もっと多いと思われるが、どの神を天神とすべきかが分からないので、これに止める。ただ、このような古い神々を崇敬していた人々は、稲作により力を蓄えた族から、追いやられ、祭祀を維持することが困難となったことであろう。

**出雲の天の下の神々**

　（クシイナタミトヨマヌラヒメ）
　記紀との関連では、飯石郡熊谷郷条の久志伊奈太美等與麻奴良比売命をどうみるかが難しい。妊んで産まんとしてここに至ると、曲りくねった谷（熊谷）であったと記すにすぎず、須佐能袁命との関係が何も記されていない。その前に、久志伊奈太美等與麻奴良比売命の名の由来が定かで無いことに困惑する。
　この名を「くしいなだ・みとあたはす・まぬら・ひめ」と訓じる説がある。食物文化考（「記」神話と稲作文化；池添博彦[HP](https://www.jstage.jst.go.jp/article/oojc/25/0/25_KJ00000733488/_pdf)）に、「クシナダは奇し稲田の約で、霊妙な稲田の意、ミトアタハスは "御門（陰）をお与えになる"、マヌラヒメは“真寝る姫”である。稲穂（櫛名田比売）が、荒ぶる神である雷電（須佐之男命）との交りによって、実ることを表象している」とあった。稲光を浴びる稲穂が豊作となるという観点からみておられる。
　吉野裕氏によれば、国学者の内山真竜（またつ）氏がこの訓を思いつかれたそうで、「御門（みと；陰）を与はす」、「ま寐（ぬ）ら」すと解釈したとされるが、吉野氏は、「與」一字を「あたはす」と訓じることへの疑問、美等の乙類の「と」に、甲類の御門の「と」をあてていることから、この説を避け、水豊（みとよ）真沾（まぬら）とされた。水が豊かなこと、真はまこと、沾はぬらすこと、濡れていて乾くことをしらない神異な稲田の姫とされた（久志伊奈太美等與麻奴良比売について；[HP](https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihonbungaku/18/2/18_KJ00010044668/_pdf)）。山の水がしみこんで地下水となって流れる通路を下樋（したび）といい、下樋の水が田を湿おし、沼となり、小川となる所に部落形成される、そのような生活を支える稲田の比売とみておられる。
　水豊が身豊で真沾が間沾であれば、埴輪の豊潤で多産そうなイメージともなろう。名の由来が記されておらず、様々な解釈ができようが、「記紀」の記述により、この比売が「記」の櫛名田比売であり、妊んでいるのは当然のごとく、須佐之男命との間の子とされる。ただ、風土記は、父の名、また、生まれた子の名については、沈黙している。

　風土記には、すでにみたごとく、須佐能袁命の御子、五男二女が記されているが、その母についての言及も、一切ない。「記」は、すでにみたように、二人は須賀の地に宮を造営し、その子、八島士奴美神が大山津見神の子木花知流比売を娶り、その御子の系譜を出雲の子孫とする。
　風土記においては、久志伊奈太美等與麻奴良比売命は、一人で、熊谷でその子を産んだといわんばかりであり、須佐能袁命は飯石郡須佐郷を終焉の地とし、田に名を残したのみである。夫婦であれば、二人が須佐郷あるいは大原郷御室山の室に一緒におられてよく、そこで子を産まれるのが普通であろう。その双方からかなり離れた谷に於て、一人で産むようなことが当たり前の風習であったとは思いがたい。出雲の始祖としての夫婦とするには、何か冷めた印象があり、首をかしげざるを得ない。
　「記紀」においては、スサノヲは、イナダヒメとその子を残し、根の堅州国、黄泉のイザナミの元に行く。従ってこの母子の素性を明確にして、宮を造営し、地上における祖として、その系譜を残すことができねば、この二人を出雲の祖として定着させることはおぼつかない。しかし、風土記は、須佐能袁命も久志伊奈太美等與麻奴良比売命をも出雲の祖と記すことは無い。大穴持命が出雲を平定する以前には、諸族の祖神がおり、国引きをした八束水臣津野命、意宇郡屋代郷の降りた天乃夫比命、野城駅に坐す野城大神、伊弉奈枳の麻奈子熊野加武呂乃命などと記すごとく、出雲の祖神という表現はない。
　天下を平定した大穴持命のときに、その必要が生じ、天下を所造した大神と合体させ、所造天下大神、大穴持命とすることで出雲世界を統一しようとしたのではあるまいか？しかし、これも意外にむつかしく、最終的に、ヤマト政権に国譲りをしたことで、更なる変化が加えられ、複雑な伝承と化したようにみえる。

　（ヤツカミヅオミズノ、オミヅヌ）
　風土記は、冒頭に、出雲と名付く所以は、八束水臣津野命の「八雲立つ出雲」による、意宇の所以も、国引きを終えた八束水臣津野命が杖を突き立てて「おゑ」と言われたことによると記しており、出雲を出雲たらしめたのは、八束水臣津野命といいたい。
　八束の「つか」は一握りの長さの単位、長さの単位は「さか（尺）」であるが「つか」としたのは「つの」との関係からであろう。八は八雲、八風、八節、八音、八卦などの八で、調和がとれ、縁起が良く、総体的で、沢山なイメージがある。「おみ」は「神あるいは神に仕へる者（字訓）」とあり、水臣は水神ともみられる。津野を「づの」と訓じるのは、淤美豆奴（おみづぬ）神の訓に合わせているもので、万葉仮名では「つの」となる。「つの」は古くは「つな（綱）」のこと、水神であり、同時に「やつか」の「つの」を操（あやつ）る。地の裂け目を狙い、平らで巾広の鉏を入れ、「くに（土）」を切り裂き、舟のようなものに乗せて引き寄せ縫い合わせ、その綱を杙となる山に括り付け固定する巨人神である。初国を小さく造り、布を縫い合わせるように、「くに」を引き、縫い合わせるという独自の構想がある。
　西方に、「栲衾（たくぶすま）志羅紀（しらき）の三埼（みさき）」を八穂尓支豆支（やほにきづき）の御埼（みさき）に引くことからはじめて、東方に、「高志（こし）の都都（つつ）の三埼（みさき）」を三穂の埼に引き終えており、出雲の西から東まで熟知されている神となろう。
　ただ、八束水臣津野命が継ぎ足された小さな初国が何処かとなると、頭がこんがらがってくる。初国の姿が見えない。平成の世の人は、所造天下大神の名からすれば、天の下の地を造成しており、それは日本全土のことであり、出雲はそのわずかな一部にすぎず、小さな国なら分るが、初国となると頭をひねってしまう。
　島根郡手染（たしみ）郷条に、所造天下大神がこの国を丁寧に造ったとある。八束水臣津野命が引いてきた地のことであり、八束水臣津野命は天地開闢からおられる所造天下大神に匹敵する神となり、時系列についても頭が混乱してくる。
　出雲郡杵築（きづき）郷条には、「八束水臣津野命の国引き給ひし後に、天の下所造らしし大神の宮奉（つかへまつ）らむとして、諸（もろもろ）の皇神等（すめかみたち）、宮処（みやどころ）に参集（まゐつど）ひて杵築（きづ）きき」とある。記念すべき大業を終えた八束水臣津野命が、所造天下大神の「宮奉」という。奉が「つかへまつる」となれば、奉仕することである。諸々の出雲の神々を参集させる、つまり、その首に当ると解せ、その任にある八束水臣津野命が、果たして、所造天下大神の水臣となり、杵築の宮に奉仕するのであろうか？「たてまつる」であれば宮を造成することになる。
　かほどの大業を成した神ならば、逆に八束水臣津野命の宮が造られ、祭祀されてしかるべきである。しかし、それどころか、ここ以降、風土記からは、忽然とその姿が消えている。出雲の国引きの最大の功労者に対して、あまりに冷淡で愕然とする。
　大国主神が国譲りの後、幽界に隠れたごとく、八束水臣津野命が宍道湖に隠れ、意美豆努命となったとする（古代出雲神話の謎、[HP](https://sites.google.com/site/izumoshinnwa/home/izumofudoki)）説もある。迷宮入りの事件に翻弄される捜査官の気分になる。

　出雲郡伊努（いぬ）郷に、国引きをした意美豆努命の御子、赤衾伊努意保須美比古佐倭気（あかふすまいぬおほすみひこさわけ）能（の）命が坐（ま）す。通例、「国引き」ということで意美豆努命は八束水臣津野命と同一視される。「記」が淤美豆奴神として須須佐之男命と櫛名田比売の系図に、四世として組み込んだことが拍車をかけた。
　「紀」に、「眞床追衾（まとこおふふすま）をもって皇孫、天津彦彦火瓊瓊杵尊を覆ひ、これを降ろしむ」とあり、衾で覆うことは即位を暗示するとされる。「あかふすまいぬ」は赤衾の中に寐ていることであり、この御子の位は高い。この命の后（きさき）を天瓺津日女（あめのみかつひめ）命といい、「みか」は瓶で祭祀用具であり、「天」が付され「比売」でなく「日女」、天の祭祀に関する日女（天神）を「妻」ではなく「后」としており、まさしく貴い御子であられる。「おほす」とは大洲、「み」は神の称、「わけ」は湧くことで、砂を湧きあげ洲を為す男神と思われる。
　八束水臣津野命が最初に国引きしたのが、「栲衾志羅紀の三埼」、栲衾は楮（こうぞ）の布で作り、大切なものを包む厚みのある布団で素色、これを新羅の俗としている。伊努の地は、そうして引かれた八穂尓支豆支の御埼に属し、衾の俗があったのだろう。神門郡古志（こし）郷条には、伊弉弥命の時に、古志（越）の国人が池を造る堤防工事にやってきたとあった。彼等の技術は伊努の湿地の開拓にも用いられたことであろう。彼等の赤玉を好む俗が波及し、素っ気ない栲衾より赤衾が好まれたのかもしれない。
　意美豆努命の「お」は尊称、「ぬ」は古くは沼、水沼の神の性格である。伊努の地は国引きされた支豆支の御埼を本土に縫い合わせる所であり、当初は沼のような湿地であった。水沼の神として、洲を為す御子と共に開拓されたことで、古くから崇敬された神と映る。八束水臣津野命の壮大な仕事とは内容が異なり、同一神とはみなしがたい。
　出雲郡は、杵築と美談と出雲御埼山とが所造天下大神の影響下にあり、漆沼と宇賀と神名火山とが神魂命の影響下にあり、伊努が意美豆努命の影響下にあるという分布となっている。

　国引きされた地の一つを島根と名付く所以も八束水臣津野命によるが、島根がこの神の影響下にあるかとなれば、全く異なる。島根には、伊佐奈枳命の御子一神、神魂命の御子四神、須佐能袁命の御子二神、熊野大神命、佐太大神、所造天下大神の御子一神という神々が坐し、八束水臣津野命の姿はなく、それらの神々の進出の時系列も分からない。
　「記紀」に従えば、神魂命（神産霊神）、伊佐奈枳命、須佐能袁命、八束水臣津野命（意美豆努命）、所造天下大神（大穴持命）の順になるが、そういった時系列はここには無い。神々の序列も分からない。
　国引きをすれば、その地には元の国の神も付随してこよう、現実的には、国引きされた地の開拓に、古志のごとく、渡来人が関与していたことであろう。出雲固有ではない神々が紛れ込んで、いつのまにか、出雲の神となった可能性もあろう。祖神として崇敬する族のそれぞれの由来があり、その族のその後の消息により、影響力が左右される。八束水臣津野命を崇敬する族は、出雲の西から東にかけて、渡来人を受け入れて最大の影響力を行使して不思議はないが、その族は一体どこに消えてしまったのだろう？

　（アメノシタツクラシシオホカミとオホナモチ）
　所造天下大神、大穴持命と並べて記す表現は風土記特有であり、「記紀」には無い。意宇郡出雲神戸条に、「五百（いほ）つ鉏々（すきすき）猶（なほ）所取（と）り取（と）らして天の下所造（つく）らしし大穴持命」とあることに困惑した。大穴持命は天下を平定し、国譲りをした世の命である、天の下を造成した大神となれば、天地開闢以来の神であり、時空を自在に往来できねばならない。タイムマシンの世界であり、SF（Science　Fiction）の世界となる。平成人としては、天下の造成は太古であり、万物が産まれ人間が産まれ、集落ができ国ができ、天下が平定されるなんぞは、はるかに彼方の後世でなくば、頭がついてゆかない。
　所造天下大神＝大穴持命とした事情が何なのか？

　さて、出雲大社の由来をみてみよう。同大社の「語鎮座の由来」には、天照大神の命により、大国主大神のために、天日隅宮同等の宮を造営されたとされている。『大国主大神様が国づくりによって築かれた国は、「豊葦原の瑞穂国」と呼ばれ、あらゆるものが豊かに、力強く在る国でした。大神様は国づくりの後、築かれた国を私たち日本民族を遍く照らし治める天照大御神様へとお還し(国土奉還=国譲り）になりました。そこで天照大御神さまは国づくりの大業をおよろこびになり、その誠に感謝なさって、これから後、この世の目に見える世界の政治は私の子孫があたることとし、あなたは目に見えない世界を司り、そこにはたらく「むすび」の御霊力によって人々の幸福を導いて下さい。また、あなたのお住居は「天日隅宮（あめのひすみのみや）」と申して、私の住居と同じように、柱は高く太い木を用い、板は厚く広くして築きましょう。そして私の第二子の天穂日命をして仕えさせ、末長くお守りさせます。と申されました。こうして大国主大神様は目に見えない世界を司られ、天照大御神様の御命令によって高天原の諸神がお集まりになり、大国主大神様のために宇迦山の麓に壮大なる宮殿が造営されました。そして大国主大神様は永久にお鎮まりになって人々の幸福のために慈愛をそそいで下さることになり、今に至るまで厚い信仰をお受けになっています。
この荘厳な御社は天日隅宮を始め様々な名称で称えられてきましたが、現在は「出雲大社（いづもおおやしろ）」と申しております。（出雲大社、[HP](http://www.izumooyashiro.or.jp/about/ookami)）』とある。

　「記」は、大国主神が「出雲国の多芸志（たぎし）の小浜に、天（あめ）の御舎（みあらか）を造りて」とあり、前後の文脈からすれば、「造りて」の主語は大国主神であり、大国主神サイドで造るとなろう。対話の相手は、使者を通してであるが、天照大神、高木神（高御産巣日神）であり、この二神に条件を打診している。前段に「僕（あ）が住所（すみか）をば、天つ神の御子の天津日継（あまつひつぎ）知らしめす、とだる天（あめ）の御巣（みす）如（な）して」とあり、皇孫の天の御巣と同等にすることを求めている。御巣とは「すみか」と同じことであり、天照大神ではなく、皇孫同等の宮を想定していよう。後段には、櫛八玉神が、調理人として、海の底の赤土で器を作り、海藻を乾かして火種とし、高天原の天の新巣からススが垂れ、地下の底に固まるほど焚き、深い海に縄を垂らし魚を釣り、多くの海の幸を献上するとしている。宮を天に届くほど高く、海の底、地下（根の国）に下るほど低く造る所以といわんばかりである。

　「紀」では、本文において、この宮に関する言及は無い。古語拾遺においても、この件には言及が無い。少なくともヤマト政権としては、公式には、大国主神の国譲りと出雲大社の造営とに、天照大神あるいは高皇産霊尊が関与したかどうかへの直接のコメントを避けている。ただ、一書の第二に、高皇産霊尊が大己貴神（おほあなむちのかみ）に天日隅宮（あめのひすみのみや）を造営することを約束し、天穂日命（あまのほのひのみこと）に祭祀を主（つかさど）らしめたとする記述を引用している。
　出雲国造家の「出雲国造神賀詞」においては、高御魂（高皇産霊神）と神魂（神産霊神）が、穂比命（ほひのみこと）に、その子の天夷鳥命（あめひなどりみこと）と布都怒志命（ふつぬしのみこと）とを連れ天降らせ、大国主神の心に媚びなだめて国譲りをなさしめたとする。大国主神は、地上を皇孫の鎮める大倭国（おほやまと）とし、己の和魂（にぎみたま）を倭大物主櫛𤭖玉（やまとおほものぬしくしみがたま）命と称して三輪の神奈備に祭り、阿遅須伎高孫根（あぢすぎたかひこね）命の御魂を葛木（かつらき）の鴨の神奈備に祭り、事代主（ことしろぬし）命の御魂を宇奈提（うなで）の神奈備に祭り、賀夜奈流美（かやなるみ）命の御魂を飛鳥の神奈備に祭るなら、皇孫を守護する神となると言い置き、自らは杵築宮にお入りになったとする。
　一書の第二は、出雲国造家の強い意向を受けて、紀に組み込まれたようにみえる。しかし、風土記の記述はいささかも異なる。

　出雲郡杵築郷条では、すでにみたように、八束水臣津野命が「所造天下大神の宮に奉らむとして」宮を築いたとあった。所造天下大神＝大穴持命であれば、奇怪なことに、国引きを終えた直後に、すでに大穴持命が存在し、そのために杵築に宮を造ったことになる。
　楯縫郡条には、「神魂命（かむむすひのみこと）詔（の）りたまひしく、『吾（あ）が十足（とだ）る天（あめ）の日栖（ひすみ）の宮の縦横（たてよこ）の御量（みはかり）は、千尋（ちひろ）の栲紲（たくなは）持ちて、百八十（ももやそ）結（むす）び結び下（さ）げて、此の天の御量持ちて、天（あめ）の下（した）所造（つく）らしし大神（おほがみ）の宮、造り奉れ』」とある。神魂命の天の宮を参考にして、所造天下大神の宮を造れということで、すでにみたように、御子を降ろし、宮を造営し楯や矛を作らせ、そして、その祭主ともなしていた。
　つまり、ここでは、所造天下大神の宮は、国譲りとは全く関係なく造営されており、天照大神あるいは皇孫の宮ではなく、神魂命の天日栖宮を模して造営されたとなる。実際、嘗ての出雲大社の空に突き出る高床の建築は、ヤマト政権の宮ではみられない独特の構造であり、神魂命の天日栖宮を模したとする伝承が支持されよう。
　となれば、所造天下大神の宮と国譲り後の大国主神の宮とは区別すべきかと思う。それは、所造天下大神と大国主神を別個の神とすることを促す。

　また、所造天下大神、大穴持命という表現のあいまいさが、常に読者の頭を混乱させる。
　風土記では、神門郡朝山（あさやま）郷には神魂命の女（むすめ）、真玉着玉之邑日女（またまつくたまのむらひめ）命がすでに居られ、これを「所造天下大神、大穴持命」が娶られた、同郡八野（やの）郷には、須佐能袁命の女、八野若日女（やののわかひめ）命がおられ、「所造天下大神、大穴持命」が娶ろうとして屋を造らせた、同郡滑狭（なめさ）郷にも、須佐能袁命の女、和加須世理比売（わかすせりひめ）命がおられ、「所造天下大神」が娶り通われた、としている。
　文字通りに読めば、女（むすめ）の父の神魂命や須佐能袁命の影響下にあった地に、「所造天下大神、大穴持命」が後からやってきて、その女（むすめ）を娶り、勢力下に置いたごとく映る。ところで、神魂命は出雲固有の天神であり、須佐能袁命は外来の命であった。所造天下大神が神魂命の女を娶ることには違和感はないが、所造天下大神が須佐能袁命の女を娶ることには違和感がある。大穴持命であれば違和感はない。そのために、「所造天下大神、大穴持命」という表現にしたと思われる。
　所造天下大神は、天地が分かれた時からの神であり、「国引き」の時点、須佐能袁命の来訪以前からすでに出雲におられる神である。大穴持命は「記紀」ではスサノオ命が高天原を追放され、出雲に降りてからの子であり、「記紀」の大穴持命が出雲風土記の所造天下大神を兼ねることは、時系列では成立しない。「記」では、大穴持命を須佐之男命の七世孫としており、相当の後世のこととなる。「紀」では「記」を訂正して、大己貴命の父を素戔嗚尊として、この時間差を埋めているが。

（アメノシタツクラシシオホカミ）
　すでにみたように、出雲郡美談（みたみ）郷条に、所造天下大神の御子の和加布都努志（わかふつぬし）命が、「天地（あめつち）初（はじ）めて判（わか）れし後、天（あめ）の御領田（みた）の長（をさ）、供（つか）へ奉（まつ）り坐（ま）しき」とあった。これは、天の下を造成した大神が、地上に天の田を降ろすための準備をしたものと解せる（天地が初めて分かれて後、いかほど後に、天に田ができたものか？所造天下大神が、「国引き」後の出雲の美談の地に御子を降ろすまでの時間差はいかほどか？時系列の飛躍が甚だしい）。
　楯縫郡玖潭（くたみ）郷条では、所造天下大神自身が、天の御飯田の御倉を造る所を求めて巡行されたとある。八束水臣津野命の国引き後でなくば、玖潭の地はない。御子を天の御領田の長にし、自ら天の御飯田の御倉を造るとする時は国引き後となり、天地の初めて判れし後のイメージとは乖離が甚だしい。また、所造天下大神は八束水臣津野命に杵築に宮を造営してもらっており、八束水臣津野命の方が古い神ではないかという気すらしてこよう。
　所造天下大神は、国引きされた地に積極的に進出しておられるようだ。ならば、所造天下大神が八束水臣津野命の労を謝し、宮を造営して祭祀されてよさそうなものではないか？
　神門郡には大神の御稲、稲積、御冠、御陰（頭飾り）、御桙、御屋となる山、また、宮材を造る山がある（平地ではなく、山の稲となれば陸稲となりそうであるが、豊富な水とも関連しており水稲か）。宮材とあるが、神門郡に宮があるとは記されていない。飯石郡三屋（みとや）郷には大神の御門（みと）があり、御門がある以上、その奥に社か宮か、何かがあるはずだが、そういう記述もない。山がご神体でその門と考えられているようである。所造天下大神は、山間部におられたとみえる。宮材は杵築に宮を造営する際のものと解することもできよう。八束水臣津野命が杵築に大神の宮を造営することで、平地への進出が促されたと映る。出雲郡宇賀（うか）郷では、神魂命の女（むすめ）、綾門日女（あやとひめ）命がすでに居られ、所造天下大神の誘いをお断りになり、北に逃げて海のほとりの窟にお隠れになった。天岩戸にお隠れになった天照大神のようであるが、この窟は、すでにみたように、黄泉への坂、黄泉への穴と称された。夢でこの窟のそばに行くと必ず死ぬと恐れられたことによる。ちなみに、この窟は縄文時代からの墓場であった。
　神門郡多伎（たき）郷には、所造天下大神の女、阿陀加夜努志多伎吉比売（あだかやぬしたききひめ）命が居られる。この比売の名の由来にはお手上げである。「かや」と「加耶」を引っかけ、半島出身とする説がある。同郡の高岸（たかきし）郷には、御子、阿遅須枳高日子（あぢすきたかひこ）命が居られる。同郡の八野（やの）郷に居られ、大神が娶られ屋を造られた須佐能袁命の女（むすめ）、八野若日女命を二人の母とする説が地理的には合致する。また、「記」により、母を宗像の多紀理毘売（たきりひめ）命（紀の田心姫「たごりひめ」）とし、阿陀加夜努志多伎吉比売を高比賣命（たかひめ、別名、下光「したてる」比賣命、下照姫）とする説もある。果たして、そうだろうか？
　「ぬし」は「うし」でもあり貴く、治めることであり、「たきき」は「たき」、「たぎつ」からきて、水勢が強く下から湧き上がること（字訓）。稲田を重視する所造天下大神の女（むすめ）であり、豊穣な水により稲作を育む女神の側面があろう。多伎は西出雲の海岸に面した地、その地を治め、稲などの交易を活性化された比売であったかもしれない。
　意宇郡の阿太加夜社の御祭神を阿陀加夜努志多伎吉比売ともする。多伎から勧進されたとされ、「雲陽誌」に、「出雲江にも阿太加夜の神社を勸請す、故に本名出雲江をいはすして阿太加夜といひけるにや、いまた詳ならす」とあり、出雲江を「あだかや」江と称し、出雲を「あだかや」とし、この地を出雲「あだかえ」とする呼称が平成の世にまで伝わる。入江を「可也（かや）」と称する俗もあるという。入江を治める女神となる。出雲江は国府に通じる意宇川の河口であり、海上交通の要地である。阿太加夜社は、古く別格扱いされ、出雲国造一族により崇敬されたという。一族は、稲の豊穣、海上交易の地を治める女神を勧進して、周辺にその恩恵を説き、勢力を拡大したのかもしれない。
　阿遅須枳高日子命ついては、意宇郡賀茂神戸条に、「葛城の賀茂の社（やしろ）に坐す」とあり、事代主神と一括であり大国主神の御子とすべきである。謎めく阿陀加夜努志多伎吉比売は所造天下大神との関連で成立しよう。

# 　天の下を造成した大神とは、その名からすれば、出雲のみでなく天下を造成した大神である。出雲世界固有の神とすべきではないのかもしれない。所造天下大神に対して、八束水臣津野神が出雲の神々を集めて宮を奉ったということであり、大変な敬意が払われた大神であったことになる。　「記」には、大国主神の前に、「海を光（てら）して依り来る神」、「御諸山の上に坐す神」、いわゆる三輪の大物主神、「紀」では大己貴神の幸魂（さきみたま）、奇魂（くしみたま）が訪れたとされる。「紀」の先の一書第二では、大国主神が国譲りをした後、皇孫が天下を治めるに至るまでは、高皇産霊尊が大物主神に女（むすめ）の三穂津姫を娶し親族とし、「八十万神を領（ひき）ゐて、永（ひたぶる）に皇孫（すめみま）の爲に護（まも）り奉（まつ）れ」と統治を託している。所造天下大神も海の彼方から神門郡多伎を訪れ、そこから勢力を拡大してゆかれた神と考えることはできまいか？　（オホナモチ）　大穴持命は越の平定を終えたところで、自分の平定した国を皇孫に奉った、と自主的な国譲りのイメージを持たせ、ただ、出雲は玉を置いて自ら守るとしている。意宇郡母理郷条に、「所造天下大神、大穴持（おほなもち）命、越（こし）の八口（やくち）平げ賜（たま）ひて還（かへ）り坐（ま）す時に、長江山（ながえやま）に来坐（きま）して詔（の）りたまひしく、『我（あ）が造り坐して命（し）らす国は、皇御孫（すめみま）の命（みこと）、平（たひら）けく世（みよ）所知（し）らせと依（よ）せ奉（まつ）る。但（ただ）、八雲立つ出雲の国は、我（あ）が静（しづ）まり坐す国と、青垣山（あをかきやま）廻（めぐ）らし賜ひて、玉珍（たま）置き賜ひて守（も）りたまふ』」とある。　「記紀」は、大国主神を伊那佐（いなさ）の小浜（五十田狹の小汀）に追い詰めて、国譲りを承諾させたとしている。古語拾遺も、文脈的には、それを踏襲している。また、出雲国造神賀詞においても、「國作（くにつくらし）し大神（おほかみ）をも媚鎮（こびしづめ）て大八嶋國（おおやしまくに）現事（あらはこと）顕事（うつしこと）事避（さら）しめき」としており、大意としては変わりがない。　それが母理の名の所以であるが、その玉が母理に置かれたかは分からない。置かれておれば、珍玉として大切に祭祀されていようが、その気配は無い。　「記」は、大国主神は、自分は「百足（ももた）らず八十（やそ）垌手（くまで）に隠れ」、我が子と百八十神が皇孫の前後に仕えるなら、背くものはない、とされたとしている。「紀」も、「『吾この矛を以て、つひに功（こと）治（な）せることあり。天孫（あめみま）もしこの矛を用（も）て国を治（し）らば、必ず平安（さき）くましましなむ。今、我まさに百足（ももた）らず八十隈（やそくまで）に隠去（かく）れなむ』。言い終わるや遂に隠る」としている。古語拾遺も、これを踏襲している。一書の第二は、高皇産霊尊の提案が、「かくのごとく慇懃（ねむごろ）なり。敢へて命（おほせこと）に從はざらむや。吾が治（しら）す所の顯露（あらは）の事は、皇孫（すめみま）まさに治（をさ）めたまふべし。吾は退りて幽事（かくれたること）を治めむ」と述べ、身に八坂瓊を付け隠れたとしている。この一書はすでにみたように、出雲国造家の見解を容れたものであろう。　風土記は、顕事が皇孫、幽事が大国主神という見解には同意していない。風土記の編纂者としては、この点に関しては、出雲国造家の見解に同意することができず、大国主神は出雲を特別の国として残したはずであると固執している。出雲の魂である玉を帯びて大国主神が幽界に隠れられたのではない、その玉を出雲に置き、その玉に依り、今も出雲を守護しておられるといいたいのであろう。　「記」は大穴持命を淤美豆奴神の孫としている。淤美豆奴神＝意美豆努命＝八束水臣津野命としたことにより、暗に、大穴持命は八束水臣津野命の系譜にあるとした。これは、甚く、出雲側を刺激したのであろう。風土記が、のっけから「所造天下大神、大穴持命」とするのは、「大穴持命は八束水臣津野命の系譜には断じてない」と決然として示したごとくに映る。風土記は、大穴持命を所造天下大神そのもの（あるいは継承者）としていよう。　すでに、所造天下大神は神門郡から飯石郡、出雲郡、楯縫郡、島根郡へと進出されたことをみた。大原郡への進出は大穴持命のときのこととなろうか。この地は、出雲、飯石、仁多、意宇の各郡への要路に位置する要衝の地であり、出雲を統一するには不可欠の地であり、容易くは制圧できない所である。神門の文化が、赤川を伝って流入し、まず、出雲に通じる河口の矢口社を中心に栄え、一方、内海の意宇側からの文化も波及しており、後には中流の宇能遅神社方面の重要性が高まり、かつては郡家がその近辺に置かれた。　大原郡屋代（やしろ）郷は「垜（あむつち）立て、射たまひし処」とあり、ここから所造天下大神が矢を射て届く範囲が屋裏（やうち、矢内）郷となる。矢とあり、武力で制圧されたことになろう。赤川河口方面の神原（かむはら）郷を、「御財を積み置きし処」としておられ、射はその地を清め、安全を保つ意味もあったのかもしれない。　この地の郡家は、後に、飯石、仁多との要路にあたる斐伊（ひ）郷に移る。同郡城名樋山条に、「八十神（やそかみ）を伐（う）たむと為（し）て城（き）を造りき」とあり、同郡来次（きすき）郷条に、八十神を青垣山の内から追ひ払ったとしており、所造天下大神が仁多と意宇に向かう拠点を得たことになろう。これは、「記」において、八十神を追ひ避き、追い伏せ、追い払い、始めて国を造るとするシーンであり、須佐之男命が大穴持命に国を作り、大国主神となり、宇迦の山の麓に宮を造れ、と言ったとするところである。　このことからすれば、この所造天下大神は大穴持命をさすものとみなせよう。出雲郡御埼山条に、「西の下（ふもと）に大神の社（やしろ）坐す」とある。大穴持命が国を意識し、大国主神として宮を造営したとする伝承もあったのだろう。御埼の地は同郡条に、「鮑（あはび）は出雲の郡（こほり）尤（もと）も優（まさ）れり。所捕（と）る者は、所謂御埼（みさき）の海子（あま）」とあり、海人族の多く住む地であったとされる。風土記の美佐岐社があり、海人族が夕日を遙拝する社であったようだ。大国主神の天下平定には海人族の協力が欠かせなかった。（「記紀」伝承が流布されて以降、日御碕神社となり、神ノ宮（上宮）は素盞嗚尊の鎮ります霊地、日沈宮（下宮）は天照大神を斎き祀る社（延喜式神名帳調査、日御碕神社；[HP](http://engishiki.org/izumo/bun/imo430521-01.html)）となる）。　飯石郡多祢郷条には、須久奈比古（すくなひこ）命と天下を巡行（めぐ）る時に、この地に稲種を落としたとあった。同郡の琴引山の洞窟に所造天下大神の琴があったという。琴は記紀にみられるごとく、神意を伺うに際して奏するものとされた。須久奈比古命と天下を平定する策を熟慮されたのであろうか？大穴持命は意宇に入ることで出雲を統一されたのであろう。意宇郡宍道（ししぢ）郷では、犬を放ち、猪狩りをされ、越の八口を平らげるに出立するに拝志（はやし）郷の林が繁るの見て心が「はやし」たという。「はゆ」賞ゆ、栄ゆ、からきて「はやす」はもてはやす、栄（はえ）を与えることであり、事が成就する心地がしたのであろう。　意宇郡山代（やましろ）郷には御子の山代日子命が坐す。山代日子命を祭祀するのが山代社で、神名樋野の北の山（茶臼山）に置かれた。意宇の中核となる神名樋野の北に、どっかと坐す山のような御子ということか？北から南に面する小山であり、王の風格がある。　阿遅須枳高日子命は、昼夜泣く子で、高い所に登らせた。「甚（いた）く昼夜（ひるよる）哭（な）き坐しき。仍（よ）りて、其処（そこ）に高屋（たかや）造りて坐（いま）せき。即ち高椅（たかはし）を建てて登（のぼ）り降（くだ）らせて、養（ひだ）し奉（まつ）りき（神門郡高岸（たかきし）郷条）」とある。この子は物もしゃべれない。船に乗せて気張らしさせても泣き止まない。大神が夢に物云うことを祈願すると、御子が物を言う夢を見て、目覚めて御子に問うと「みつ」という言葉を口にした。何のことかと尋ねると、石川を渡り坂の上に至り、「ここだ」と言うと水がどっと流れ出た。御子はそれで沐浴すると、しゃべるようになった。この水で育った稲を妊婦が食べると、産まれた子がすぐにしゃべりだす、とする。「御須髪（みひげ）八握（やつか）に生（お）ふるまで、昼夜哭（な）き坐（ま）して、辞（こと）通（かよ）はざりき。尓（そ）の時、御祖（みおや）の命、御子を船に乗せて、八十島（やそしま）を率巡（ゐめぐ）りて、宇良加志（うらかし）給（たま）へども、猶（なほ）哭くこと止まずありき。大神、夢（いめ）に願（ね）ぎ給（たま）ひしく、「御子の哭く由（よし）を告（の）らせ」と夢に願（ね）ぎ坐（ま）ししかば、則夜（そのよ）の夢に御子辞（こと）通（かよ）ふと見坐（みま）しき。則ち寤（さ）めて問ひ給へば、尓（そ）の時、「御津（みつ）」と申（まを）したまひき。尓の時、「何処（いづく）を然（しか）云（い）ふ」と問ひ給へば、即ち御祖（みおや）の御前（みまへ）を立ち去り出（い）で坐して、石川（いしかは）を度（わた）り、坂の上に至り留（とどま）り、「是処（ここ）ぞ」と申したまひき。尓の時、其の津の水活（なが）れ出でて、御身（みみ）沐浴（ゆあ）み坐しき。故（かれ）、国造（くにのみやつこ）、神吉事（かむよごと）奏（まを）しに、朝廷（みかど）に参向（まゐむか）ふ時に、其の水活（なが）れ出でて、用（もち）ゐ初（そ）むる也（なり）。此（これ）に依りて、今も産（こう）む婦（をみな）、彼（そ）の村の稲を食はず。若し食ふ者有らば、所生（うま）るる子已（すで）に云（ものい）ふ也（仁多郡三津（みつ）郷条）」とある。　長い髭で泣きじゃくる姿は、「記紀」のスサノヲにみられる。スサノヲは母のイザナミが黄泉におり会うことができず、母が恋しく、母が成し遂げた恩沢に対する悲惨な運命の不条理に悩み、天で崇められる姉の母への無関心に鬱々とし、泣き続け、暴風のごとく荒（あ）れ荒（すさ）ぶ。「記」は阿遅須枳高日子命の母を宗像の多紀理毘売とした。この子が泣き、高い所や海に連れ出すということは、海の彼方の母恋しさとみたことによるのかもしれない。　ものをしゃべることができない姿は、「紀」の譽津別（ほむつわけ）皇子、活目入彦五十狹茅天皇（垂仁天皇）の物云わぬ御子の姿にもみられる。母の狹穗（さほ）姫は、愛する兄と引き裂かれ、天皇に嫁ぐも、兄に天皇を殺めることを託され、悩み果たせず、子を連れて兄の城にゆき攻め滅ぼされ、御子は天皇に引き取られる。そのことで物が言えず、泣きじゃくる御子であったとする。　「記」では、伊久米伊理毘古伊佐知（いくめいりびこいさち）命（垂仁天皇）の御子、品牟都和気（ほむつわけ）命。天皇は二俣小舟を軽池に浮かべて、この子と遊んだ。夢に、「我が宮を天皇の宮のごとく修理（をさめつく）るならしゃべるようになる」とお告げがあり、どの神かと問うと出雲の大神とあった。御子に二王を添えて、出雲に至り大神を拝（をろが）み終え、肥河（斐伊川）に仮宮を造り奉仕された。出雲国造の祖、岐比佐都美（きひさつみ）が食事を奉ろうとすると、御子が、「この河下に、青葉の山の如きは、山と見えて山に非ず。もし出雲の石𥑎（いはくま）の曾宮（そのみや）に坐す葦原色男（あしはらしこを）大神をもち拜（いつ）く祝（はふり）の大庭（おほには）か」と発声された。王達が帰り、天皇にこのことを報告すると、天皇は喜び、王を遣わし、神の宮を造らせたとする（天皇の宮に匹敵する宮が造営されたのはこの時とする伝承もあったことになる）。「記」は、大国主神の祟りと解したのであろう。「紀」は御間城入彦五十瓊殖天皇（嵩神天皇）政権が出雲の神宝を奪い、従えたとしており（「記」にはない記述であるが）、そのことに対する祟りと暗示したのであろうか。　阿遅須枳高日子命の伝承は、「記紀」に取り込まれ、違った展開をみせている。風土記においては、「あぢ」は味、「すき」は鉏、「たかひこ」は位の高い男児であり、「みつ」は、稲に不思議な力を与える瑞（みつ）水である。楯縫郡神名樋山条によれば、后（きさき）を天御梶日女（あめのみかぢひめ）命といい、御子の多伎都比古（たきつひこ）命を多宮（たく）で産んだとする。天の日女を后とする高日子であり、大国主命を後継する王となるべき存在であろう。「かぢ」は楮の類で祭祀の木綿（ゆふ）を造る材料であり、織姫のような存在である。多伎都比古は石神の御託（みよさし）であり、雨乞いすれば雨を降らせてくれる神という。「たきつ」であり、どっと溢れるごとく水をもたらす存在である。　また、神門郡塩冶（やむや）郷には、御子、塩冶毗古（やむやひこ）能命がおられた。塩冶毗古能命を祭神とする社は夜牟夜社であり、元来は、夜牟夜毗古能命であったのだろう。「やむや」は御間城入彦五十瓊殖天皇（崇神天皇）六十年の秋七月条（[日本書紀巻5](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki14.htm#六十年秋七月)）にある「止屋の淵」を想起させる。出雲振根（いづものふるね）が神宝を天皇に差し出した弟の飯入根（いひいりね）を撃ち殺した淵である。塩冶は盬冶が本字であり、盬には停止する意味があり、風土記では、この御子が父と異なり「なきやむ」ことにひっかけているのであろう。冶には美しく仕上げる意味があり、この御子の妻の塩冶比売命を艶冶（えんや；女性のなまめかしく美くしいこと）とシャレ込んだのかもしれない。風土記には、夜牟夜社が二つ、同夜牟夜社、塩夜社、同塩夜社が記されており、競ってこの神を祭祀したのであろう、社伝では産土神として崇敬されたとある。　これらからすれば、この親子は、農耕の水神、祭祀の織布の女神の取り合わせと映る。（クマノカムロ）　意宇郡出雲神戸条に、「伊弉奈枳（いざなき）の麻奈子（まなこ）に坐（ま）す熊野加武呂乃命（くまのかむろのみこと）」とあった。伊弉奈枳が高天原の神であるなら、その「まなこ（愛しき子）」を国譲り前の出雲に降ろすなどありえない。すでにみたように、この御子は「みけ（御食）」の神であった。島根郡朝酌（あさくみ）郷条に、「熊野大神命、詔（の）りたまひて、朝御餼（あさみけ）の勘養（かむかひ）、夕御餼（ゆふみけ）の勘養に、五つの贄（にへ）の緒（を）の処を定め給ひき」とあり、この地では、「是に捕（と）らゆる大き小さき雑の魚に、浜譟（さわ）がしく家闐（にぎは）ひ。市人（いちびと）四（よも）より集（つど）ひて、自然に鄽（いちくら）を成す」ともあり、イルカ、サメ、ボラ、スズキ、コノシロ、クロダイ、シラウオ、ナマコ、エビ、ミル（海藻）など名をすべてあげることができないほど豊富であるとしており、海の幸、山の幸など五種類の豪華な供物が用意されたのであろう。　出雲神戸条には、この命と並び、「五百（いほ）つ鉏々（すきすき）猶（なほ）所取（と）り取（と）らして天の下所造（つく）らしし大穴持命（おほなもちのみこと）」とあり、鉏持つ衆を率いて国土を造る、恐らくは、田畑の造成であり、すでに見たごとく、所造天下大神には稲神の性格が付与されており、大穴持命もその系統にあるのだろう、熊野加武呂乃命は祭祀者、所造天下大神、大穴持命は国土を整え、稲豊かな国とする王のごとき役割を想定していよう。　出雲国造神賀詞には、「伊射奈伎乃日真名子（いざなきのひまなご）加夫呂伎（かぶろぎ）熊野大神（くまののおほかみ）櫛御気野命（くしみけのみこと）」とある。「高天（たかま）の神王（かぶろ）高御魂（たかみむすび）神魂（かみむすび）」ともあるごとく、「かぶ」は頭であり、「ろ」は語調を整へ、且つこれを確言する意の接尾語的語素で、「かぶろぎ」は筆頭、祖となる男神、「くし」は奇、櫛で、人智ではかりがたいこと、「みけ」は御食であり、祖神となる霊妙なる食物の神となる。出雲臣果安が意宇郡の大領（おほみやつこ）でありながら、杵築の地に館を構え、杵築大社の祭主となったのは、「記」が編纂された頃という。「出雲国神賀詞」は、霊亀2（716）年に、果安が出雲国造として始めて元正天皇に奉っている。これには、「紀」の編纂にも参画し、国司として派遣されていた忌部連首（いみべのむらじおびと）が中央との調整に関与していたことであらう。その後継国造となり、風土記編纂に当った出雲臣広島が、国造の代替わりごとに「出雲国神賀詞」を奏上するという慣例を作ったとされる。出雲国造神賀詞には、記紀の成立を受けて、これと融合させる国造家特有の見解が組み込まれている。

|  |  |
| --- | --- |
| 和銅五年（712）和銅六年（713）霊亀2年（716）養老四年 (720)養老五年（721）天平五年（733） | 太朝臣安万侶、帝皇日継と先代旧辞とを統一併合して、上中下三巻の筆録を献上。古事記「風土記」撰進の官命出雲臣果安「出雲国神賀詞」奏上　国司；忌部連首（忌部首子人）舎人親王、日本紀を修め奉勅す。是に至り功成り奏上す。紀三十卷系圖一卷出雲臣広島、国造に就任す。出雲国風土記献上。勘造、秋鹿郡人　神宅臣金太理、国造、出雲臣広島 |

# 　出雲大社由緒略記によれば、大国主神の祭主を天穂日命（出雲国造の祖）とし、国造を引き継ぐには、火継神事により、天穂日命の霊（ひ）を受け継ぐとしている。「古伝によれば、出雲国造の元祖天穂日命が、天照大神の御命によって大国主大神の祭主となったとき、熊野大神櫛御気野命から燧臼（ひきりうす）と燧杵（ひきりぎね）を授けられ、以来これより鑽り出した神火にて潔斎をなし、常に清浄な身をもって大神に仕えることになりました。したがって、天穂日命の後継者・国造となるには、この神火を継承することが最も重大な儀式で、“火継”あるいは“神火神水相続”と称し、神代以来現今に至るまで、国造の代替わりごとに、古伝のまま厳粛にお仕えされています」とある。　ところが、火継神事は、風土記には記されていない。大国主神の祭主を天穂日命とするのは、「紀」の伝承を取り込んだ国造家の見解であり、風土記の各郡の編者は必ずしも、これに従ってはいない。　火（ひ）継神事とは国造家の日（ひ）継ぎ、霊（ひ）継ぎの神事である。三火の祭（火継神事・古伝新嘗祭、元旦の天火祭）をいう。「『出雲国風土記』におけるオホナムチ像、小村宏史、早稲田大学国文学会、[HP](http://ci.nii.ac.jp/naid/40015384746/)」によれば、「此三火をうけてこそ、大神一躰共、又ハ穂日命一躰共申すなれ、出雲に神なし、国造を以神とすといへり、神秘妙々（佐草自清筆『媒家伝之 神書』「万治三年」、『出雲国造火継ぎ神事の研究』平井直房より）」という。　「国造を以神とす」とは、国造になるとは、大国主神、また、天穂日神の霊を受け継ぐ神となることを意味する。その神性を獲得し維持するために、三火の祭が受け継がれてきた。熊野大神が燧臼燧杵を授けたとすることは、御食の神のみならず、それを調理する火をもたらす神でもあったことになろう。この神事は意宇の熊野大社で行われる。国造家は元来意宇の地で熊野大神を祭祀する族であったが、後に出雲の杵築で大国主神を祭祀する立場をも取り込み、熊野大神のみならず大国主神を祭祀する立場となり、記紀との整合性を保つために、その祖を天穂日命とした。「大神又は穂日命と一躰共」とする所以である。「杵築大社の宮司職を代々務める出雲国造は、単に司祭者である だけでなく、神の依りましとみなされていたことがわかる。国造就任以来、汚穢に触れず、死者の弔いも禁じられ、常に聖火で調理された斎食しか食べることができないというタブーが科されたのも、その神聖性を保持するための処置であったろう。火継神事は、意味的には霊（ひ）継ぎ神事といい換えられる性質のものであったといえる。（前掲HP）」とあり、「神賀詞を奏上する国造は、自らが祭る神と共にあり、その神の 言葉を自らの口で伝えているのである。それは、神を身に宿し、 神に口を貸している状態といえる。（前掲HP）」とする。　「伝来の宝物である燧臼燧杵によって神火を鑽りだし、新国造はその火で調理した食物を神と共食することにより、国造の職を継承する・・・共食による 神人合一・・・神との共食により霊威を受け継ぐ儀式という」とあり、火継神事は一生に一度の譲位による霊の継続である。古伝新嘗祭や元旦の天火祭は、神人共食し、祖の功業・恩沢を謝し、その霊を年毎に新たにして永続させてゆくためのものとなる。風土記には記されておらず、「記紀」に準ずるものと見なされるようだが、このような日継ぎや新嘗祭の思想が「記紀」に取り込まれたと考える方が時系列からすればしっくりする。 　古く意宇の熊野大社で行われていたコアの部分が、火起しと井水で調理された御食の神人共食であったのかもしれない。意宇の大領が、天穂日命を大国主神の祭主とする杵築大社をも祭祀する立場となったとき、双方を慮り、これらの神々をも結ぶことのできる神魂命（かむむすひのみこと）を冠する社（神魂「かもす」神社）を設け、その地を大庭（斎場）としたのではなかろうか。神魂を「かもす」と訓じる定説はないようである。御食と火と水の機能、天下造成と稲の豊穣による天下平定と国譲りの機能、それらを結びつける機能として、この神社に、神事に不可欠の酒を醸（かも）す機能を持たせたのではなかろうか。国造は、神魂命、伊射奈伎乃日真名子（熊野大神）、所造天下大神、大国主神、天穂日神の霊を受け継ぎ、皇孫を守護する霊となる、ということになろう。　風土記においては、すでにみたように、神魂命が、天日栖宮を模して、その御子達に所造天下大神の宮を造営せしめ、天津枳比佐可美高日子を降ろし、所造天下大神の宮の祀主とし、「記」においても、出雲国造の祖、岐比佐都美が出雲の石𥑎の曾宮に坐す葦原色男大神をもち拜（いつ）く祝（はふり）とした。また、所造天下大神の宮の造営は八束水臣津命によるとする伝承もあり、風土記編纂の総括を出雲国造の広島が行ってはいるものの、所造天下大神の宮の造営や祭主に関しては、「記紀」とは異なる伝承を風土記に組み込まざるを得ない現実があった。　（ノキノオホカミ）　意宇郡野城（のき）駅（うまや）条に、野城大神坐（ま）すとあり、この大神を祭神とする野城（のき）社（二社）、野代（のしろ）社（二社）があり、広く祭祀されていた大神とされる。しかし、後に、一社に合祀され、ご祭神が、天穗日命等々に置き換えられ、能義（のぎ）神社（延喜式神名帳調査、[HP](http://engishiki.org/izumo/bun/imo430135-01.html)）と称されるに至っている。　野城社、野代社が通じており、また、野城が能義（のぎ）と転じており、乃木（のぎ）でもあり、そういう地名を探ることで、野城大神が祭祀されたであろう地の広がりを推察するようである。「『浜乃木（はまのぎ）』という地名の周辺には、『上乃木（あげのぎ）』『乃木福富（のぎふくとみ）』などの乃木の付く地名があり、また一つの町が広域にわたる。『野城』のもう一つの読み『のしろ』に対応するべく『乃白（のしら）』という地名もある。『出雲国風土記』の河川記事では『野代川。源は郡家の西南一十八里なる須我山より出で、北へ流れて入海に入る』、『野代の海の中に蚊島あり。周り六十歩なり。中央は涅土にして、四方は並びに礒なり』とあり、野代川は忌部川、野代海は宍道湖に比定される。さらに寺社記事では、野城の社、野代の社が複数記され、現在もその双方が乃木の地域に残されている。一方、安来市にもまた能義（のぎ）という地名があり、かつては能義郡、能義村があった。『出雲国風土記』の『野城の駅。…野城大神の坐す。故れ、野城と云ふ（意宇郡）』は、駅の位置からもこの能義付近に比定されている。さらに、この駅の記事には野城大神の存在も示されている。大神と称されるのはこの神と天の下作らしし大神、熊野大神、佐太大神と四柱のみであり、その信仰圏の広さが窺える。このように、意宇郡の広域にわたりみられる野城（のぎ・のしろ）という地名について、関は、狭田国のような国のレベルで野城国があり、中央部に国庁、意宇郡家、黒田駅が設置されて野城国が分断され、東西に『のぎ・のしろ」の地名が残ったこと、また、本来『野城』は『ぬ（の）しろ』と呼ばれていたのが、後に『のぎ』と呼ばれるようになったとする。また、一定地域の有力神であった野城大神は、『出雲国風土記』編纂の段階で既に大神としての神威を失ったとした（関和彦、『出雲国風土記』註論（初版）、東京、明石書店，163-172，2006）。国引きには、『狭田国』や『闇見国』などの出雲国における小国名がみられる。こうした国としての単位で、かつて『野城国』という小国があったと考えるならば、浜乃木、上乃木が広域にわたる実感をもつ学生にとって納得できることだろう。かつてそうした広域に神威をもった野城大神は、現在も乃木地域の神として信仰される。（『出雲国風土記』を用いた 地域の神話・歴史教育 - 山村桃子 島根県立大学短期大学部総合文化学）」。　城は万葉仮名では「き/ぎ（乙類）」であり、代は「て/で」、「よ（乙類）」であり、共に「しろ」と訓じられるのは後のことである。城（き）は外敵の侵入を防ぐ木柵のごときもので、この大神は、「のき」であれば野に、「ぬき」であれば沼のような湿地に柵を設け、邑を防衛した神であったのかもしれない。ただ、野城大神も八束水臣津野命と同じく、これっきりで何の言及もない。古い時代の神であり、祭祀する族の勢力が早くに衰退し、天穗日命を祭祀する族の神を祭祀して、生き延びたことになろうか。　（サダノオホカミ）

島根郡加賀（かか）の神崎（かむさき）条に、母の神魂命の女（むすめ）枳佐加比売（きさかひめ）命が、「吾（あ）が御子、麻須羅神（ますらのかみ）の御子に坐（ま）さば、亡せし所の弓箭出で来（こ）」と誓約（うけひ）して産まれた子を佐太大神とする。金属、或いは黄金の弓箭が出てきたとあり、麻須羅神は弓箭の武神となろう。その弓箭で、暗い洞窟に射通すと、洞窟が「光加加明（かかや）きき」から加賀（かか）と称される所以となった。
　「き」には「奥つ城」の「き」棺（ひつぎ）の義があり、「さか」は分岐する処をあらわし、墓のような暗い洞窟に光を差し込ますことは、死と生の分岐を想起せしむ。枳佐加比売命に、冬から春に万物を再生せしむ地母神のような性格をみることができよう。
　また、この洞窟のほとりを行く時に、大声をださないと、つむじ風が起り、舟が転覆するとあり、航海の安全を左右する性格も付与されている。神崎あたりは航海上の難所であったのかもしれない。ところで、これは、国引きでいう「闇見（くらみ）の国」での出来事である。
　佐太大神の「さだ」は国引きでいう「狭田（さだ）の国」からきていよう。秋鹿郡神名備山条に、「所謂（いはゆる）佐太大神（さだのおほかみ）の社（やしろ）は、即ち彼（そ）の山下之（やまもとなり）」とある。同郡佐太河条、恵曇（ゑとも）坡（つつみ）、恵曇浜条からすれば、北の恵曇坡の底から陶器（すゑもの）・瓺（みか）・甎（しきかはら）等の類が多く有り、北の海に面する恵曇浜には桑麻が植えられており、この地域では、祭祀用具が製作されていたようである。北海では、アワビ、サザエ、ハマグリ、カキ等貝類やミル、ノリ等海藻が漁れ、南は佐太水海を通じて内海に通じ、ボラ、スズキ、クロダイ、エビ等が漁れ、供物にも事欠くことはなかったようた。
　佐太講武貝塚発掘調査報告書（全国遺跡報告総覧；[HP](http://sitereports.nabunken.go.jp/ja/2162)）によれば、「この貝塚が形成された当時、この周辺部が潟湖としてこうした貝の成育に適した環境にあったことが知られる。この潟湖は、後の『出雲国風土記』にいうところの「佐陀水海」、「恵曇披」の前身と考えられ、こうした湿地帯からヤマトシジミを主とする魚介類を採取し、周辺の山野に堅果類や鳥獣を求めていたものと思われる。弥生時代には、先述の北講武氏元遺跡で縄文晩期系の土器と弥生時代前期の土器がともに出土しており、この講武盆地を舞台に初期水田が開発されたことが知られる」とある。狭田とはその湿地における初期水田のことであろうか。この地は、北海と内海の間を往来するに適していた。元来湿地帯であり、「渡（わたり）の村の田水」が源で、南は佐太水海に流れ、後に、北は岩壁をくり抜いて恵曇浜（北海）に流した。佐太大神は神魂命の女（むすめ）が、その要衝を押さえるべく育成されたのであろうか。

　秋鹿郡には、すでに秋鹿日女（あいかひめ）命が居られた。郡家の真北に坐（ま）すとあり、真北一里の足日（たるひ）山に居られたとされる。これ以外は一切記されておらず、古い時代の神であろう。「あ」は感嘆詞、「いか」は「いかし」、内部のさかんな力が外にはげしくあらわれること（字訓）の「いか」とすれば、古代人が感嘆するほどの力を示された女神かもしれない。
　また、同郡女崇野（めたかの）という肥沃な野があり、樹林もなく耕作に適した地があり、山の上の樹林があり、それが「神の社（もり）」とある。ご祭神の名は記されていない。風土記の宇智社（内神社）が該当するとされ、「古来より一社別格で杵築・佐陀両社の支配を受けずとあり、松江藩の四祈願所（杵築、日御碕、佐陀、当社）の一つであった（内神社：延喜式神名帳調査；[HP](http://engishiki.org/izumo/bun/imo430306-01.html)）」とある。古写本では「女心高野」とあり、心高が崇の誤りとして「女崇野」とされたと注される。万葉仮名では心も崇も用いられない。「めたか」は「女高」であり、高い位の古い女神であったのだろう。
　佐太大神は、島根郡加賀神崎からこれらの女神の地に移ってこられ、恵曇の湿地帯の開発をされたとなろうか。佐太大神をご祭神とするのは佐太御子社であり、神名火山（朝日山）の東麓にあり、北麓には弥生時代の銅鐸･銅剣の埋納遺跡として名高い志谷奥遺跡がある。父が麻須羅神であり、武神の側面もあったろう。しかし、恵曇の地には、須佐能乎命の御子磐坂日子命が宮（恵杼毛社）を設け、多太（ただ）郷には、須佐能乎命の御子衝鉾等乎與留比古命が坐（多太社）され、大野（おほの)郷では、所造天下大神の御子和加布都努志能命が狩りをされたとあり、秋鹿日女や女崇野の祭神、そして佐太大神を祭祀する族が力を失ったようにみえる。
　佐太大神社と佐太御子社は、佐太大神とその御子という関係に思えるが、同じとするようで、曖昧さが残る。神社の由緒によれば、垂仁天皇54年に始めて伊弉冉尊を合祀したとあり、天平5年（733年）の風土記編纂時には「所謂佐太大神」と「所謂」が付され、すでに脇役の存在となっていたのかもしれない。中世には伊弉冉尊の陵墓である比婆山（ひばやま）の神陵を遷し祀った社と伝え、旧暦十月は母神である伊弉冉尊を偲んで八百万の神々が当社にお集まりになり、この祭りに関わる様々な神事が執り行われることから当社を「神在の社」（かみありのやしろ）とも云うともあり、佐太大神の存在は希薄なものとなっていった。
　江戸時代には「正殿は『伊弉諾尊・伊弉冉尊・事解男命・速玉男命・秘説、都て五座の神をまつる』、北殿は『天照大神・月弓尊、都て二座の神をまつる』、南殿は『素盞嗚尊・秘説四座の神をまつる』（雲陽誌）」となり、明治維新には、松江藩から「猿田彦神」と明示せよとの指示があり、佐太大神の姿を見い出すことがむつかしくなってしまった。
　このため、佐太大社と秋鹿日女命と伊弉冉命が混在し、伊弉冉尊の合祀を記した「佐田大社之記（天和四年「1684年」の佐太神社の神主「大伴氏末胤勝部氏朝山姓勝秀による」の資料）」には、佐太神社は、古くは秋鹿日女命を祭祀、秋鹿は足日、足日山は垂日山、伊弉冉命の葬られた山、秋鹿日女命は伊弉冉命という連鎖が込められている。「佐陀社内證記（天正6年「1578年」）」によれば、佐太神社は「信濃国諏訪大明神の勧請の社是なり」とあり、諏訪神の末裔とする勝部氏の見解もあり、「所謂佐太大神」という曖昧さがたたっている。

　佐太神社の祭祀の中核は、御座替神事と神在祭、上記の「神在の社」としての祭祀であり、そこで奉納される神楽や舞等も記紀の伝承に基づくものであり、基本的には、佐太大神を祭祀するものではない。
　御座替における神職の潔斎や関係者の配慮には厳しいものがある。「神社祭祀の伝承力-美保神社と佐太神社の祭祀から 関沢まゆみ、国立歴史民俗博物館研究報告、[HP](https://www.rekihaku.ac.jp/outline/publication/ronbun/ronbun6/pdf/148016.pdf)」によれば、神職は、古浦で海水を竹筒に汲み、海藻をとり、ホンダワラに包み、一部を恵曇の海辺の社に供えて拝礼し、佐太神社に帰ると、すべての建物の入り口にホンダワラを置き、潔斎の籠りに入る。食事を調理する、また、潔斎する湯を沸かす火は、祝（はふり、神職）が、自ら毎朝新たに鑽（き）り出さねばならず、朝の七時に始め十時に至ることもある作業となり、手の皮がぼろぼろにむける難事とある。清められた新たな火である。調理する人がその火を得るために、潔斎場にあがる途中に人に会うと、もう一度引き返してやり直さねばならず、土地の人々は会わないように避けるという。
　夜には神楽と能面劇からなる七座の神事が奉納され、清められた茣蓙（ござ）が本殿に運ばれ、本殿の神様の茣蓙替えが行われる。終わると、真神楽が舞われ、その後、祝（はふり）の火と宮司の火を合わせ、潔斎が終わる。翌日には佐陀神能が奉納される。天照大神の天岩戸の物語、素盞鳴尊の八岐大蛇退治、日本武命の熊襲退治などの演目であり、これは出雲各地に伝承され、平成の世においても、岩見神楽などとして出雲以外の地でもよく演じられる。

神在祭は、神迎えから神送り（からさで）までの神事であり、その間は、その神事の場を乱さぬよう、笛や太鼓等、歌舞音曲は停止され、「物忌み」をする期間でもある。出雲大社の神在祭は、「全国の村々里々にお鎮りの神々が、１年に１度、目には見えない『神事（かみごと）』を司られる『大国主大神』さまがお鎮りになります出雲大社にお集いになられ、人々の“しあわせ”の御縁を結ぶ会議『神議（かみはかり）』がなされる（出雲大社、神在祭のご案内）」とある。「国譲り」の伝承は、近年の「大政奉還」にも影響を与えており、勝者が敗者を徹底的に滅すのではなく、敗者やその神を祭祀するなど、遺恨を安んじる、あるいはその祟りを鎮める風習を生んできた。ましてや、皇孫を守護する立場の大国主神であり、この神を盛大に祭祀することは、出雲の誇りを維持するもののみならず、世の安寧に資するとする認識がヤマト政権側にもあったのだろう。佐太神社では、伊弉冉命を合祀することで、その独自性を見出したものと映る。
　この時期に漁される、背が黒く腹が黄金に輝く海蛇と称す魚が佐太神社のお使いとされ、まずはこれを迎えることに始まる。かつては、この前に九日の潔斎（上忌、散祭、あらいみ）があったが、短縮され、下忌（致祭、まいみ）のみが行われる。その間、神々が何をしておられるのか？あまり定かでないようである。
　神送り（からさで）に際して、神社での祭事を終えると、暗闇の中神目（かんのめ）山の祭場に移り、舟で神々を送る。そこには池が有り、その池が日本海に通じているとされ、杉の舟を浮かべ、神職が「カコ」と三度唱えると、鳥三羽が死に水夫（かこ）となり舟を導くとある。朝山宮司家では、この日に、ぜんざいと赤貝の入った「のっぺ汁」を供え、また食す。これは、一般家庭の正月の雑煮に相当するという。
　御座替神事と神在祭を行うには、さまざまな役割を分担してゆくことが求められ、佐太神社が中核となり、「江戸時代を通じて出雲國１０郡のうち佐陀触下（さだふれした）と呼ぶ秋鹿（あいか）・島根（しまね）・楯縫（たてぬい）・意宇（おう）西半の３郡半の神社を支配下に置（ご由緒）」き、祭祀されてきた。しかし、明治になって、神社内の社人や触下の組織が解体され、朝山宮司家を中心として、近隣の神主の協力や佐陀神能保存会の人たちによって維持されている。
　清められた火、厳しい潔斎をもって、神座を新たにし、神々を迎え、送り出し、霊が新たになる。これも火継、日継、霊継の系統の神事とみられ、記紀の思想によっているが、火鑽り、水、稲のみならず海蛇のごとき出雲の伝統が底に維持されているようにみえる。

**ある物語**
（その準備）
　出雲国風土記は、中央政府への出雲国に関する報告書であり、出雲国の記述に限定される。しかし、天の下を平定した大国主命にとって、出雲という概念は、地方の一国におさまるものであったとは思いがたい。
　石器時代には列島に三つの文化が並存したとする（日本の古代2、列島の地域文化；森浩一、中公文庫）。縄文文化であるが、東日本から北日本(東北、北海道)、西日本から西南日本（四国、九州）、南西諸島の差であり、土器にその違いが現れているという。
　東日本から北日本真正では、「落葉広葉樹の世界で、クリ・クルミ・トチ・ドングリなどの堅実類、ワラビ・ゼンマイ・フキなどの山菜類、シカ・イノシシなどの動物、そして暖流（黒潮）と寒流がぶつかりあう沖合では豊かな魚類に恵まれ、さらにサケ・マスも定期的に河をさかのぼってくるなど、もし、厳しい冬を無事に過ごすことができるならば、むしろ恵まれた地域だったのである。このような環境に適応してこの地域では早くから狩猟、採集、漁労の文化が発達した（前掲書）」とし、これを真正の縄文文化とする。
　西日本の常緑広葉樹にあっては、狩猟、採集、漁労の対象にあまり恵まれておらず、東日本における複雑で華麗な模様の土器に比べると、西日本の土器には縄文もなく単純な模様で、同一の文化の所産とするには、ためらいがあるという。西日本では、大陸との文化的交渉があり、温暖帯のイネなどの穀物栽培に適しており、稲作が定着すると人口の増加が起り、国の形成がなされる、いわゆる弥生文化へと発展した地域とする。
　南西諸島は黒潮の海であり、沿岸での漁労ばかりでなく、沖合でカツオドリが乱舞する海面下のカツオ・ブリ・マグロを狙って舟を出す漁では、漕ぎ手と突き手に分かれる離銛漁（はなれもりりょう）となり、共同作業が必要となる。沖合では、カジキ・イルカ・ウミガメ・クジラ・サメ漁ともなる。陸では、ヤマノイモ・カシュウイモ・テンナンショウなどの根茎の採取、焼畑による栽培により、イネの栽培はされなかった。土器は山形押型文という。黒潮における航海術が進むと、八丈島に達すことができ、西日本、東日本の土器が持ち込まれたようである。

　大国主命の天の下には、東日本から北日本、南西諸島は入らないのであろう。八束水臣津野命が国引きをしてきた範囲が前提であり、西日本といっても対馬海流による航行の範囲であり、南九州･四国から東北に至る黒潮、大分と淡路の双方から潮の満ち引きがあり、潮を熟知せねば航行ができない瀬戸内沿岸の航行の技術は出雲の海人には困難であったろう。

|  |  |
| --- | --- |
| 北九州、朝鮮半島、山を越えての中国地方、但馬、若狭、越、そこから近畿、信濃、常陸に至る地には達することができよう。後期旧石器時代（3万年前～1万年前）の隠岐の黒曜石石器の遺跡分布が中国、四国の瀬戸内海側、北近畿、信濃、越そして、ウラジオストックやナホトカに及び、佐賀県伊万里市腰岳の黒曜石石器が朝鮮半島南部の櫛目文土器時代の遺跡から出土しており、早くから往来があったことになろう。黒曜石はガラス質で肉の組織を壊さない鋭利さがあり、調理に欠かせない道具であり、鏃（やじり）、槍の穂先などにも用いられた。 | http://www.oki-geopark.jp/lifestyle/uploads/history/obsidian_02.jpg隠岐産黒曜石石器の遺跡分布（隠岐ユネスコ世界ジオパーク、[HP](http://www.oki-geopark.jp/lifestyle/history/000082.php)） |

　風土記編纂時の出雲国の出雲の名の由来は、八束水臣津野命によるとされる。八束水臣津野命の出雲とは、小さな初国とする地に国引きをした地を継ぎ足した全体を想定している。初国の規模も名も、国引きされて後の国が、それまで何と称されていたものか？残念ながら分からない。ヤマト政権が倭（奈良盆地）のみならず、日本を「やまと」と読ませ、平定した全土をヤマトとしたごとく、所造天下大神、大穴持命が天下を平定した時には、イヅモがその全土を意味したとしても不思議は無い。国譲りに際して、再び八束水臣津野命の出雲に戻ったのであろうが、国引きされた以外の地が初国であったかどうかは分からない。
　所造天下大神、大穴持命は、「青垣、山をめぐらせ、玉を置いて守る」と母理の地を想定し、出雲を守ると表明されたが、それは意宇郡の山間地（[出雲国風土記地図](http://www.pref.shimane.lg.jp/life/bunka/bunkazai/event/inishie/5kan.data/5-08.pdf)）である。大国主神が籠られた地は山を背にし、前は野と海の杵築であり、「青垣、山をめぐらせ」とは一致しない。何故このようなちぐはぐな記述が残されたのか？この句は、むしろ、「倭（やまと）は　国の真秀（まほ）ろば　たたなづく　青垣（あをかき）　山籠（やまごも）れる　倭し麗（うるは）し（倭建命、古事記）」を想起せしめ、大国主命の奇魂、幸魂である三輪の大物主神の地を連想させる。倭の地をお譲りしていることをお忘れなく、といわんばかりである。
　出雲郡は出雲国の西の一郡であるが、それが全体の総称となったのは、所造天下大神、大穴持命が「八雲立つ出雲の国は、我（あ）が静（しづ）まり坐す国」と八束水臣津野命の命名を踏襲したことによろう。かくて、出雲は再び、出雲国に限定されるに至ったのであるが、イヅモはそもそも広域的な交流を持つ国であり、各郡にはそれらの地から渡来した者も多く、出雲固有とするもののなかにもそういうものが組み込まれていよう。その神も渡来した可能性があろう。

　さて、イヅモ、出雲の空間的広がりは、ぼんやりながらもイメージできようが、時間的なイメージはタイムマシンなくしては成立しない。国引きを終えた時点の所造天下大神が大穴持命、大穴持命が国譲りも行うなど、時間を無視していることに途方にくれる。国引きのごときは、すでにみた地形動態からすれば、分離していた島根半島が陸につながる6千年～4千年前の縄文時代末頃の記憶とでもなろうが、鉏が登場しており、青銅ではない鉄鉏の輸入となれば弥生時代中期以降の記憶となる。大穴持命が天下を平定したとするなら、「山陰地方東部から北陸地方南部にかけての首長の間に強い結びつきがあり、政治的勢力の同盟関係があったのではないかと推測をさせる遺跡である（山陰の古代史、[HP](http://houki.yonago-kodaisi.com/F-K-kohun-4sumi.html)）」とする四隅突出型墳丘墓の時しかあるまい。これは、古墳時代以降はありえず、弥生時代後期までのことであるとしても、国引き以降の二・三世代ですむことではない。
　「いにしえの島根」の年表（[HP](http://www.pref.shimane.lg.jp/life/bunka/bunkazai/event/inishie/2kan.data/02.pdf)）によれば、中国で秦が天下を統一（BC221年）した頃に稲作が伝わり、稲作が人口増加をもたらし、より大きな集落が形成され、前漢（BC206年）の頃に金属器が伝わり、平成を遡ること、およそ二千年前の出雲では、集落における結束を固めるものとして、銅鐸や銅矛が祭祀のシンボルとなっていたとする。それは銅剣にとって代わられたものの、荒神谷遺跡に大量の銅剣と銅鐸が埋められた如く、それらは役割を終え、共同体の首長が四隅突出型墳丘墓による結束を求める時代が到来したとしている。鉄器が入ってくるのは後漢（AD25年）の後、魏志倭人伝によれば、後漢の桓帝・霊帝の治世（146 - 189年）の間、倭国は大いに乱れ、女王を立てて治ったとする。邪馬台国の卑弥呼である。では、大国主命が国譲りをした時はいつ頃なのか？それが明らかにはされない、というか、できかねるのが実情である。
　ここは謎である。「記紀」は皇孫に譲るとするも、皇孫が天降りし、その子孫が奈良を平定するまでには相当の時の経過があり、ヤマト政権が出雲を支配下におくのは、早くて、崇神天皇の神宝事件（日本書紀）の頃、あるいは、倭建命の熊襲征伐の頃（古事記）である。イヅモの所造天下大神、大穴持命が越を平定する時期を、卑弥呼の後とする伝承は皆無であり、もし、そうするならタカミムスヒ、スサノオなどすべての神々がその頃に活動していることになり、タイムマシンをもってしても如何ともし難い。越から帰り国を譲るは卑弥呼以前としなければならず、そうすれば、その時にはヤマト政権は存在しておらず、ヤマト政権への国譲りは成立しない。歴史的な時間軸では、矛盾を起こし、着地点が見い出せない。

　平成の日本人にとって、時計とカレンダーと西暦年表の存在は当たり前であり、時間は留まること無く過去から未来へと流れているものと意識されていよう。しかし、西暦年表など無い世では統治者の即位によって元号が変わり、御世が一旦終わり改まる。旧暦の世界では、十干十二支、６０年で干支が回帰する。干支が同じなら三代も過ぎれば、何時の干支か誤認が始り、話しが干支を飛び越えて伝承され、タイムスリップが起りやすい。
　時計が無い世界では、一日で日が改まり、暦がない世界では、月の満ち欠けで月が改まる。時は、太古から未来へ直線的に流れるよりは、節々に回帰しつつ改まり、祖から孫へと代々が改まる。それは、命が改新される、あるいは、生まれ変わる感覚ともなる。
　夜空を観れば、北極星を中心に星が回わり、実に確たる秩序が天にはあると感得する。地上で、昼夜で日数を数え、月の満ち欠けで月数を記録すれば、季節がずれて、八月に雪が降るなど、年月が季節感と一致しなく、農の時を定めることが不能となる。その失敗から、閏日や閏月を設ける知恵が生まれた。
　すでにみたように、殷では10日を一旬とし、旬の始めに占いをし、初旬、中旬、下旬で30日、一月とし、12月で36旬360日、占いのない日を5～6日設けて一年とした。365日と余りがでる。戦国時代には惑星の位置や運行が詳細に観測され、漢代には、木星が12年で天球を一周し、もとの位置に戻ることから、12年で三日の閏日を設ければ良いとなり、一年を365.25日とした。月の満ち欠けも29日と余りがあり、19年に閏月７月を設け235月（19ｘ12+7＝235）とすると、ほぼ元の季節と月相に戻ることが分かった。つまり1月を30ｘ228/235、29日と5/47とみた。晋の時代には、観測が進み１月を29と43/81日とみ、19年では（29と43/81x235＝6939と61/81日）で日の端数がでるため、19年を81倍し1539年で562120と日の端数がなくなるとし、更に、3倍の4617年で1686360日、60の整数倍となり、全く同じ状況に回帰するとした。
　時は律であり、振動による音程があり調和する音とそうでない音のある音律のごときもので、時に合えば叶うもの、合わねば叶わないものがあり、時は回帰するものでもあり、その時を予測しようとする。惑星の運行、天にあらわれる文を観て、過去の事象と照らし合わせ、未来を占う工夫もなされた。
　古代中国では、王朝にとって天体を観測し、時を管理し、伝達する（天子が郊外における季節の祭祀を行ない、暦を作成し諸侯に配布し、諸侯が月始めの祭祀を行う）ことが極めて重要とする意識があり、また、完全なる天の秩序、天の意志を地上に実現しようとする意識があった。
　我が国では、暦が中国から入ってくると、実用面での運用に工夫がなされたようであるが、徳川時代に至るまで自前で天体観測をして暦を編纂することはなかった。中国のように王朝の交代による観測や暦編纂の中断や再編という事態はなく、我が国では、四季がはっきりしており、太陽の昇る位置や星座や草木の状況を観察しておれば、農の時を知ることが比較的容易であったのかもしれない。その分、時に関する中国人のような考察はみられなかった。
　時の流れが一様ではなく、それぞれにより違うという感覚、時が元にもどるという感覚、時が改まり、新しくなるという感覚、息を吸っては吐き出すごとく、ただ震動しているという感覚、いかなる感覚が風土記の世の人にあったのか？平成の感覚を持ち込んでとまどっている筆者が空回りしているのか？そういう疑問を抱え、物語をしてみたい。

　**（ある物語）**
　以下は筆者の夢物語。
　出雲国風土記は出雲国（[出雲国風土記地図](http://www.pref.shimane.lg.jp/life/bunka/bunkazai/event/inishie/5kan.data/5-08.pdf)）に限った地誌の報告書であり、範囲が限られている。その枠を意識しつつも、それにとらわれずにすすめてゆきたい。

　昔も昔、大昔、人が動物と同じく、野山や洞窟に暮らし、石や骨や蔓や木や竹を道具にして、狩や漁をしていた頃のことを覚えているだろうか？禽獣の肉や魚や貝や海藻、昆虫や木の実や地中のイモやキノコや豆や草や茎や葉を採取し、堅い物は石で砕いて粉にして水でねり団子にしたが、何でも生のまま食べ、腹をこわしたものだ。火を用いることを覚えて以来、生活が一変した。焼いたものは、やわらかく、うまく、腹にやさしかった。切る道具や煮炊きする器を工夫したものがあれば、それを手に入れようと先を争ったものだ。
　木を切り倒す石斧に用いるような石は別だが、鋭利な道具として、もっともすぐれていたのが黒曜石だった。ガラス質で鋭く、禽獣や魚の肉を切り分けるには欠かせず、イヅモでは隠岐でとれるものを重宝した。隠岐とは舟での往来があった。あまりに素晴らしいので、ウラジオストックやナホトカにすら持ち込まれた。
　火は暖かく、煙が虫を追い払い、周囲を乾かし、明るくし、獣を遠ざけてくれた。燃やせば消し炭と灰が残る、イモを入れておけば焼きイモ、葉にくるんでおけば蒸し焼きになる。灰にまぶすと長持ちする。消し炭は火種になり、物に印を付けることもできる。傷口に塗りつけると膿みにくく、身体に塗りつけ水につかれば、身体がさっぱりとする。山火事で焼けた所から生える山菜は、より太く、柔らかとなり、栽培するようになると、灰をまけば土がよくなり、虫除けにもなり、実に使い勝手がよいものであった。
　粘土で作った器を太陽で乾かすだけでなく、火にかけると頑丈な器となることが分かった。土器である。縄文土器のことだが、ひっぱりだこであった。串刺しで炙るだけでなく、焼き煮炊きすることで、味がガラリと変わった。灰を入れて一緒に煮ると、根や茎や葉のアクがぬけ、トチの実やクリやドングリの渋がぬけた。また、海水を煮詰めると塩が残るように、水分をとばしたり、ものを溶かして取り出すことも覚えた。器は物を煮炊きするだけでなく、物を分けて貯めることができ、塩や辰砂や灰や漆などを入れておくと、腐ること無く保存ができ、果物を噛んで貯めておくと酒になるものもみつけた。
　漆には手足がかぶれたが、液を集めて熱を加え水分をとばすと、物をくっつけることができ、器に塗れば堅く腐りにくくなった。ススを混ぜると黒くなり、ベンガラや辰砂を砕いた粉末を入れと赤くなり、「えごま」を加えるとなめらかになった。また、漆は、「水や食べ物を腐りにくくさせたり、菌の働きを抑止する働きがあり、故に、乾燥させて薬として使用して排便を促すとか、乳児の沐浴に清潔を保つ用途で使われた（古代・北東北の朱と漆、（株）パルクワールド、[HP](http://www.bulkworld.co.jp/TOUHOKU.pdf)）」という。
　縄文というくらいで、縄の跡がついたもので、草の茎や蔓や樹皮を編んで縄や綱が作られていた。大麻（タイマ）、赤麻（アカマ）や苧麻（カラムシ）から糸を作り、布を編み（布の歴史と糸作り、石川県埋蔵文化財センター、[HP](http://www.ishikawa-maibun.or.jp/taiken/hataori/hataori_taiken0.html)）、毛皮も繋ぎ合わせて衣とした。石斧を造るにも木に挟んで固定するには丈夫な縄、綱が必要で、木を組み合わせ縛り組立て、茎や枝葉を束にして括り、壁や屋根にして固定し、雨風をさけるなどの工夫も進んだ。勇気ある者達が集団で穴小屋を作り、周りを柵で囲み、危険で雨にさらされる野にも暮らしはじめた。
　集落ができると、集落と集落の間に、人が通う道ができる。しかし、物を運ぶとなれば背負える量は限られ、物を陸上で運ぶより、舟や筏に乗せて水上を運ぶことに利があり、交易をする者は河川や池や湖、海岸に集落を築いた。
　氷河期には、九州と半島は陸伝いに往来ができていたが、氷河期が終わりに近づくと、海面が上昇し、黒潮が流れ込み、様相が一変した。それまで暮らしていた処が海水に覆われ、人も動物も難儀をした。しかし、冷たくよどんでいた海に暖流が流れ込んだことで劇的な変化が起った。対馬海流である。それが沿岸を暖め、雪が雨に変り、広葉樹を育成し、落葉が堆積し腐葉となり、そこにしみこむ雨水がその養分を川にもたらし、川の生き物を育み、海では魚が集まり、貝や海藻も太り、川や海の幸はがぜん豊かになった。網を用いたり、海に潜って採取する技も工夫し、列島の水人の存在は、その風習に疎い半島や大陸にも知られるようになる。
　また、寒流の循環にも勢いがつき、このふたつがぶつかりあうことで、両方の魚に恵まれた漁場も生まれた。また、海流に乗って航行することも覚え、沿岸の入江の集落相互間の往来も一層盛んになった。当時国境なるものはなく、お互いに危害を加える相手でないと分かれば、混血である方が丈夫な子が産まれると、婚を交わす知恵もついた。
　イヅモに、その礎を築いたのは、海の彼方からクニを引いてこられた八束水臣津野命であった。国を引く「クニ」とは土地のことで、土地を引いてくると人も物もついてくる。八束水臣津野命は、この大事業をなし、この地を「八雲」が湧き上がる「出雲」と名付けられ、杖をついて、「おゑ」といわれたまま、どこかに消えてしまわれた。まことに不思議な命（みこと）であられた。

　引いてきたクニを火神岳（ひのかみだけ、大山）に括り付けた三穂（みほ）の埼（さき）では、野城大神（のきのおほかみ）を推す衆が、飯梨（いひなし）河流域の湿地を開拓し、安来（やすき）にも勢力を伸ばしていた。獣の行き交う「の、野」に木の柵（き、城）を巡らした集落を築くに巧みな神であった。そういう区域を広げることで、やがては自ずと獣との棲み分けができるようになり、野に邑（ゆう「いふ」、集落）が形成されることとなった。
　その西の意宇（おう）川流域には、その水源である熊野山に坐す熊野大神（くまののおほかみ）を推す衆がいた。この神は、伊弉奈枳（いざなき）の麻奈子（まなこ、愛しい子）を称し、御食（みけ）の神として、朝酌（あさくみ）の地で朝夕の供物を調達しておられ、伊弉奈枳命を祭祀する神として崇敬されていた。「いざなき」と「いざみ」とは、「いざなふ、誘ふ」「き（男を著す語尾）」と「み（女を著す語尾）」のことであり、二人が夫婦となり、子を産み、親が死ぬと祖として祭り、子孫がそれを受け継ぐこと、火を用いて調理することの伝統を、その御子の熊野加武呂乃（くまのかむろの）命に教えられた。
　その地の先の飯梨（いひなし）で食事をされた大国魂（おほくにたま）命とは、国土を国土たらしめる魂の神、天の下の中心の地におられる神であり、本来は天の下をお造りになる大神と対をなす神である。伊弉奈枳命が、山代（やましろ）とされるこの地をイヅモの中心にしようと、この神を呼び寄せられたのであろう。
　安来の東南の屋代（やしろ）には、天乃夫比（あめのふひ）命が天津子（あまつこ）命を従え降りておられた。天で府（ふ、財物）を管理していた命が行政力のある命を連れて降りてこられたのは、天の財の管理や行政を地に授けようとするものであった。ところで、屋代の地は、野城大神の背後に当る。また、安来の南の楯縫（たてぬひ）では、布都怒志（ふつぬし）命が「天の石楯」を縫い直しておられた。武神であり、野城大神の地の東に当る地を「いつみても見飽きない山国」と称されており、天降りされた神々が土着の野城大神の地を挟む形勢となっていた。
　天降りというと、「記（古事記）」「紀（日本書紀）」により、高天原からの天降り、雲をかきわけ、橋をかけて嶺に降りる、あるいは、天空を翔る磐船（平成の人には岩<舟>が空を飛ぶなんて馬鹿げているでしょうが、金属<飛行機>が空を飛ぶのですから何らかの仕掛けがあったのでしょう）に乗って降りる、山頂や大岩や大木に降りるものとされがちである。神須佐乃袁命も、天が壁のようにそそり立っている所を巡りつつここに降りられたとあり、当然高い山であろうと、記は鳥髪山に降りられたとする。実は、神須佐乃袁命は海に面した安来に降りておられる。出雲は八雲の国であり、八つの雲で天地を往来する。しかし、天と海が一つになる水平線からお越しになれば、これも天降りである。神須佐乃袁（かむすさのを）命は海の彼方から天降りされた神で、安来に上陸されたときに、安心されたという。当時水平線の向こうに航海することは命がけで、余程安心されたのでしょう。須佐乃袁命はその御子、青幡佐久佐丁壮（あをはたさくさひこ）命を意宇川の上流の大草（おほくさ）の地に入れられ、植樹を始められた。杉や檜の種を我が国に持ち込んだ命とされている。意宇の地では、野城大神、熊野大神、須佐乃袁命を祭祀する衆が混在していた。

　クニを佐比売山（さひめやま、三瓶山）に括り付けた八穂尓支豆支（やほにきづき）の御埼（みさき）では、伊弉弥（いざみ）命の時に、古志（こし）の国人等が来て堤の工事をしたという。佐与布（さよふ）という人が、最邑（さいふ）という邑を築いており、余程の難工事を古志の国人等が成し遂げたのでしょう、その噂がいまもって伝わっている。古志とは越（こし）のことで、中国の南方で玉璧（ぎょくへき）や玉琮（ぎょくそう）を用いた長江下流域の良渚文化の末裔の越人（えつひと）が越（こし）の赤玉や翡翠を求めて渡来し、玉の製法を伝えたとされる地である。長江流域での土木工事の技術も伝わっていたのかもしれない。
　八束水臣津野（やつかみづおみづの）命がクニを引き本土と繋いだという噂は、天の下に流布し、天の下を造られたかの天下所造大神（あめのしたつくらししおほかみ）が海の彼方の筑紫からやってこられた。国引き最初の地に近い多伎（たき）の地に上陸され、御子の阿陀加夜努志多伎吉比売（あだかやぬしたききひめ）命にその地を任せ、自らは、八束水臣津野命を手伝った意美豆努（おみづぬ）命が綱とした「薗（その）の松山」、堤の難工事となった神門（かむど）水海（みづうみ）を巡り、流れ込む神門川を遡り、つぶさに現地をご覧になられた。
　天下所造大神は彼等の用いた綱を御覧になり驚嘆された。クニを引いた綱、それをつなぎ止める綱。なんという太さ、なんと頑丈なことか。蔓を幾重にも練り合わした綱を何本も練り合わしたものがずらりと並んでいた。綱（つな）は古くは「つの」といわれた。八束水臣津野命の津野（つの、「づの」と訓じているのは意美豆努と関連させてのこと）である。この神は「つな」の神でもあった。この地では、「つな」や「ひも」を作るに秀でており、「つな」で木と木を頑丈に固定し、高楼を組むことができ、葦や茅を束ねて屋根に縛り付けるなど、大きなものから小さなものまで、結び合わせるに見事な術があった。一本一本の茎が寄り合わされ縄になり、木の繊維が糸になり、物を結びつける。「いざなき」と「いざみ」は「き」と「み」が誘い合い、ひとつに絡み合うことで、万物をおつくりなられた。ことさようで、一人一人の力はしれているが、衆で綱を作り、それを引けば大きな力となる。それが整然となされていることに、ある可能性をみておられた。

クニ引きされた最初の地、支豆支（きづき、杵築）を本土につなぎ、突き固めることは、まだまだ未完の難事業であり、天下所造大神も一緒にやってきた人々を引き連れ、多くの人々に当時貴重であった鉏（すき）を持たせ、丘を削り湿地を埋め、排水の溝や水を抜く池をお作りになった。狩猟や採集に共同作業をすることはあっても、このように多くの人間が共同して作業をするなどということは、かつてなかった。
　天下所造大神は、ここでならば、この作業を水田作りに切り替えることができると確信をされたのでしょう。狩猟民や採集民に、秋になれば実るなどと、目にみえない収穫を約束しても、そっぽをむかれるのみである。もし実らねば、また、実っても奪われれば、最悪の年となる。大神は、実りをもたらす神の声と称して、和音を奏でるいくつかの鐘（銅鐸）を持参しておられた。それは、また、共に働く時を示す音でもあった。
　イヅモでは黒曜石の伝統があり、花仙山の碧玉をはじめメノウ、水晶、滑石を切り出し磨いてきた。美しい玉には美しい魂が宿っており、玉の触れ合う音に神の訪れを感じたという。土人形に神が息を吹き込み、人間に霊が備わったとする世界では、物（material）と心(soul)とは別物である。我が国では、近世に至っても「松のことは松に習え」と己が心を無にして物の心になりきる精神が命脈を保ってきた。縄文の昔から、森羅万象、石ですら生きており、成長し、そのものに命があると思っていた。石の中に神の「ひ（霊、魂）」をみて、祭ったものが石神であり、それはイズモの各地に数多くみられた。
　仁多の玉峯（たまみね）山には、玉上（たまのへ）の神がおられた。これは玉作りを行う集団の祭祀する神であり、玉石を出す山の神の恩沢を謝すものであろう。仁多の恋（したひ）山には、玉日女（たまひめ）命がおられ、川つたいに慕ってやって来た和尓（わに）を石で川を塞いで寄せ付けなかったという。これは、海の彼方から密かに掘削しようとする者達からその玉石を厳重に管理した伝承であろう。この玉の魂を祭祀する出雲の世界に、天下所造大神が銅鐸の音で、稲霊を祭祀するものとしたかのごとくにみえた。
　大神は、「天地初めて判（わか）れし後、天の御領田（みた）の長」となった御子の和加布都努志（わかふつぬし）命に、美談（みたみ）の地での稲作を任せ、ご自身は、天の御飯田（みいた）の御倉（みくら）を造るためのよき処を求めて土地を巡り歩いておられた。
　稲作は、かの湿地を水田として拓（ひら）き、集落を平野に築くという画期的な変革をもたらした。水を管理し、田を起し、苗を作り植えることを共同で行う。「むれ（群）」をなして行ない、獣のみならず不審者の侵入や侵害から「むら（村、邑）」を守る。穀物を蓄積し、交易を促し、分業を可能にし、さまざまな才や技を持つ者が役割を分担することで、集団の力が増大し、人口も増加した。クニの萌芽であった。
　また、稲藁は絶好の材料となり、縄のみならず敷物や履物や雨具などに多用され住環境を改善した。

　それをどこでどうご覧になっていたものか、あの八束水臣津野命が諸々の神々を引き連れて、天下所造大神の宮に奉るために、その宮を寸付（きづき、杵築）に築こうとされた。「みや」は「み（霊的なもの）」の「や（屋）」であり、恩沢をもたらした祖霊の屋であり、集団の心を一つにする象徴である。中国では氏族の祖霊のもとに宗族を形成するようだが、我が国では、宗族に限らず、どちらかといえば、その地で率い共同生活をする人々を巻き込む地縁の祖として祭られた。
　祭祀の祭は月（肉）と又（手）と示からなり、示は〒（台）と両方から：（肉の血の落ちるさま）からなる。つまり、犠牲獣を殺して血のしたたる（清められた）肉を台にお供えして、その恵みに感謝し、神や祖霊に召し上がっていただき、お下がりを宗族で食し、そのことが続くことを祈願した。血がしたたるさまは中国のこと、我が国では馴染まない。縄文時代であれば、アイヌの熊祭のごとく、我が国でも似たようなことがあったろうが、稲作が普及すると、新嘗祭のように米が主役となる。祀は示と巳で、巳は蛇で諸説があるが、そもそもは云（雲）、あるいは龍形のものというから雨乞いの祈願であったろう。
　稲作ではなく、漁撈や海上交易に携わる民は、水神や海神が念頭にあり、供物とするものも異なり、豊漁を祈願することには変わりないが、海が荒れ難破しないことを祈願しよう。また、国ができると、国の興隆、安寧、存続を祈願し、その祭祀を民に示し、一体化をはかるシンボルや形式が考案される。そして、その職能や技能が分化してゆき、国にもたらす功徳に応じて、それぞれの祭祀を行うようになる。
　それにしても、八束水臣津野命は、神々を引き連れ号令される神望(人望)がありながら、クニ引きの大功を誇るでなく、天下所造大神を崇敬される。ご自身が崇敬され、祭祀され、その立派な宮を造営されてしかるべき命（みこと）であろうに、その消息すら分からないまこともって不思議な命であられた。稲作を広められ、集団力を高められた天下所造大神の功を高く評価されて、この挙に及ばれたのであろうか。西の方面では、天下所造大神の名声が高まった。

　「天の日栖（ひすみ）」の宮で、それを御覧になっていた神魂命も、その宮に寸法を合わせて所造天下大神の宮を造らせるために、御子の天御鳥（あめのみとり）命を楯縫（楯縫郡）に降ろし、御装（みよそひ）の楯を造らされた。その寸法を測るに用いた長い綱、それは楮の繊維で作ったものであるが、木組みをその長い綱でぐるぐる巻きにして固め、途中で切ることなく飾りとなるよう編み込んで垂らすようにとされた。生馬（いくま）には、御子の八尋鉾長依日子（やひろほこながよりひこ）命を降ろされ、鉾、これも御装の鉾であろう、その製作をお命じになり、漆沼（しつち）の神名火山の嶺の曽支能夜（そしのや）には、御子の天津枳比佐可美高日子（あまつきひさかみたかひこ）命を降ろし、その宮の祭主にしようと思われた。
　所造天下大神との絆を結ぶに縁組みがよろしかろうと、宇加（うか）に降ろされていた女（むすめ）の綾門日女（あやとひめ）命をお薦めになられた。あでやかで魅惑にみちた日女（ひめ）であられたが、大神がお声をかけられると、どうしたことか、逃げて北の海の窟戸にお隠れになられた。窟（いはや）の中に穴があり、その深さを知る者はなかった。夢にこの窟の近くに至ると必ず命をおとし、黄泉の坂、黄泉の穴と恐れられた窟であった。後に、岩戸にお隠れになった天照大神のようであるとも、縄文人の墓場であったため、黄泉の伊弉冉尊のようとも噂された。
　神門（かむど）の朝山にもう一人、美しい玉のような女（むすめ）、真玉着玉之邑日女（またまつくたまのむらひめ）命が居られた。神門は、大神の御屋の地であり、相性が合ったようで一緒になられ、大神が毎朝お通いになられた。朝に通うとは妙な言い回しであるが、朝帰りされたということであろう。
　神門には、驚いたことに、大神の御稲（みいね）の稲山、稲を積む稲積山があった。陸稲かとも思われるが、そればかりではあるまい。暖かく低い湿地で育つ稲をどのようにして改良されたものか、涼しい山間部で育つ稲種を手にしておられた。この稲種を、より寒い北の地域の人々がこぞって手に入れようとすることになる。また、大神は自分の宮が造られるということで、吉栗山の木々を宮材とし、御装の御桙（みほこ）を桙山、かぶる御冠（みかがぶり）を冠山、飾る御陰（みかげ）を陰山で調達された。大神はこうして、神門をでて寸付（きづき）にお移りになられた。出雲にあって一番広大、且つ、いささかも危険である湿地を治めるにふさわしい神と期待されてのことであった。

　北門の良波のクニから引いてきた地を闇見（くらみ）のクニと云った。この地を島根と命名されたのも、あの八束水臣津野命であり、八雲立つ出雲の根となる島と思われたのであろう。闇見や根というと、どうしても、暗いイメージがつきまとう。
　加賀（かか）の神崎（かむさき）には、神魂命の女（むすめ）の枳佐加比売（きさかひめ）命が居られた。この比売は麻須羅（ますら）神を夫とし、神崎の洞窟で“うけひ”をして御子を産まれた。この子が麻須羅神の子であるなら、亡くなった弓矢が出てくるはずであると。金の弓矢が流れ着き、「何と暗い窟か」と矢を射られると、洞窟に穴が空き陽光が差し込んできた、まるで天の岩戸が開かれ、天照大神がお出ましになられるがごとき陽光であった。その子を佐太大神（さだのおほかみ）という。
　神魂命は女（むすめ）が産まれると、なんと喜ばしい（うむがし）と、宇武賀比売（うむがひめ）命と名付け、法吉鳥（ほほきとり、ウグイス）に化して、法吉に飛来せしめられた。人々の心には、そのお声が、春の再生の息吹のごとく響き、法吉の堤には、夏になると、美（うま）い菜が生えた。
　二人の比売の母は天神ではなく、良波のクニからの族の女（むすめ）であったろう。神魂命が、人々の心に光や喜びをもたらすべく、金の弓矢を作る技術や音曲に長けた族と婚を結ばれ、夜にはかがり火を赤々と焚き、賑やかな燕会（うたげ）に人々が沸き立ったことであろう。
　ところで、北門（きたと）への渡（わたり）となる千酌（ちくみ）の津には、伊差奈枳命が早々と御子の都久豆美（つくつみ）命を降ろしておられた。須佐能袁命は、千酌を牽制するかのごとく、方結（かたえ）に御子の国忍別（くにおしわけ）命を送り込んでおられた。また、熊野大神命が供物を調達される朝酌の渡（わたり）は、市人（いちびと）が四方から集まり自然に市が立つ賑やかな処であり、背後の山口には、御子の都留支日子（つるきひこ）命を送り込んでおられ、それぞれが着実に地盤を築いておられた。

　北門の佐伎（さき）のクニから引いてきた地を狭田（さだ）のクニと云った。実のところ、闇見（くらみ）のクニとの境のつなぎ合わせが難しく、北には恵曇坡（ゑとものつつみ）、南には佐太水海（みづうみ）が残り、後に、丘の岩場をくり抜くことで北の海と南の内海とが川でつながる地となる。それだけに北の海と内海とを舟で運搬するに適しており、神名火山（朝日山）の麓を押さえることが肝要な地形であった。恵曇には航海に長けた海人がいた。
　佐太大神は成長すると、神崎を出て、神名火山に向かわれた。神魂命がそれを望んでおられたのであろう。ところがそこには、もとから秋鹿日女（あいかひめ）命がおられた。万葉仮名で秋を「よ」とよむことが一例あるのみで、「あい」に秋の字をあてるなどもここ以外にはあるまい。「あいか」を秋の鹿に喩えた、秋の鹿の鳴く声は、遠く離れた人を慕う心、望郷の嘆息である。その西に、土が肥沃で林もない耕作に適した女崇野（めたかの、女心高野ともされる）があり、山の嶺のみに林があった。その林は社として祭祀されており、いかなる神かは分からないが、肥沃な土と実りはその神の賜（たまもの）と崇敬を集めており、地母神かと思われる。
　秋鹿日女命は佐伎の国の日女、女崇野の神も佐伎の国の神ではなかろうか。八束水臣津野命が国を引いてこられた時からの神であり、庇護されたが、いかんせん、八束水臣津野命の消息がわからなくなり、心細いこととなられた。しかし、その恩沢が大きかったとみえ、そのまま崇敬を受けてこられた。
　そこに、金属技術を持つ渡来者とともに佐太大神が神名火山にお入りになった。そのことは、生馬（いくま）におられる須佐能袁命の御子、八尋鉾長依日子（やひろほこながよりひこ）命の耳にはいり、その知らせを受けると、須佐能袁命は、北の恵曇（ゑとも）に御子の磐坂日子（いはさかひこ）命を遣わされた。佐太水海の東の生馬の八尋鉾長依日子命と二人で、佐太大神の南北を塞いでしまわれた。また、西方の中央の多太（ただ）にも、御子の衝鉾等乎與留比古（つきほことをよるひこ）命を遣わして、民生の安定を計られた。
　佐太大神は、閉じ込められた格好になり、秋鹿日女命と手を携えられたが、劣勢はいかんともしがたく、伊弉弥（いざみ）命を頼みとされた。しかし、うまくゆかなかったのだろう。その崇敬者が秋鹿日女命や伊弉冉尊をも祭祀し、後々、秋鹿日女命とは伊弉冉尊のことであるとか、佐太大神は猿田彦神であるなどというような噂が流れ、大神の存在感は揺らぐこととなった。
　しかし、多久川や佐太河流域がよく開発され、余力がでたのであろう、銅鐸や銅剣を海の彼方から取り寄せ、製作を試みておられた。武器というよりは、祭祀の用具、御装、あるいは舞踊の用具として大神の宮に備え、衆の心を結び、その結束力を示すシンボルとなった。恵曇の海人がその交易に携わった。

　神魂命が、百八十の神々を集めて酒を醸（かも）せしめ、百八十日嘉燕（さかみづき）をされた地があり、そこを佐香（さか）という。嘉燕は嘉宴であり、180の神々が180日、約半年間、酒宴を続ける？酔っ払いどころではない、人間なら生きてはおれまい。酒を醸すこと、酒造りに励むこと半年なら分かるが、一体どう理解すべきなのか？
　酒は地を清め、その香で神を降ろし、神と人とを一体となすもの、共食に欠くべからざるものである。また、漢の時には、「酒は百薬の長、嘉會の好」とされ、後に、佐香神社では、久斯之（くすし）神を祭ることともなり、薬神ともされ、醸すことから味噌や醤油や酢をつくることにもかかわることになるようである。

この佐香は楯縫（郡）にあり、楯縫では、天御鳥（あめのみとり）命が天下所造大神の宮づくりを準備しておられた。杵築の宮（出雲大社）は、後世の「記紀」によれば、大国主神が国譲りに際して造営されたという。すでにみたように、八束水臣津野命が国引きを終えて後に、天下所造大神の宮に奉（つかへまつ）ろうとして、諸々の皇神（すめがみ）が、宮所に参集して、杵築（きづ）いたものである。
　宮所に参集となれば、既に天下所造大神の宮があるように読めるが、国引き直後に、既に宮がそこにあろうはずはない。宮に奉（つかへまつ）るためには宮が必要であるから、築くとなろうか。杵築は杵（きね）を築（つ）くことであるが、土地を固めることではあるまい。杵築（きづ）くと読ませており、このときに宮を築いたものである。
　また、神魂命が、天下所造大神のための宮を、自分の宮と同等に造営することを天御鳥命に命じておられた。その宮造りは、国引きした地にすでに稲作が行われ、天下所造大神が「天（あめ）の御飯田（みひた）の御倉（みくら）」を造ろうと、楯縫の玖潭（くたみ）などを巡り歩いておられる頃のことであろう。
　杵築の宮の祭主は、「記紀」では、天穂日命（あめのほのひのみこと、天菩比神）とするが、神魂命は、その御子、天津枳比佐可美高日子命（あまつきひさかみたかひこ、伎比佐加美高日子命）を神名火山に降ろし、その宮の祭主にされ、その子孫が祭主を継いでおられた。出雲国造家の時には祭主が天穂日命とされ、天津枳比佐可美高日子命は薦枕志都沼値（こもまくらしつちち）と称され、漆沼（しつち）の地霊神とされてしまわれた。
　また、出雲の伊努（いぬ）には、意美豆努命の御子、赤衾伊努意保須美比古佐倭気能（あかふすまいぬおほすみひこさわけの）命が居られた。赤衾に包（くる）まれ「いぬ（寝）」ということは、非常に大事に育てられた御子であり、その后（きさき）を、天甕津日女（あめのみかつひめ）命と云い、祭器の甕（みか）を司る天（あめ）の日女（ひめ）であり、后と呼ばれる天の日女を娶っておられ、杵築の宮の祭主としてふさわしい御子であられよう。もし、意美豆努命が、八束水臣津野命の別名であるなら、杵築の宮造営を提唱された八束水臣津野命の御子として、祭主にふさわしい。しかし、八束水臣津野命の消息そのものがわからなくなっており、実現できなかったようだ。

　須佐能袁命というと、「記紀」により、乱暴者で台風のごとく荒ぶる神で、大蛇を退治し、櫛名田比売を娶り、出雲の祖となられたと思う人が多い。“すさぶ”は荒（すさ）ぶでもあるが遊（すさ）ぶことでもある。佐世（させ）の地の由来は、須佐能袁命が、「佐世の木の葉を頭刺（かざ）して、踊躍（をど）らしし時に、所刺（さ）せる佐世の木の葉、地（つち）に墜（お）ちき」から来ている。踊っておられるが、挿木をしておられるようであり、広葉樹林の我が国に杉や檜などを植樹された神でもあった。遊ぶところがあり、荒ぶような伝承はない。近くの高麻山では、御子の青幡佐草壮命に麻の種を蒔かせておられた。
　「記」では、須佐之男命は須賀（すが）で櫛名田比売と子をなし、その七世の子孫を大国主神とし、「紀」は、それでは時系列が成立しないとみて、清（すが）で奇稻田姫との間に大己貴神を産んだとする。久志伊奈太美等與麻奴良比売命（くしいなたみとよまぬらひめ）が熊谷で子を産まれたとは聞いているが、誰の子であるかは明かされていない。須佐能袁命には、安来に来られた時から御子がおられ、各地に遣わしておられたことはすでにみた。また、すでに神門にもお入りになられ、八野（やの）には女（むすめ）、八野若日女（やののわかひめ）命、滑狭（なめさ）には和加須世理比売（わかすせりひめ）命がおられ、仮に、久志伊奈太美等與麻奴良比売命を妊ませておられたとしても、これらの御子の母ではありえない。
　大穴持命は、神門の八野では、八野若日女命を娶るための屋を造っておられ、滑狭では、和加須世理比売命を娶り、繁く通っておられ、須佐能袁命とは、娘婿として良好な関係を築いておられた。御子の阿遅須枳高日子（あぢすきたかひこ）命を神門の高岸（たかきし）で育てておられ、大穴持命は、元来、神門に拠を置いておられたのだろう。ただ、後にみるが、阿遅須枳高日子命の母は須佐能袁命の女（むすめ）ではない。
　須佐能袁命は飯石の須佐（すさ）に、大須佐田（おほすさだ）・小須佐田を定め、御霊を鎮められたという。須佐能袁命がここで亡くなられたとされる。もし、大穴持命が須佐能袁命の嫡子であるなら、その地に父の宮を造営し相応しい祭主を置かれてよさそうなものである。しかし、その気配はない。義父である須佐能袁命に、その勢力の後を託されてはいよう。また、天下所造大神を継ぐ者として、出雲の地で力を蓄え、須久奈比古（すくなひこ）命を得て、民の支持を得ることに成功し、意宇中心であったこの地を「八雲立つ出雲」として平定された。
　須久奈比古命は、“すくふ、救”と“な、菜・魚・地”が“すくな”と短縮されたものと思っている。佐香で神魂命の酒を醸すことを司っておられ、久斯之（くすし）とも頼りにされておられた。「くすし」は、毒と薬になるものを見分けてきた。それは、己の身体を窮地に追い込みつつ吟味をしてきた先人の蓄積の賜である。常人には耐えがたい苦痛や犠牲を経て培われてきたものがあるからこそ、人や禽獣の病を癒す術（わざ）や、鳥獣や昆虫の災いを払う術を身に付けることができた。それだけに、人々が頼りとすると同時に、畏敬する存在でもあった。

　杵築、伊努、美談、漆治といった湿地帯では洪水や高潮や津波の危険性があった。大原の赤川（当時は川筋が定まらず川名は定まらなかった）は逆流をすることがあり、昔、宇能治比古（うのぢひこ）命が御祖の須義祢（すがね）命を恨んで、出雲の海潮を押し上げ、出雲大川から赤川の上流（海潮川）にまで御祖を漂わせるという事件があった。その地では、塩を得ることができたので、得塩（うしお、海潮）と名付けられた。“うのぢ”とは鵜の霊のこと、鵜は水、水戸の神、海からの神饌を供するもの、義は“ぎ、げ”と訓じられ、須義は“すげ”であり、湿地に群生し、水中の生物や鳥の棲処（すみか）となり、屋根や壁や敷物となる菅のこと、“ね”は、“な「地」の転音）”であろう。海潮に押し上げられた菅の辿り着いた地であるが、「記紀」が須賀（すが）、清（すが）の地としたことで、須佐之男命が宮を造られた地として記憶されることになってしまった。また、赤川上流の須我小川の船岡山とは、阿波枳閇委奈佐比古（あはきへわなさひこ）命がそこまで引き上げてきた山のような船であった。なにせ、八束水臣津野命がクニを河船のごとくゆっくりと引いてきた伝統がある。船を引いて山を越える所を船通山という。
　赤川流域は、湿地帯であり早くから開け、豊かな邑が形成されていた。出雲と神門に通じる地であり、かつ、木垣坂から玉作川を下ると内海に通じ、意宇の中心地へのルートとなる。須佐能袁命が大原の御室山に宿り、青幡佐草壮命が佐世や高麻山に入られたのも、おそらくは、このルートであろう。安来から、島根や秋鹿に目配りをしつつ、佐世、御室山に入られた。「記紀」は鳥髪山に降られ、斐伊川を下り、須賀に入られたとするけれども・・・
　大穴持命は、この出雲大川から赤川を遡り、大原に入り、出雲大川と赤川の合流地点の南の神原を治められた。この地の衆は、大穴持命が、天下所造大神を継ぐ実力者であり、評判の高い須久奈比古と共にあり、高麻山や佐世、御室山に影響力を有した須佐能袁命を義父としていることをみて、八十神が狙うこの地を託すに足ると、招いたのかもしれない。
　神原の南には樋速日子（ひはやひこ）命がおられ、樋の地と称され、この地は意宇、飯石、仁多に通じる要衝であった。それ故に、須佐能袁命もこの地の東の佐世にお入りになり、御室山に室を置かれ宿られた。後にヤマトがこの樋（ひ）の地を斐伊（ひ）とした。斐然とは才徳にすぐれていること。伊は、尹（神意を媒介する者）とｲ（それを輔佐する者）とからなり、傑出したものに付す名である。「紀」は強引にも、素戔嗚尊が下った川を斐伊川とするのみならず、出雲大川までを斐伊川とした。ために、後世に上流の横田川、室原川の川名に大いなる混乱が生じた。それほどに、この斐伊を用いることにこだわった。
　この地をめぐっては、争いがしばしば起った。神原ではそれを治めるためにも、大穴持命を頼みとしたのであろう。大穴持命は赤川の流域を押さえることに着手された。赤川の北の地に向かって盛り土をして清め、矢の的を置かれた。射によって土地を清められ、その地を矢代（やしろ、屋代）とされ、そこから矢を放たれその矢の落ちた内側を矢内（やうち、矢裏）とされた。そして、八十神をこれらの地から追い払い、「青垣山の裏（うち）に置かじ」と決意された。樋の北、出雲大川を見下ろす城名樋山に「き、柵（城）」を築き退路を断ち、そこに八十神を追い詰めて伐たれた。迨次（きす）き（追い付く）、ことでその地を来次（きすき）とされた。
　八十神を伐ち、この要衝を平定されたことで、大穴持（おほなむち）命は大国主（おほくにぬし）命と称された。

　天下所造大神はすでに出雲を後にしておられた。それは、大穴持命がかつての奴国の地、筑紫から帰ってこられて後のことであった。天下所造大神が大穴持命をその地に遣わされたのは、半島、その先の大陸について目を開くこと、また、国の成り立ちついて学ばせることにあった。
　國とは口と或からなり、或は戈と□からなる。戈（ほこ）は武器であり、□は囲われていることで、或は壁で囲われ武装されている地である。中国では、城壁で囲われた都市の形であり、更に外囲のあるものを國、国都とした。
　「國の大事は祀と戎にあり」という。祀とは祭祀であり、戎とは軍事である。祭祀とは、邑の人々を一つにするものであり、その地の人々の出自となる祖神、祖先を祭る。豊かな実りや豊漁を約束する神を祭り、収穫した初物を感謝して供物とする。大事を決すには、祖神の意向を伺い、その「告（の）り」が「のり（規範）」となる。祭祀におけるしきたりが、身分や役割の序列を明かにし、社会に秩序を与える。
　都市の成立は分業を促すものとなり、都市を運営する仕組みとそれに専念する役職が定められ、公と私の区別が始る。供物であったものは、それらの人々を支えるための税として徴収される。軍事とは、国を守ることであるが、軍役は税の一形態であり、血税とされた。道や河川や公共物の整備に労力を提供することも一種の税となる。
　国となると、一氏族のみならず、幾つもの氏族が寄り合うものであり、勝者の祖神、祖先を祭るのみでは事足りなくなる。大穴持命が大国主命となったときに、頭を悩ませる問題となる。
　自分の平定した地を何と総称すべきか？自らは天下所造大神の後継者であるが、この国土の基礎をお造りになられたのは、国引きを為された八束水臣津野命であった。「八雲立つ出雲」と称された出雲国こそ、全体を総称するに相応しい、という思いがあった。
　八束水臣津野命を祭祀する邑が無く、この名を用いることに差し障りはなかった。しかし、伊弉奈枳（いざなき）の麻奈子（まなこ）、熊野加武呂乃命、あるいは、神魂命、須佐能袁命などさまざまな祖神を祭祀する邑がある。それはそれとしての祭祀を存続させ、国として人々の心を結束させるものとは何か？
　玉造り、玉の魂を祭祀する伝統がある。稲作が中心となれば、日神、水神、雨神に祈願することになる。豊かさを示すことが、力を示すこととなり、宮を造り、祖神や祖先の祭壇ばかりか、王座を設け、玉の他に銅鐸や銅矛、銅剣をもって御装（みはか）り、冠や御陰を付け、その威を示すこととなる。
　始皇帝というは、驚くべき事に、巨大な墳墓を造り、天井に天空を造り、宝石を星として星座を設け、水銀を大河のごとく敷き詰め、数知れぬ兵馬を従え、そこに永遠（とわ）の王国を築いている。王とは天子であり、天帝の子、あるいは天帝の意を受ける者ともいう。ところで、天の意とは、民の意であり、民の意とは安寧であり、民に安寧をもたらす者に天の意が託されるとする。王朝は興亡するがそれを越えるものが天、その主が天帝である。

　奴国の使者が後漢の光武帝に謁見して、漢委奴国王に任ぜられたことは、半島の国々にとっては衝撃的な出来事であった。委（倭）というのは漢からすれば、東夷の濊（わい）・貊（はく）・倭（わ）・韓（かん）の倭、かつては、半島の中にあるものと思われていた。漢の武帝が、衛氏朝鮮を平定し、楽浪郡に進出して後に、半島の果ての海の彼方に倭人が居ると分かり、後漢になって、そこは100余国からなり、通訳を通じて通じる国が30カ国あることが分かった。その内の最強とおぼしき奴国に国王の印璽を与えてしかるべきと判断したことになる。

100余国のひとつの奴国、半島もさような数の国々があり、船を操る者達は、利が合えば往来した。洛東江流域の南部では、穀類や桑の栽培と養蚕を行ない、鉄を産し、交易の決済に鉄を用いた。銭社会の漢人商人は鉄で決済をした。鉄を求めたのは、鉄製品を作るのみならず、楽浪郡や帯方郡で漢人商人との交易に携わるに不可欠として、倭人も鉄を求めて半島に渡っていた。
　倭人は彼等と組んで、帯方、楽浪へと進出し、奴国は洛陽にまでその存在を知らしめた。漢は半島に進出し郡県制を敷いたものの、その維持が難しく、後漢では、それぞれの国の長や王を認め蕃国として統治する方針に転じていた。奴国もその一つに加えられたのであるが、半島の国々のなかには、背後から圧力をかけられかねない、由々しき存在と映った。
　大穴持命は、そういう事には上の空で、天下所造大神は出雲を後にされた。大穴持命が注目されたのは、その地の海人の行動であった。航海術、漁撈法、その信仰、予想を超えていた。海人は海がありきであり、海の中に島を産みだした神を祭祀していた。潮の流れ、潮の干満、日々の風向、季節の風、北極星と星座の位置、木材の切り出し、加工、組立て、腐食防止、そういう事に夢中になっておられた。伯耆、但馬、若狭、越へと交易の足場を固めるには、彼等の智恵と技術を取り込む必要があった。海人との好（よしみ）を結ぶに、婚を結ぶに如くはなしとばかりに、海人の女（むすめ）を娶られた。
　生まれた御子を阿遅須枳高日子（あぢすきたかひこ）命という。「記」は、その母を、「胸形（むなかた）の奥津宮（おきつみや）に坐す神、多紀理毘売命（たきりびめのみこと）」とする。多紀理毘売命は、天照大神が須佐之男命の十拳劔（とつかつるぎ）からお生みになられた三姫神の一姫神であり、須佐之男命が出雲に降りられる前のことである。ところで「記」は、大穴持命を須佐之男命の七世の孫とする。これでは世代的に合致しようもない。神のこととて寿命を無視するとしても、奥津宮という神聖なる宮の姫神が出雲の命と交わり、御子をもうければ、とんでもない不祥事、許されることではあるまい。万歩譲って、天照大神がそれをお認めになったのであれば、その時点で、大穴持命は天照大神の娘婿、天孫族の親戚筋となる。「国譲り」など意味をなさなくなる。

　阿遅須枳高日子命は、高屋を登り下りして、昼夜泣き続けていた。髪（ひげ）が長々と生える年齢になっても、それは続き、大穴持命は船に乗せて島々を巡り、気をまぎらわせようとしたが泣き止まなかった。おそらくは、母を慕ってのことであろう。その母は、すでに、筑紫で亡くなっておられたのかもしれない。それは、「記」においては、黄泉の住人となり会うことができなくなった母、伊邪那美命を慕い、「八拳須（やつかひげ）心（むね）の前（さき）に至るまで、啼（な）きいさちき」須佐之男命の姿とされた。須佐之男命が暴風の如く荒（あ）れ荒（すさ）ばれたのは、人々が万物を産み、自らを犠牲にして人に火をもたらした大恩ある伊邪那美命を、黄泉に忌まわしい大神として閉じ込め、遠ざけてしまったことにあった。「紀」によれば、姉の天照大神が、輝けるものとして高天原で最高に尊ばれていながら、母を慕うそぶりもおみせにならないことに（「記」では母とならない）、悲しみが憤然として怒りにかわることがあった。不条理な運命であるが、黄泉の世界のこととなれば、天照大神とて、如何ともしがたい。けれど・・・
　さて、大穴持命は、夢に、その泣く理由を知りたいと願うと、その夜の夢に、御子がことばをしゃべる姿をご覧になられた。目覚めると、御子が「みつ」という言葉を発し、それは何処かの場所のことであり、御子は石川を渡り、坂の上に至り、「ここぞ」と言う。すると水が流れ出、御子が沐浴されると話すことができるようになった。この地を三津（みつ）といい、妊婦がその水で育てた稲を食べると、その子は生まれた途端にしゃべりだすと、妊婦達はその村の稲を食べないようになったそうである。
　夢は、我が国では「いめ（寝目）」のこと、眠っている目がみているものであり、寝目がみている魂の現実である。心を砕いて心配する大穴持命の寝目には、ことばを発す御子がみえた。御子の心に「みつ（充）」もの、ふさぎ込んでいたものが、水と共にどっと放たれたのであろうか。その水は稲に不思議な力を与えた。「あぢ」の語源は定かでなく、味としては、通常より濃く強いもの、異なるものをさしたようである。「すき」は鉏、「たか」は尊称であり、異能の水神・農業神にみえる。その御子を塩（盬）冶毗古能（やむやひこの）命という。塩の旧字の盬には停止する意味もあり、この御子は父のように泣き続けることはなく、冶には美しく仕上げる意味があり、塩冶の地では質のよい稲が育成したのかもしれない。後に、巨大な円墳（上塩冶築山古墳）が築かれる地である。

　山間の仁多の三津において、稲に異様な力を与えた阿遅須枳高日子命の「みつ」水とは、我が国の風土が産み出した滋味のある水であった。広葉樹の落葉が堆積し、腐葉土となる地に雨がふりそそぎ、その養分を溶かし込んだ豊かな水を利用することが出来た。その水を田にため込み、充分な日照があれば、気温がいささかも低い山間においても育つ稲が得られ、それを繰り返すなかで、稲の育つ北限を押し上げる稲種が生み出されたのであろうか。山間部であり、幅が狭く横に長い棚田となり、仁多では横田の地と呼ばれた。その水が海に流れ込むと、豊かな漁場ともなった。
　大国主命と須久奈比古（すくなひこ）命が天下を巡行（めぐ）る時に、飯石の多弥（たね）に落としてゆかれた稲種がそれである。この稲種による水田耕作と須久奈比古命の虫害駆除の術や傷病治癒の術を広め、日本海沿岸の港をつなぐ交易ネットワークを築くことに力が注がれた。
　稲作の北限が上昇することにより、東方、北方の水利のよい平野部が開発された。円山川流域の但馬、由良川流域の丹波、琵琶湖の湖東、紀ノ川流域の紀伊、大和川流域の難波、奈良盆地、長良川・揖斐川･木曽川流域の美濃や尾張、伊勢湾岸、九頭竜川流域の越（前）、神通川流域の越（中）、信濃川・阿賀野川流域の越（後）に有力な豪族が誕生し、上流へとそれは波及し、一方、港を構え交易を盛んにした。わけても常陸国は豊かであった、「それ常陸(ひたち)の国は、堺(さかい)は是れ広大(ひろ)く、地(くに)も亦(また)緬邈(はろか)にして、土壌(つち)沃墳(うる)ひ、原野(はら)肥衍(こえ)たり。墾発(ひら)きたる処(ところ)、山海の利(さち)ありて、人々自得(ゆたか)に、家々足饒(にぎは)へり。設(も)し、身を耕耘(たつく)るわざに労(いたつ)き、力を紡蚕(いとつむ)ぐわざに竭(つく)す者あらば、立即(たちどころ)に富豊(とみ)を取るべく、自然(おのづから)に貧窮(まづしさ)を免 (まぬか)るべし。況(いはむ)や復(また)、塩と魚（うお）の味(あじはひ)を求めむには、左は山にして右は海なり。桑を植（う）ゑ、麻（あさ）を種(ま)かむには、後(しりへ)は野にして前（まへ）は原（はら）なり。いはゆる水陸(うみくが)の府臓(ふざう)、物産の膏腴(かうゆ)といへるものなり。古(いにしへ)の人、常世(とこよ)の国といへるは、蓋(けだ)し疑ふらくは此の地(くに)ならむか。但(ただ)、有るところの水田(こなた)、上(かみ)は少（すくな）く、中の多きを以（も）ちて、年に霖雨(ながあめ)に遇はば、即(すなは)ち苗子(なへ)の登(みの)らざる歎（なげき）を聞き、歳(とし)に亢陽(ひでり)に逢はば、唯（ただ）穀実(みのり)の豊稔(ゆたか)なる歓(よろこび)を見む。（常陸国風土記、講談社学術文庫）」
　奴国の存在が知られ、倭人が半島や大陸に出向くことで、大陸や半島で政権を追われた族が、渡来してきた。東の彼方の島に、渡来人の高い技術を受け入れる地があることも知られるようになっていた。治水工事の技術、製糸と織物、わけても養蚕と絹、絹織物の技術が重宝された。
　稲作が始れば、土質や水利や日照の条件のよい所を入手したくなる。湿地から始ったとされるが、湿地が必ずしも良いとは限らない。川の氾濫や高潮、暴風や津波などの河川の逆流の危険がつきまとう。治水工事の技術があれば、大いに有利に場所を選択できる。獣や侵入者に田を荒らされてはならず、収穫を奪われないような対策も講じねばならない。もめ事や争い事も解決しなくてはならない。「のりごと」を定め、違反する者を懲らしめ、全体を取り仕切るものが居なければ、安定した生活を営むことができなくなる。
　そういうなかで、身分の分化が顕著となると、住む所や食べるものもさることながら、身に纏うものに差がでてくる。布への需要は急速に高まり、穀物とともに布を税として徴収し、布がいわば給与の役割を果たすようなこととなる。
　但馬から播磨へは高低差が少なく、人のみならず物の移動にも利があった。敦賀から琵琶湖にでると、湖東側は稲作に向いており、美濃の平野とつながり、瀬田川を下ると淀川を通じ難波に出ることができ、木津川を遡ると奈良盆地に出ることができた。九頭竜川を遡り郡上へ出れば、神通川を遡ると同じく飛騨に通じた。糸魚川は翡翠を産するため、山師が早くから入り込んでいた。直江津の関川、柏崎の鵜川、長岡経由の信濃川・千曲川を遡り信濃に通ず広がりまでは、筑紫、長門、岩見、吉備、伯耆、因幡を含め、大国主命の天下の広がりのなかにあった。当時の表日本とは、日本海側であり、瀬戸内海や太平洋は山の彼方、裏日本とでもいうべきものであった。
　天下の平定とは、軍事的な平定ではない。この時代に、これだけの範囲に武装者を派遣し、その兵站をまかなう機動力はない。港に寄港地を設け、宿営地を造り、出雲よりある程度の人間を移住させ、その地を防衛する程度の兵力を置くことは可能であったろうが。それよりは、現地の有力者の女（むすめ）を娶り、姻戚関係に入り好を結ぶことが有効であった。その地を豊かにし、人口を増やし、交易を盛んにする。大国主命と須久奈比古命が、富と安寧の象徴のような存在となり、その盟主の立場を努めることが肝要であった。その武器は、従来からの玉製品、新たな稲種、医術、まじないであり、そして国引き以来の圧倒的な土木技術と建築技術、加えて醸造技術、製糸・織布技術であった。

　しかし、稲作の進展の影響は大国主命の想像を超えていた。余剰の穀物を持つ者は、様々な製品を制作する者を囲い込み、製品を集団内に普及させ、分業を進めるのみならず、交易により様々な物を入手することができた。品種や耕作方法の改善、耕地を開発することで収穫が増加するのではあるが、最も簡便な方法は、他者の耕地を占拠することとなる。そして、その氏族、集団、その地の産物、製品をも取り込こんだ。交易に用いる船も漕ぎ手を増やし、積載量を増やし、海流を利用することも、乗り切ることも可能となった。そして、大きな川の流域で氏族を束ねる豪族が力を貯え、海人と連携した。
　九州では、筑後川流域、阿蘇山麓の白川流域方面で、五島列島を経由し半島や大陸と交易をする勢力が成長した。また、笠沙を中継し南方に通じ、あるいは、霧島山麓の大淀川、大分川流域と交流した。また、笠沙から、黒潮に乗り阿波や紀伊に通じる航路が開かれた。
　穴戸（長門）の海峡（関門海峡）は、日本海側と太平洋側との潮の干満に落差があり、潮の流れが急速であり、潮流の変化する時を知らない者には航行が難しかった。瀬戸内海も同様で、大分側と淡路側からの潮の干満があり、また内海に存在する島々が起こす潮流の変化を知らない者には航行ができかねた。しかし、後漢書に、「安帝の永初元年（107年）、倭国王帥升等、生口百六十人を献じ、見 （まみ） ゆを請願す（後漢書東夷伝）」とあるごとく、それを送り込むほどにまで船の性能や航法の向上があり、また、瀬戸内海では、双方の潮が合流する安芸を中心に、潮待ち地点を設け、潮流を熟知することで、沿岸の政情が安定しておれば、下関から難波まで航行することが可能となった。
　洞海湾、長門、大分、宇佐、周防が一つの海域となった。柳井、伊予、安芸の海域、愛媛、吉備、讃岐の海域、阿波、淡路、紀伊の海域、播磨、淡路、難波の海域での交易が活性化され、それは内陸の盆地へと波及した。その動きは中部地方では尾張や美濃、関東地方においては常陸において顕著であった。魏志倭人伝において倭国の大乱と記されたのは、各地において豪族が乱立し、土地と交易を争ったことによる。

瀬戸内海では、海人族の来襲を避けて、高地に集落が営まれた。来島（くるしま）海峡、芸与（げいよ）諸島における、大三（おおみ）島の鷲ケ頭（わしがとう）山、大島の八幡（やわた）山、伯方（はかた）島の宝股（ほこ）山、岩城（いわき）島の積善（せきぜん）山、香川県三豊（みとよ）郡詫間（たくま）町紫雲出（しうで）山、塩飽（しわく）諸島の心経（しんきょう）山、小豆島近くの豊（て）島の檀（だん）山、岡山の児島、貝殻山、倉敷の種松（たねまつ）山等に高地性集落遺跡（140～430mの山頂）が分布している。
　わけても注目されたのは、奈良盆地であった。大乱の世にあって、この盆地は難波側の海からは生駒山が門（山門、やまと）のように立ち塞がり、容易には攻め込み難く、北も東も南も山に囲まれていた。しかし、大和川経由で難波に通じ、瀬戸内海航路をつうじての交易には支障はなかった。また、紀ノ川経由で黒潮の航路ともつながり、陸路で伊賀、伊勢、尾張、美濃に通じ、東方の事情も入る要衝であった。半島からの文物の流入のルートは、購買力の旺盛な瀬戸内海ルートに重点が移りつつあった。

　出雲を後にされた天下所造大神は三輪山に入っておられた。難波、紀伊、伊勢、木津方面への通路の要衝に鎮座された。伊弉奈枳命と伊邪那美命は淡路島にお入りになっていた。瀬戸内海航路の難波側と阿波、紀伊側の双方に睨みをきかしておられた。伊弉奈枳命は淡路に残られたが、伊邪那美命は後に紀伊に行かれ、須佐能袁命も御子達と共に安芸を経由して紀伊に入っておられた。大国主命も奈良盆地に入られたが、日本海沿岸の諸豪族との関係、わけても、敦賀や越の豪族との関係に忙殺され、瀬戸内海や太平洋側で起っている事態には、目が届かなかった。
　大陸や半島との交流を維持してきた奴国の後継者には、二つの大きな懸念があった。一つは筑後に力を有す豪族の国であり、一つは日本海沿岸の膨張する出雲圏の国々であった。
　そもそも奴国が興隆したのは、漢の武帝が衛氏朝鮮を打倒し、楽浪郡、帯方郡を置き、漢人がその地に流入し、半島に漢文化が流れ込んだことにある。馬韓や辰韓に比べ弁韓は土地が肥沃で稲栽培にも適しており、養蚕を採り入れており、鉄を産し、これを求めて来訪する者が多く、交易も活発であった。この弁韓を通じ、倭人が帯方、楽浪郡の漢人と接触し、その存在を知らしめ、後漢に使節を送ることができた。
　漢文化の流入は半島に大きな刺激を与え、北方では扶余人が高句麗を建国し、馬韓でも扶余系の百済が建国され、辰韓では、新羅が建国された。倭人のなかには新羅の建国に協力し大輔(大臣)となった者もいた。馬韓は52カ国、辰韓や弁韓はそれぞれ12カ国に分かれていた。一人の王が他の宗族、氏族を統合したもので、中国風の組織を採り入れた。こうなると、52カ国、12カ国が一国として行動することになり、各個撃破で対応することはできなくなり、倭人の対応方法も変らざるをえなかった。
　弁韓は洛東江に流れ込む川で分断されており、金官国が盟主であったが、統一国を形成することがなく、元来から弁韓と辰韓との境が定かで無く、辰韓から圧力を受けてきた。弁韓は対抗するために奴国の後継者との協調を強め、辰韓は背後の奴国を敵視した。辰韓がその奴国の背後の筑後と結び、背後から圧力をかけることが懸念された。
　もう一つは、巨大化した出雲圏の存在であった。このために、出雲の背後の勢力と手を結ぶぼうとした。洞海湾を押さえ、宇佐に進出し、周防と結び、安芸や吉備から出雲を牽制しようとした。一方、淡路の側からも、阿波、紀伊、難波の海人がこれに呼応した。一国が統合するものではないが大きな交易圏が成長していた。大国主命は、これらの勢力に出雲に追い詰められることになる。
　そのことに触れる前に、少し長くなるが、半島の歴史を見ておきたい。

　半島は、古来、モンゴロイドが土着したところに、北より騎馬遊牧系の民が南下し、南では海より大陸南方、東方、東南アジア系の民、倭人が入り込む地であった。周の武王が殷を討ったとき、武王は殷の賢人箕子を王倹（平壌）に候として封じ、箕子は農事や養蚕や機織り、八条の教えにより民を教化し、箕子朝鮮を建国したという（それは中国人の主張で韓国人は、それ以前に、太白山に降臨した檀君を朝鮮族の始祖とする）。遊牧民は牧草を求め移動するのが常であるが、農耕や養蚕により定着する族もあらわれる。
　春秋戦国の世にあっては、朝鮮は燕の情勢に左右され、燕が朝鮮その南の真番（朝鮮国の属国）を併合することもあった。燕が秦に滅ぼされ、秦が天下を統一した時には、朝鮮候として仕えていたが、陳勝や項羽等が秦に叛き戦乱となると、朝鮮候の準は朝鮮王を称した。
　漢が天下を統一（BC206-8年）すると、劉邦は同郷の盧綰（ろわん）を燕王とした。しかし、盧綰は謀反を疑われ劉邦が没すると匈奴に逃げ、部下の衛満（えいまん）は朝鮮に逃れた。準に取り立てられ、圭の百里を授けられた衛満は、西辺の守りに就いた。そこは、燕、齊、趙から多くの民が避難し、難民の邑と化し、衛満はこれらを糾合し準を討ち、王倹に衛氏朝鮮を建国する（BC194年）。衛満は漢の鉄器文化、鉄製農具や武器を導入し、手工業を興し周辺の族と交易する。漢は衛満を遼東太守の外臣とし、濊貊系の遊牧民等がこれに服した。一方、準は左右の官を率いて船で南方に逃れ、韓を称す民の王（韓王）となる。河北の韓人の末裔か、山東半島を経由して逃れてきた韓人か、不明であるが韓姓を称していたようだ。
　その南を中国人は辰と称し、小国が分立しており、辰王が月支国に都を置き全体を統治しているとみなしていた。月支は騎馬民族であり、大月支と小月支に分かれ、小月支の一部が半島を南下したとされるようであるがよくは分からない。辰の地には、かつて秦の苦役から逃れてきた亡人が東部に地（後の辰韓）を与えられており、準を諫めて容れられず朝鮮国を出た宰相の歴谿卿（れきけいけい）も二千余戸の住民を率いて逃れて来てもおり、遊牧民も漢人も混在する地であったが、それぞれの地では、土着の王族が治めていたとされる。後に50数カ国の馬韓、12カ国の辰韓、12カ国の弁韓となる地である。
　漢の武帝の元朔元年（BC128年）に、濊君の南閭（なんりょ）等が、朝鮮王、衛右渠（うきょ）に畔（そむ）き、二十八万口を率い遼東に詣（いた）り、漢に内属する事件が起こり、武帝はその地を蒼海郡とした。しかし、漢人の官が治めるには難しかったようで、BC126年には、南閭に「穢王之印」を授け治めさせている。
　武帝の治世は、度重なる匈奴征伐等遠征、建築造営により、財政が悪化し、塩・鉄（後には酒）の専売制、財産税の導入、商品の流通に介入して利を図るなどにより、疲弊や不満がみられ、元鼎末（BC112-111年）には、南越が背き、朝鮮王、衛右渠も周辺国の漢に朝貢する道を閉ざすなど不穏な動きをする。武帝は衛氏を伐ち（BC108年）、朝鮮を楽浪郡、その東を臨屯郡、南の真番を真番郡、北を玄菟郡とし、郡県制を敷いた。郡太守が派遣され、漢人の官が赴任したのであろうが、郡県システムをその素地のない所で機能させるのは、困難であったようだ。
　昭帝の時（BC82年）臨屯郡は楽浪郡に編入され、楽浪東部都尉（郡太守を補佐し、郡内の武職や兵卒を掌る官職）が置かれ濊の官をもってその地を治めしめ、真番郡は楽浪郡に併合された。臨屯郡に居た濊貊の圧迫を受けた玄菟郡は、かつての蒼海郡の地に移され、そこを追われた穢王の族は北に逃れ、「扶余」（後に高句麗を建国）を称し、移動した玄菟郡の日本海沿岸に居た濊貊は「沃沮」を称した。とはいえ、彼等には、楽浪の漢文化にはあこがれが有り、その導入を図った。これらの変動のなかで、辰は馬韓、辰韓、弁韓に分立する。
　後漢書によれば、「韓には三種が有り、馬韓、辰韓、弁辰という。馬韓は西に在り、五十四国有り。其の北は楽浪と、南は倭と接す。辰韓は東に在り、十二国。其の北は濊貊と接す。弁辰は辰韓の南に在り、亦、十二国。其の南は亦、倭と接す。凡て七十八国、伯済は是其の一国。大なるは万余戸、小なるは数千家、各（おのおの）山と海の間に在り。地を合せると方四千余里、東西は海により限りとす。皆（すべ）て古の辰国である。馬韓は最大にして、其の種を共立して辰王とす。都は(月)支国に目（み）え、盡（ことごと）く三韓の地に王たる。其の諸国の王は先ず皆て馬韓種人である。馬韓人は田と蠶（養蚕）を知り、綿布を作る。梨のような大栗がある。長い尾の雞がおり、尾の長さは五尺。邑落は雜居で、亦、城郭は無い。土室を作り、形は家のようで、開戸が上に在る。跪拜を知らず、長幼男女の別が無い。金宝錦罽（毛織の絨毯）を貴しとせず。騎乘す牛馬を知らず。唯に瓔珠（たま）を重んじて、衣に綴り飾りとし、頸に縣け耳に垂らす。大率（およそ）皆くしゃくしゃ頭のままで（冠がない）、布袍（ふほう、裳がない）で草履。其の人となりは壮勇で、少年が室を築くに力をなすは、輒（すなわち）繩で脊の皮を貫き、大木を縋（ひきずり下ろし）、大声で叫ぶを健となす。常に五月の田が竟（おわ）ると鬼神を祭り、昼夜酒会し、群れ聚り歌い舞う。舞うこと輒数十人、相隨いて地を（ふ）み節をとる。十月に農の功畢（おわ）りて、亦、復（また）かくのごとし。諸国では邑ごとに一人天神を主祭し、号（なづ）けて「天君」という。又、蘇塗（そと）を立て、大木を建て鈴や鼓を縣け、鬼神に事（つか）える。其の南界は倭に近く、亦、文身（入れ墨）者有り」という。
　濊においては、大君長が居なかったが、漢の都尉のもとに官として侯、邑君、三老を置き、下戸を治めるようになり、後には、都尉の代わりに渠帥（きょすい：統率者）を置き候とした。馬韓では各国に長師（大は臣智）、次に邑借（ゆうしゃく）が置かれ、辰韓、弁韓では、各国に渠帥（大は臣智）、次に儉側（けんそく）、次に樊秖（はんし）、次に殺奚（さっけい）、次に邑借が置かれた。
　後漢の光武帝は、各族の長や王を朝貢せしめて信任することによる統治に切り替えた。かくして、紀元44年には、東夷の韓人で廉斯（れんし）邑の蘇馬諟（そばし）等、47年には、高句麗、49年には、扶余王、54年には、鮮卑大人が朝貢し、57年には、倭の奴国王の使者が楽浪を経由し洛陽に至り、その存在を誇示した。
　一番手の蘇馬諟は弁辰(弁韓)の人、中国人からみれば、辰韓と弁辰は同じようにみえたが、その風俗において、弁辰は抜きんでていた。三國志、魏書、東夷傳、弁辰によれば、「土地は肥美にして、種は五穀に宜しく、稻に及び、蠶（蚕）桑を曉（し）り、縑（かとりぎぬ）の布を作り、牛馬に乗駕す。嫁娶の礼俗、男女に別有り。大鳥の羽を以て死を送り、其の意、死者をして飛揚せしめんと欲（す）。国に鉄を出し、韓、濊、倭皆て從いてこれを取る。諸の巿買（しこ、市場の商人）が皆て鉄を用いること、中国が銭を用うがごとし。又以て二郡（楽浪郡・帯方郡）に供給す。俗は歌舞飲酒を喜び、瑟有り。其の形は筑（箏に似る楽器）に似て、これを弾けば亦、音曲有り。兒生れば、便ち石を以て其の頭を厭（おしつ）け，其の褊を欲す。今の辰韓人は皆褊頭。男女は倭に近く、亦文身す。歩戰に便（な）れ、兵仗は馬韓と同じ。其の俗、行く者相逢えば、皆住（とど）まり、路を讓る。弁辰と辰韓は雜居す。亦、城郭有り。衣服居處は辰韓と同じ。言語法俗は相似たり。鬼神を祠祭するに異有り。灶（かまど）を施すに皆て戸西に在り。其の瀆盧国は倭と界を接す。十二国亦、王有り。其の人形は皆大。衣服は絜清にして長髮。亦、広幅細布を作る。法俗は特に嚴峻」といい、楽浪郡や帯方郡で中国商人と鉄で交易決済を行っていた。倭と界を接すとあり、倭が弁辰の南端に居所を有していたことになる。奴国が楽浪や洛陽に達するのは、弁辰と手を携えたことによろう。

　三国遺事、駕洛国記によれば、天地が開闢したとき、国も君臣もなく、九の干という酋長が百姓（諸々の姓）を治めていた。後漢の光武帝の建武18年(AD44年)に北の亀旨峰（クジボン）で異様な声がした。九干によれば、昊天が新たな家邦と君后を降ろすとのお告げであるという。皆で祈り歌舞して迎えるべしとのことで、歌舞を続けると、天から紫の縄が降り、その先に紅く金の袋があり、開けると太陽のように輝く金の卵が六つあった。各の卵から童子が生まれ、最初の童子を首露(スロ、最初に現れた)と名付け、六国の一、大駕洛国の王とし、他の五人を五加耶国の主とした。建武24年になると、九干が皇后を迎えることを進言する。西南の隅の海の彼方から、緋の帆を張り、茜の旗を付けた船が北を目指してきた。錦繍（錦と刺繍を施した絹織物）、綾羅（あや絹とうす絹）、衣（上半身着）裳（下半身着）疋（二反）段（一反）、金銀珠玉、瓊玖（美しいおび玉）、服玩器を持参する阿踰陀（アユタ）国の公主の二十八歳の娘、許黄玉（ホファンオク）が乗船していた。父王と皇后は夢で昊天上帝のお告げが有り、駕洛国元君の首露に嫁げとのことであった。ローマと漢の間で、陸のシルクロードのみならず、海のシルクロードでもその交易の利を得ようとするインド商人との交易がその視野にあった地が駕洛であるといいたい。
　高句麗、百済、新羅、駕洛の建国の記述について、高麗時代の金富軾（三国史記、1145年12月に撰上）、高僧一然とその弟子（三国遺事、1270年代後半から1280年代中頃に撰上）等は、「記」や「紀」を意識しており、中国の史書に記されない伝承を取り込み、朝鮮半島に中国人が入る前に自らの独自の歴史と伝統のあったことを示そうとした。朝鮮半島の歴史は、中国の歴史では無く、朝鮮半島の歴史で有り、中国の支配を受けることはあっても、中国に属すものではないとする意識の表れであり、今少しく、建国談をみておきたい。

　三国遺事によれば、朝鮮の建国は以下のごとしという。「孔子は礼楽により邦を興し、仁義を教え、怪力・乱神を語らなかったが、その邦の興りに怪異なる現象がみられた。伏羲は黄河の出した図により、禹は洛水の出した書により、大変に乗じ、大器を手に入れ、大業を成した。
　虹が神母にまとわり伏羲は生まれ、龍が女登に感じて炎帝を生み、皇娥（こうが）が窮桑（きゅうそう）の野で白帝の子と称す神童と交り小昊を生み、簡狄（かんてき）が卵を呑んで契（せつ、商の始祖）を生み、姜嫄（きょうげん）が（巨人の）跡を履（ふ）んで弃（き、后稷）を生んだ。妊娠十四ヵ月にして誕生したのが堯（ぎょう）であり、龍が大沢に交わりて沛公（はいこう、劉邦）を生んだ。
　三国の始祖においても、このような神異があって、怪しむべきことはない。だから「紀異」を諸篇の漸（はじめ）とする。二千年の昔、壇君王儉（だんくんおうけん）がおり、都を阿斯達に立て、国を開き朝鮮と名付けた。堯と同じ時である。
　『古記』に云う。 昔、桓因（帝釈天）は、その子、桓雄が天の下のことばかり気にするので、その意を知り、下の三つの高い山を視て、人間を広く増やすに、天符印三箇（三種神器、鏡、鈴、銅剣か？）を授け、人間を治めせしめた。雄は徒三千を率（ひき）い、太伯山の頂の神壇樹の下に降りた。これを神市と謂い、桓雄天王と謂う。 風伯・雨師・雲師を將（ひき）い、穀を主（つかさど）り、命を主り、病を主り、刑を主り、善惡を主り、凡（すべ）て人間の三百六十余事を主り、世を治め教化した。
　時に熊と虎が同じ洞窟におり、人間になりたいと神雄に願った。神雄は、靈艾一・蒜二十枚を与え、それを食い、百日日の光を見なければ人間になれると告げた。熊と虎はそれを食し、二十一日にして、熊は女身を得たが、虎はそうしなかったのでそのままであった。熊女は夫を得て子を妊むことを呪願した。神雄が人と化し、婚し、熊女は孕みて子を生む。この子を壇君王儉という。平壤城に都し、始めて朝鮮を稱す。また都を白岳山の阿斯達に移す。またの名を弓（方）忽山、または今彌達という。国を御（おさ）めること一千五百年。
　周の武王が即位すると箕子を朝鮮に封ず。壇君は藏唐京に移り、後に阿斯達に還り隱れ、山神となった。一千九百八歳であった。（巻一、紀異 第一　序文および古朝鮮を筆者要約）」。

高句麗とは、中国人からすれば、玄菟郡の高句麗県に出入りしていた濊貊、後に扶余と称した族であり、高麗（こま）、貊（こま）でもある。後の高麗（こうらい、918年 - 1392年）と区別するために高句麗とした。三国史記、高句麗本紀によれば、「扶余王の子がなく、山川を祭ると、王の馬が大石の前に止まり、その石に下に金色の蛙のような形の子供がいた。金蛙（きんあ）とし、王の子とした。宰相は占いで、天神が金蛙に国を継がせると知り、扶余王達は東海の海浜に移り、東扶余とし、天帝の子の解慕漱（かいばそう）がそこに都を拓き、亡くなると金蛙が後を継いだ。金蛙が解慕漱と愛し合ったという河神の娘の柳花（りゅうか）の話を聞き、柳花を家の中に入れると、日光が娘を追いかけて照らし、娘が身ごもった。娘は大卵を産み、その卵を食べる獣も、面倒をみるものもなく、野原に捨てられ、鳥が卵を温めた。金蛙王が割ろうとしたが割れず、柳花に返した。そこから生まれたのが体格、知能にすぐれた子で、七歳にして自分で弓矢を作り、百発百中させたため、弓矢の名手（朱蒙）と名付けられた。
　金蛙王には七人の子があったが、朱蒙の異能を恐れ、後の禍となると、排斥すること策した。柳花はそれを案じ、朱蒙に立ち去ることを薦め、朱蒙は魚やスッポンの助けを得て川を渡り、追手の手からのがれることができた。そこで三人の賢人に会い、彼等とともに卒本にたどり着き国を拓き、国号を高句麗とした。朱蒙二十二歳、漢の孝元帝建昭二年（BC37年）のことであった。（筆者要約）」とあるが、高句麗の由来には触れておらず、だから高氏としたと高氏の由来としたのみである。

　また、同じく、百済本紀によれば、「朱蒙が北扶余から卒本に避難してきた時、卒本扶余王には、息子がおらず三人の娘がおり、朱蒙を非凡と見て、二番目の娘を嫁がせた。王が亡くなると朱蒙が王位につき二子をもうけた。長男を沸流（ふつりゅう）といい次男を温祚（おんそ）という。ところが、朱蒙が北扶余にいた頃に生ませた子が卒本にやってきて太子となったので、沸流と温祚は家臣を連れて南に逃げた。漢山に来て温祚は、そこに留まったが、沸流は更に海岸をめざした。温祚は、河南の尉礼城に都をおき、十人の家臣が従ったので国号を「十済」とした。前漢成帝の鴻嘉三年（BC18年）のことであった。海岸に住んだ沸流は、水が塩からく暮らしがたたず、温祚等が尉礼で豊かに暮らしているのを見て恥じて死に、家臣達は温祚に服した。百姓が喜んで従ったので、国号を「百済」と改めた。百済王家は扶余系である。（筆者要約）」とする。

　また、同じく、新羅本紀によれば、「辰韓に六村がある。馬がいなないており、そこへ行くと、馬の姿が消え、大きな瓢の形をした卵があり、それを割ると、幼児が出てきた。十余歳で優秀で老成しており、六村の人々は、彼をあがめて君主とし、瓢を辰韓では朴（ぼく）といい、王者を居西干（きょせいかん）というので、朴氏、諱（いみな）を赫居世（かくきょせい）、王号を居西干（コソガン）とし、前漢孝宣帝の五鳳元年（BC57年）に即位した。十三歳で国号を徐那伐（じょなばつ）とした。」とあるが、これは辰韓時代のことである。第三代儒理尼師今（じゅり にしきん）の治世（在位 AD24-57）に六部六姓（李、崔、孫、鄭、裴、薛）を定め、十七の官位を設けたとするが、このような官位が導入されるのは、中央集権的な国家が形成される第十七代　奈勿 尼師今（在位AD356～402）以降とされ、編者の金富軾が「紀」に対抗してこの期に繰り上げて官位制度の成立を記したとされる。第四代、脱解（だっかい）尼師今のとき、始林の樹間の鶏の鳴き声に導かれ、金色の小箱の中から小男児を得て、その名を閼智（あるち：知恵者；後の新羅王嫉の始祖）とし、金の小箱から生まれたため、金氏とし、国号を鶏林にした（始林→鶏林→新羅となる）。（脱解は、倭国の東北一千里の多婆那国の国王が女国の王女を娶って生んだ大卵。王女が箱にいれて海に流し、金官国に流れつき、更に辰韓の浜辺につき、老婆がその箱を開けて、子供見つけ養育したもの。学問を薦められ精通し、王女の夫となり、王が賢者を後継者と定めて亡くなり、王位に就いた）。

　一然は朝鮮建国の「紀異」、檀君神話を記したが、これを継ぐ族がなかった。扶余にもそれぞれの紀異の始祖がいるが、朱蒙も温祚も檀君を継ぐものではない。月支国に都を置いた辰王も別個。辰韓、弁韓を牛耳っていた馬韓の王はよく分からない。駕洛の首露も辰韓の赫居世も、脱解も新羅王族の祖の閼智（金氏）も別個、ある程度共通するのは、卵から生まれた異能の男児、天神の子とするものであるが、その天神が如何なるものかは分からない。
　我が国では、奴国や邪馬台国が有していたであろう神話、また出雲が有していた神話は、ヤマト政権により放棄されたものがあれば、また、変形変質されたものもあろう。天武天皇の世にその形を整えつつあった「記」や「紀」の建国神話や歴史が編纂されて以降は、王朝の交代がなく、その一貫性は保たれてきた。もし、王朝の交代が起っておれば、それは分断されたことであろう、そうならなかったのは、まことに奇跡的なことである。
　さて、長らく寄り道をしたが、本題に戻りたい。表日本と裏日本の関係に、奈良盆地を軸に逆転が生じた事態をみていた。

　「紀」によれば、御間城天皇の世（BC33年）に、意富加羅（おほから）国の王子、都怒我阿羅斯等（つぬがあらひと）、亦の名を于斯岐阿利叱智干岐（うしきありしちかんき）が越（こし）の国の笥飯浦（けひのうら）に来訪し（敦賀の由来、別伝では、穴門で国王と称する者に会い、偽者と分かったが奈良への道が分からず、出雲、笥飯を経由し奈良に至り）、帰化を申し出た、あるいは、この王子は、豊国の国前郡に至り、また、難波の比売語曾社に逃げ込み神となった女を追いかけてきたともいう。この話しから、日本海側から奈良に入るルートとは別に、すでに瀬戸内海経由で難波に至るルートが通じていたことが分かる。
　同垂仁天皇二年（BC27年）に、任那人、蘇那曷叱智（そなかちち、都怒我阿羅斯等と同一人物とみられる）に赤絹一百疋を賜い、任那王として帰国させると、途中で新羅にそれを奪われたという。
　同三年に新羅の王子、天日槍が神宝を携えて播磨に来訪する。政権はこれを難波で止め、播磨国の宍粟邑と淡路島の出淺邑のいずれかに住むことを選ばせた。しかし、天日槍は宇治川から近江、若狭を経て但馬に入った、と記している。
　これは、駕洛からの船が敦賀にも入れば、難波にも入ったことを物語る。任那に植民していたことにもなり、新羅の船は播磨で足止めし、警戒をしたととれる。
　駕洛の建国は後漢の光武帝の頃（AD44年）である。三国史記新羅本紀によれば、赫居世八年（BC50年）に、倭人が出兵し、辺境に侵入しようとしたが引き返した。同19年（BC39年）に弁韓が服属してきた。同三十八年（BC20年）に瓠公（ここう、倭人の大臣）を馬韓王に派遣し弁明をさせる。難解次次雄十一年（AD14年）に倭人が兵船百隻余で海岸地方の民家を略奪したとあり、辰韓の時代から倭人は、弁韓の側にたち、辰韓と対立していたことになる。兵船百隻はどう理解すべきか問題があろうが、漕ぎ手十数人の船が必要と思われ、相当の人数となる。脱解尼師今三年（AD59年）に、倭国と国交を結び使者を交換したとあり、同17年（AD73年）に倭人が木出島に侵入したともある。
　奴国が光武帝から印璽を得たのがAD57年であり、上記の倭国は奴国である可能性が高い。つまり、「紀」の記しているのは、奴国の頃に起こり始めた国際関係の変化による相互訪問の記録を反映したものといえる。

　後漢は、桓帝、霊帝の時代になると賄賂政治が横行し、賄賂をまかなうために民衆を搾取し、黄巾の乱（184年）などが勃発し、曹操や劉備や孫権などが争う争乱の時代へと突入してゆく。
　倭国の帥升が朝貢をしたのが107年のことであった。倭人は楽浪郡を経由し洛陽に通じる交易路を有していた。半島では、韓や濊が強盛となり、郡県制は機能しなくなっていた。新羅本紀によれば、阿逹羅尼五年(AD158年) 春三月に竹嶺を開く、倭人来聘す、とある。新羅が竹嶺を開けば、南漢江に至り、これを下り、楽浪郡の南（後の帯方郡）へと至る。馬韓や濊を牽制することができ、倭人も洛東江を遡り、竹嶺を越えるルートを求めて新羅と修好したのであろう。
　建安年間（196-220年）には、公孫康が楽浪郡の屯有県以南の荒地を分けて、帶方郡と為し、公孫模、張敞等を派遣して漢人の遺民を收集し、兵を興し韓や濊を伐ち、その地に居た漢人も戻り、公孫氏は倭や韓を追い払い、帶方に属せしめた。洛陽を目指す倭人にとっては、公孫氏が立ちはだかる由々しき事態となった。ただ、桓帝、霊帝の時代の倭国について、後漢書は、大乱で互いに戦い、主となる王が立てられなかったとしており、楽浪郡どころではなかったのかもしれない。
　しかし、新羅本紀によれば、阿逹羅尼二十年(AD173年) 夏五月に 倭女王卑彌乎、使を遣し来聘す。伐休尼師今十年(AD193年) 六月に、倭人大饑（飢饉）す、食を求め来る者千余人、とある。魏志倭人伝によれば、倭国の乱は、一女子を共立して王と為し、収ったとする。卑弥呼である。女王国が海外と交渉するには、特別に一大率を置いて検察する。諸国はそれを非常に厳しいものとみなしている。常に伊都国を治めている。国中に置かれている刺史（中国の州長官）のようなものだ。王が使者を洛陽や帯方郡や半島の諸国に派遣する場合、あるいは帯方郡の使者を受け入れる場合は、港において伝送文書や賜遺の物を捜（検査）露（披露）して、女王に詣でる。それで間違いが起ることはない（一大率の厳しさを感心し、文物の個数を点検するが、それを披露することは危険であり行うべきことではないが、それで問題が起きないことを奇異に感じたのであろうか？）、という。

　どうやら大国主命の広義出雲は、筑紫、周防、安芸、吉備、播磨、難波、淡路、阿波、紀伊、奈良、伊勢、美濃、飛騨、信濃の方面から圧力を受け出雲へと追い詰められてしまっていたようである。邪馬台国といった特定の国が追い詰めたものではあるまい。それぞれに、いわば、群雄割拠のごとく各々の地で力を蓄えた豪族が、出雲の影響下から離れてそれぞれの覇を競い、大乱となったのであろう。
　そして交易の利を求めた。高級品としては、卑弥呼が得たごとき、絳地交龍錦（錦織）、絳地縐粟罽（毛織物）、蒨絳（茜色・深紅の布）、紺青（布）、紺地句文錦（曲線模様毛織物）、白絹、金、五尺刀（刀）、銅鏡、真珠（装身具）鉛丹（化粧品）があげられる。一般的には、鉄器（耕作や土木や建築用器具、武器）、衣食住に関する物、雨乞いや魔除け、病気治癒の呪術などなど、漢の文物が珍重され、銅鐸や銅剣などは過去のものとなってしまった。
　わけても力をもったのは、銅鏡であった。漢では鏡であったものが、その輝きから日神の象徴とされた。その鏡の力を熟知し、日神を崇めたのが卑（ひ）弥呼（みこ）であろう。その故に、共立され、和平が保たれ、数十年間はその状態が続くことになる。大乱が収束すれば、大陸との交易に最大の障害となったのは、半島の公孫氏であった。
　公孫氏は孫権と結び、魏の背後を脅かすかと思えば、孫権が出兵しないとなると、孫権の使者を殺し、魏に寝返るなど、極めてやっかいな存在であった。後に隋の煬帝が高句麗を攻めて、攻めきれず大敗して疲弊したごとく、平壌を落とすことは困難なものがあり、容易には出兵しがたい地である。武帝が衛氏朝鮮を攻めた時も、攻めきれず、衛氏内の分断を図り、内応により右渠や抗戦する大臣を殺さしめて成就したものであった。
　明帝は遼東側から派兵すると同時に、密かに海路、帶方太守劉昕、樂浪太守鮮于嗣を公孫氏の背後に派遣し、その退路を断つ作戦を取った。公孫氏に苦渋を嘗めていた倭人はこれに協力した。一大率を通じて、女王国側はこのような事態に備えていたのであろう。その功を称さねば、魏が卑弥呼の使節を迎え、親魏倭王に任じ金印を授与する使節を送り込んでくることは無かったであろう。卑弥呼の政権は、情勢を読む政治センスに長けていた。

　いよいよこの夢物語も終わろうとしている。倭国の大乱をへて邪馬台国が浮上してくるなかで、大国主命の姿は見えなくなってしまった。大国主命は卑弥呼にもヤマト政権にも「国譲り」をするような立場には無かった。
　もし、大国主命が天下を平定しており、その天下を天照大神に譲ったのであれば、天照大神は即座に皇孫を天の下に降ろし、王に即位させたであろう。しかし、それができない事情があった。「紀」の一書によれば、大国主神の奇魂、幸魂である三輪の大物主神に天の下の統治を任せたとしているが、その後が不明である。記紀によれば、皇孫は霧島に降ろされ、その子孫が六合（天下）の中心たる四周を青山に囲まれた地（奈良盆地）を目指し、東征する。
　天下の中心は、奈良盆地であるとみなされていた。六合の中心で最初の王となったのは卑弥呼の可能性が高い。三角縁神獣鏡の分布状況からもそれが伺える。皇孫がそこを目指した時に、そこにいたのは饒速日命であった。皇孫が戦ったのは、饒速日命であり大国主命は過去の命となっていた。
　しかし、大国主命による「国譲り」は、我が国の国のありようを定めるに、欠くべからざる伝承となっている。中国では、儒家は政権の禅譲を理想としたが果たせず、政権は天命により革められることとなった。我が国における天皇家存続という希有の歴史は、「国譲り」という伝承のうえにあるといっても過言ではあるまい。出雲がヤマトの政権下に入るのは、「紀」ならば、崇神天皇の御世、出雲神宝事件の頃、「記」ならば、倭建命の熊襲平定の頃である。
　その伝承は、出雲国造家とヤマト政権との間で行われた政治決着を反映していよう。それは長い時をかけて醸成されたものであろうが、出雲国造神賀詞に表現された時には、意宇を地盤とする国造家が杵築大社の祭主であったことが反映されていよう。
　神賀詞における出雲国造家の認識は、明御神（高天原の天神）と天皇（地上の皇孫）を守護する宮に坐（ま）すのは、伊射那伎の日真名子、加夫呂伎、熊野大神、櫛御気野命と国造りを為した大穴持命の二神であり、百八十六の出雲の神々がそれに従う。高天の神王、高御魂、神魂が天の下を天穂日命に巡察させると、荒れており、天穂日命の子、天夷鳥命に布都怒志命を添えて平定させ、国を造った大神（天下所造大神）を宥めて現事、顕事から避らしめた。その時、大穴持命は、自分の和魂を八咫鏡に取り付け、倭大物主櫛𤭖玉命として大御和（大三輪）に坐させ、阿遅須伎高孫根命の御魂を葛木の鴨に坐させ、事代主命の御魂を宇奈提に坐させ、賀夜奈流美命の御魂を飛鳥に坐させて、皇孫の近守神とし、自らは八百丹杵築宮に坐した。そして、高御魂、神魂は天穂日命（出雲臣の祖となる）に、天皇の長久の御世を堅固に永久に祝い、盛大なる御世と幸あれと祭れ。そのように後継して祭り、朝日が登るように、神への礼代、臣の礼代と寿ぎの神宝を献れ、と宣られた。後継たる出雲国造家は、明御神がこの国を天・地・日・月と共に安寧に平和に統御されますことを祝ふ象徴として、御祷の神宝を携へ、神への礼代、臣の礼代として、畏れながらも、天穂日命の意（こころ）を継承して言祝ぎます、とする。
　このことからすれば、大穴持命、阿遅須伎高孫根命、事代主命、賀夜奈流美命の子孫が磐余彦命（神武天皇）の東征に寄与していたことを伺わせる。磐余彦命は筑紫に立ち寄り海人族宗像氏の協力を取り付け、安芸で三年準備をしたとされる。瀬戸内海、阿波、紀伊、伊勢にかけて合流するものを求めたことであろう。すでに奈良盆地に入植していた者が応じたものか、その功を以て、祖神をしかるべき地に坐して皇孫の近守神とせしめることを求めたのであろう。その合意が成り立ったようにみえる。また、ヤマト政権の神宝は饒速日命由来のものであり、出雲の神宝をなんとしても手にいれたかったのかもしれない、倭建命の熊襲征伐に協力もしていたのかもしれない。
　ヤマト政権は、天武天皇を現人神とし、天地開闢から一系となる神話を創造するに、出雲の神々を天神の系譜に取り込むことを不可欠としたのかもしれない。大国主神を幽界の主とし、顕界の祭祀と統治に対比させる一書もある。仏教の世界観に対応するために、出雲の幽界、黄泉、常世を取り込み、永遠の顕界と永遠の幽界のなかで政権の安定を保つことが思念されたのかもしれない。
　出雲国造神賀詞と出雲風土記の認識には差異があることはすでにみた。しかし、「国譲り」ということで我が国の根本を為す伝承で決着をみたことには変わりない。

**おわりに**

　「紀」は天武天皇の業績を記すことに眼目があったが、編纂が死後に至り、当初の目的がやや変質したようにみえる。「記」には、天地開闢から天皇の御世に至る一系を創造した特異な意義があった。出雲国風土記や出雲国造神賀詞がなくば、記紀の神話をそのまま受け取るほかなかったのかもしれない。
　平成の世において、象徴天皇の象徴の意味を天皇自らが自問しておられるという。人間天皇、国民主権、三権分立の民主主義、基本的人権などという世界観の中で、象徴天皇などは途方に暮れる設問かと思える。
　天皇とは中国の天皇、地皇、人皇の天皇に由来しよう。中国では天空の主を北辰（天の北極、北極星）とみ、詩経や書経では昊天上帝、後漢になると天皇大帝なる言葉が用いられるようになり、天皇は天地を統治する主体とみなされた。皇は王座の鉞（まさかり）に象嵌された玉の光が放射する様で、王であり聖職者であることを示した。壬申の乱に勝利した大海人皇子は、自らを現人神とする過程で「天皇」と称したと思われる。天上天下の統治を意識していよう。
　平成の日本人は日本を「にほん、にっぽん」、古風な人なら「ひのもと」とよむ。「やまと」とよむ人はまれであろう。古代には、我が国は倭と称された。ヤマト政権であろうと、中国側は「倭」としたため、倭を「やまと」と訓じた。これから脱却するために「やまと」に日本を用いた。「記」の倭建（やまとたける）命を「紀」は日本武（やまとたける）尊とした。日本（やまと）書紀というべきかもしれない。
　天皇も「てんおう」ではなく元来は「すめらみこと」であった。あるいは、「おほきみ」と称されてもいたものに天皇という漢字をあてたといえよう。「きみ」は地方の豪族の長のこと、その長達のトップが「おほきみ」である。白川静氏によれば、「すめら」は「統べる」からくるという説があるが、「め」が甲類で「べ」が乙類であり該当しない、吉田金彦氏の「淸めら」説をよしとされる。「みこと」は御言、おっしゃられたことである。淸言とは「清き明（あか）き心」から発せられることばである。「すめらみこと」はそれを象徴する存在であってほしいということではなかろうか。さもなくば、「国譲り」は成就することはなかったであろう。幕末の大政奉還、江戸城無血開城もその伝統と無縁ではあるまい。

了　2018年1月10日。訂正、追加、更新　2022年3月8日。